
METAL GEAR SOLID ~ BIG BOSSの軌跡 ~

John.Doe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

METAL GEAR SOLID〜BIG BOSSの軌跡〜

【Nコード】

N2365U

【作者名】

John・Doe

【あらすじ】

1964年、キューバ危機という全面核戦争の危機から二年。再び冷戦下の世界は全面核戦争の危機に陥った。その危機を回避すべく、一人の男がソ連上空にガンシップから飛び降りる。メタルギアを巡る物語は、ここから始まった

METAL GEAR SOLID3、METAL GEAR SOLID PEACE ALKERをノベライズ。

冷戦下に繰り広げられる静かで熱い諜報合戦。その先にあったのは

プロローグ

第二次大戦後、世界は東西に二分された。
冷戦と呼ばれる時代の幕開けである

1964年8月24日AM5:30パキスタン上空

一機のガンシップが飛行している。灰色の機体を持ち、高度三万フィートを飛行するそれに、ある特殊部隊が搭乗していた。

「間もなくソ連領空に近付きます」

ガンシップのパイロットが告げ、続けてアナウンスが流れる。

『降下20分前……機内減圧開始』

『装備チェック』

『アームメインパラシュート（自動開傘装置のアーミングピンを外せ）』

『よし、準備はいいか』

それまでのアナウンスとは違い、洪みを持った声に変わる。

『高気圧、依然として目標地域に停滞中』

すかさずアナウンスの時の声に変わり、気象状況を告げる。

『雲底高度、視程無現！』

『いいぞ、視界は良好だ』

ガンシップの後部ハッチ。そこに、一人の男が腰かけている。葉巻に火をつけ、後ろには大きなバッグその他を背負っている。白と金の中間のようなどちらかといえれば長めの髪、青い透き通った目、

そしてゆつたりとした動作は、この軍用ガンシップに一見ミスマツチしており、その実とても似合っている。

「葉巻を消せ」

その男の対面に立っていたヘルメットの男が、彼に注意する。この後に減圧する機内では、煙草や葉巻はたいへん危険であるからだ。

「酸素ホースを気体のコネクタに接続……」

再びアナウンスが流れる。

「マスク装着せよ」

しかし、彼が動じる気配は無く未だに葉巻を吸っている。

「……あの優男素人か？」

彼に背を向け、男は小さな声で呟く。

「リリースポイント降下地点に接近中……降下10分前」

「おいっ！ 聞こえたか？」

再び渋い声の方の男が彼に注意を促す。未だに葉巻を吸っているためだ。

「葉巻を消してマスクを装着しろ」

その声に左右に小さく首を振り、彼は左に向かい葉巻を投げ捨てる。その方向は後に開く後部ハッチだ。数秒の滞空を終え、金属製の機体の上に落ちる。

その後マスクを落ち着いた様子で装着し、同時に橙色のランプが点灯する。

「機内の減圧完了。酸素供給状態確認」

「降下6分前！ 後部ハッチ開きます！」

彼は少しだけ首を左に向ける。と、直後にゆつくりと後部ハッチが開放される。眩い光が入りこみ、同時に強い風が吹き込んでくる。

「日の出です……」

そのアナウンスと共に後部ハッチが完全に開ききる。

「外気温度、摂氏マイナス46度」

「スタンドアップ降下2分前……起立せよ」

ゆつくりと彼は立ち上がり、後部ハッチを再び見やる。

『時速130マイルで降下する。風速冷却での凍傷に注意しろ』
再び渋い声の方の男が彼に注意をする。

『降下1分前……後部に移動せよ』

その声にゆっくり後部ハッチに移動し始める。

『ペイルアウトボトル
酸素装置作動』

『これが記録に残る世界初のHALO降下になる……』

しみじみと呟く渋い声の方の男。HALO降下……高高度から降下を開始し、超低高度で開傘する技術であり、レーダーなどで捉えにくいのが特徴である。

転がってきた葉巻を靴裏で強制的に消火し、そのままゆっくりと前進する。

『降下10秒前……スタンバイ』

後部ハッチの淵一歩手前にスタンバイする彼。

『全て正常、オールグリーン!』

橙色のランプ二つが、緑色のランプに変わる。あとは飛び立つのみ

『降下準備……カウント……5 4 3』

淵ギリギリに立つ。

『2 1』

『鳥になってこい! 幸運を祈る!』

体を前に傾け、彼が 後に「英雄」と呼ばれる男が今、飛び立った。

前方向へいくらか回転し、その勢いは少しずつ速くなっていく。やがて膝を抱えうずくまるような大勢になり、五回程の回転を経てヘッドダウンの体勢となる。

空気抵抗が大きく減った事で急加速し、ガンシップのいる高度から彼を目視する事は、もはや不可能となった。

プロローグ（後書き）

と、いうわけでお待たせしました（？）、いよいよ本格連載のスタートです。また、ここ後書きには作中で出てきた技術、事件、武器、装備、そのほかについて解説していきます。もし何かわからない語がありましたらご参照ください。また、記入漏れ、そのほかわからない語がある、などなどは感想と同じくバンバンご記入お願いします。できる限りお答えし、こちらにも追記していきます。

HALO降下：HALO High Altitude Low Opening 日本語訳高高度降下低高度開傘。パラシュート降下による潜入の際用いる、視認外の10000m前後から飛び、300m前後でパラシュートをひらき開傘時間を短くする技術。上記のことから察知されにくく、また対応できる状況が多い上に、ある程度の技術さえあれば危険性に関してもほかの方法と大差ない（300km/h以上に加速せず、空気抵抗で減速できるため）。ただし、飛び降りる時の航空機には減圧装置が必要不可欠である他、酸素供給システム、防寒装備が必要である。

あ、ちなみにゲーム内での最初の選択肢（METAL GEAR SOLID が好きだ！ というあれ）を変更しました。どれになったかは本編、および後の物語でご確認ください。

フリーフィンゲ

「ジャック、よく聞いてくれ」

ジャック……そう呼ばれた人物に話しかけたのは、HALO降下する際に彼にいくらか話しかけていた渋い声の男性だ。白くなった髪とひげ、なにより左目に出来た傷が特徴的だ。

「遂にCIA長官からバーチャスミッションの許可が出た」

「VRミッション？」

「我々FOX部隊の存在意義をかけた貞淑なミッションだ。これが成功すれば正式に部隊として編成される」

「貞淑なミッション？」

ジャックと呼ばれた男が葉巻を一旦口から離しオウム返しに聞き返す。

「忠誠を誓う儀式みたいなものだな」

「気を抜くんじゃない。あくまでも実戦だ」

皮肉を言うジャックに釘をさす。そう、彼らは軍人。例え儀式だろうが任務は任務、常に危険と隣り合わせだ。

「わかつている。で、その記念すべき任務の内容は？」

「うむ……約二年前……ソ連のある科学者が西側への亡命を申し出た。我々の潜伏モール工作員を通じてな。

ニコライ・ステパノビッチ・ソコロフ。ソ連の兵器開発を担当する秘密設計局のひとつ、OKB-754の局長であり東側の兵器開発における第一人者だ」

「ソコロフというと、あのロケット開発で有名な？」

「そう、そのソコロフだ」

満足、と言わんばかりに肯定する。

「1961年4月12日、ソ連は人類初の有人宇宙飛行に成功した」

「地球は青かった　　だが神はいなかった」

「ああ」

ガガーリンの有名な台詞だ。窓から見えた宇宙から見た地球……それを表した言葉はマスコミを通じて西側諸国にまで知られていた。「そのガガーリン少佐を宇宙まで送り届けたのがA1ロケット。通称ヴォストークロケットだ。」

ソコロフはそこで使用されたマルチエンジン・クラスターの完成に最も功績のあった人物とされている。有人宇宙飛行の成功後、ソコロフはロケット開発を離れ、新設された秘密設計局の局長へ就任した」

「一技師が設計局の局長に……たいした出世じゃないか。なぜ亡命を？」

理由が全く分からない……そうジャックは尋ねる。

「自分が設計、開発したものが恐ろしくなったらしい。良心の呵責という奴だ」

「その為に国も家族も捨て、オバー・ザェンス国境越えを？」

「いや、家族も西側で保護するというのが彼の出した条件だった。

我々は潜伏モル工作員を使って家族を先に脱出させ、間をおかずソコロフ本人にもベルリンの壁を越えさせることに成功した。その亡命作戦の指揮を取ったのがこの私だった」

昔を懐かしむような、それでいて既に過去の記憶と割り切っているような言い方だ。

「まだ東側の警備が薄かった頃だ。それで？」
ジャックは先を促す。

「ソコロフの身柄は保護したが体力の消耗が著しく、西ベルリンの病院に入院させた。ソ連の設計局から600マイル以上、2週間かかってベルリンまでたどり着いたらしい。まともに口がきけるような状態ではなかった。」

そのわずか一週間後だ。あの一大事件が起こったのは「
「キューバ危機か……」

「1962年10月16日。キューバにソ連の中距離弾道弾が配備されつつあるという情報がケネディ大統領の下へ届けられた。大統領

領はソ連へミサイルの解体・撤去を要求し、同時に新たなミサイルの搬入を阻止するため海上封鎖を実行すると宣言した。

だがソ連はそれには応じず第二次戦備態勢を指令、ミサイルを積んだソ連輸送船団も依然キューバを目指しつづけた。米ソ両国は全面核戦争への臨戦態勢に投入、一触即発の睨みあいの中、国連緊急安保理事会や非公式の接触を通じた必死の交渉が行われた。

そしてついに10月28日。ソ連はキューバからのミサイル撤去に同意、世界は全面核戦争の危機を脱した……だがソ連がミサイルを引き揚げた裏にはある取引があったんだ」

「アメリカもトルコから中距離弾道弾を撤去するという話か？」

「いいや。トルコに配備されていたジユピター型IRBMは旧式で、いずれにせよ撤去される予定だった。米ソ双方にとって戦略的な意味合いはない。トルコの件は偽装だ。業界の同業者たちへ流す^{カバーストーリー}だけだよ」

「では本当の条件とは？」

「ソコロフだ。西側に亡命したソコロフの送還だ」

「ソ連のキューバ撤退はソコロフ一人を手に入れることと引き換えだった？」

「そうだ」

「……彼は一体何を設計していたんだ？」

「その時の我々には何も分からなかった。タイムリミットは迫っていた。ソコロフという一人の博士か？ 全面核戦争か？」

選択の余地はなかった。ケネディ大統領はフルシチョフの要求をのんだ。翌日、私はソコロフを病院から出し、東側の局員^{KGB}に引き渡した。ソコロフは『助けてくれ！』と叫び続けていた。見えなくなるまで。

そして一か月前。我々の潜伏^{モール}工作員から再び情報が入った」

「ソコロフについてか？」

「うむ。ソコロフは設計局に連れ戻されKGBの監視下で、例の兵

器の開発を続けさせられているらしい。しかもそれは完成直前ということだ」

「で、その兵器とは？ 宇宙ロケットに関するものか？」

「いや、ミサイルの方だ」

「どちらと同じ技術だ」

「そうだな。とにかく詳細は分からんが特殊な核兵器の一種らしい。この半年、ソ連のセミパラチンクスで頻繁に核実験が繰り返されている」

「この兵器に関係すると？」

「フルシチョフがキューバからの撤退を受けてまで取りかえしたかった極秘兵器だ」

「その設計局に今もソコロフがいる？」

「いや、情報によるとその西3マイルにあるツェリノヤルスク、処女地のある絶壁処女地のある絶壁という山の中だ」

「ツェリノヤルスク……バーチャスミッションにふさわしいな」

「最近、そこに移されたらしい」

「どうして？」

「兵器の野外実験演習らしい。だが奪還には好都合だ。もし設計局内であったなら今回の任務は立案されなかったろう。最後のチャンスだ、ソコロフもそれで連絡を取ってきたに違いない」

フリーフィンゲ（後書き）

キューバ危機：アメリカのすぐ南にあるキューバにて、全面核戦争一步手前まで達した文字通り「危機」的状況。ソ連のIRBM配置など、両国間の緊張が史上最も高まったといわれ、広島、長崎への原爆投下すら上回る全面核戦争へのステップになりかねなかった。

IRBM：IRBM=Intermediate-Range Ballistic Missile 中距離弾道ミサイル。射程が3000〜5500m程度のもの。ヨーロッパ近辺が戦地になったときを想定しているという（冷戦下当時）。現在ではミサイル射程距離が上がり、保有国が所持する数も増加傾向にある。

ドレムチイ・未踏の森 前編

落下による空気抵抗で野戦服がバタバタと音を立てる。その音を聞きながらジャックはツエリノヤルスク目掛け降下していた。

しばらくの後、ヘッドダウンの体勢だったのを地面と平行になるよう姿勢を変え、空気抵抗を増やして減速する。野戦服が立てる音が大きくなるが一切気にしない。

『いいか、君の任務はソ連国内の山中、ツエリノヤルスクに単独潜入、ソコロフの安全を確保、西側へ奪還する事だ。例の兵器が完成する前にソコロフを奪還しなくては大変なことになる。遺された時間はわずかだ』

リングを引き、ラウンド型のパラシュートを開傘させる。一気に増した空気抵抗に、逆に上空に引っ張られるような感覚になる。

『ソコロフ救助確認後、回収地点リカハリーポイントで待て！ 回収用気球をポイントに降下する。ヘリウムが噴出して気球を膨らませるその間20分…その後、ガンシップの髭アームで引っかけてつり上げる』

「フルトン回収システムだな。理論は聞いたことがある」
マスクを被っている為、若干ジャックの声はくぐもっている。

『安心しろ、実績もあるシステムだ』

「ソコロフは耐えられるのか？」

『衝撃はパラシュート降下時より少ない。アームの強度も500ポンドまでは大丈夫だ』

「つまり、コンバットタロン一機で国境を越えてくるつもりか？」

『本機は6連装20mmバルカンカノンを2門と、40mm機関砲を2門搭載している』

「戦車隊に追撃されても蹴散らしてもらえそうだな」

『予備タンクの燃料を考えてもタイムリミットは4時間……順調にいけば数時間で終わるミッションだ』

「夕食には帰れそうだな」

『もしスムーズに運ばなければ……夕食だけではなく朝食も、今後の食事はジャングルで取ることになる』

高度が低下し、森林の中へ突っ込む。木々がジャックに当たり、体勢を保つのに苦勞してしまふ。

そんな状況である為、ジャックに木の枝が直撃し、バックバックが引っかかってしまふ。後ろをみれば、その木の枝にバックバックが引っかかってしまったらしい。

崖目前、ジャックは己とパラシュートを切り離して一気に着地を試みる。四つん這いの体勢で地面をしっかりと捉え、眼前に崖が広がる中着地に成功する。背後にゆっくりとパラシュートが落下し、萎びるように地面についた。

数秒後、前を睨んだジャック。おもむろに立ち上がり、体に付けた様々な器具を乱暴に外していく。高度計を外し、最後にマスクの顎部分を掴み、引っぺがす。先程の、少し長めの城と金の中間のような髪と青い目が特徴的で、今はオリブドラブ迷彩を着た男が姿を現す。

辺りを見回ししばらく経つと、ジャックに無線が入った。

『聞こえるか？　そこは既に敵地領内だ。傍受される危険性がある。今後はお互い、暗号名コードネームで呼びあうこととする。』

君の本ミッションでのコードネームはネイキッドnamed・スネークだ。

以降はスネークと呼ぶ。本名は口にするな』

「蛇スネーク？」

『蛇は嫌いか？』

「嫌い？　どういう意味だ？」

『食べたことはあるな？』

「サバイバル訓練では」

『それはよかった』

「レストランで注文するほど好きではないが」

『そもも言っていられないかもな』

「ゼロ少佐。そっちは、どう呼ばいい？」

『そつだな……………私は……………私はトムだ。トム少佐と呼んでくれ。それとスネーク？』

「なんだ？」

『もうシツプクルーの目はない。変装を解いてもいいぞ』

「そつだな。こいつは、どうもしっくり来ない」

『蛇は脱皮するものだ』

無線を切り立ちあがると、彼はおもむろに自らの顎に手をやり、力を加える。まるで皮膚がはがれるかのように、変装マスクが彼の顔から離れる。その変装マスクを脱ぎ捨てたジャック……………少し濃いブラウンの短くも長くもない髪と、先程と同じく青い透き通るような目。口元を覆う髭は、決して無精髭ではなく、彼の雰囲気をいわゆるダンディズムの方向に近付ける。スプリッターフェイスペイントを施したその顔は、既に戦場の戦士に相応しい顔つきになっている。

そよ風に揺られ、はらはらと木の葉が舞い落ちるその様をしばらく体全体で味わう。

ふつと我に帰り、木の陰に身を隠し人影が無い事を確認すると、再び無線機のスイッチに手を伸ばした。

「トム少佐、聞こえるか？ こちらスネーク。待たせたな」

にやり、と笑みを浮かべているのかと想像できる声で、彼はトム少佐に声をかけた。

『今回のミッションはスーキング隠密潜入任務だ。敵に見つかってはならない。潜入の形跡も悟られてはいけない。わかるか？ それが隠密部隊「FOX」の特殊任務だ。つまり、武器も装備も現地調達……………食料もだ。まさに丸裸、ネイキッドの状態だ』

「なるほど。『蛇は嫌いか？』と聞いた意味がわかった。俺の名前をスネークにしたのは皮肉のつもりか？」

『いや、それにはちゃんと理由がある。しかるべき時に教えてやる』

「ああ、わかった。それでさっきの話だが、食料はどうやって調達すればいい？」

『ナイフと麻醉銃を用意した。それで捕獲キャプチャーしてくれ。他に治療用CUREの備品もバックパックに入れてある』

「バックパックか………降下した時、木にもって行かれてしまった」

『うむ。ではまずバックパックを回収しろ。場所はわかるか？』

「大丈夫だ。ここから見える」

木の陰から少しだけ顔を出せば、そこには先程バックパックが引っかけた木が見える。

「木の枝に引っかけてるな………」

『木に登るには木に絡まったツタを登ればいい。』

私は君をずっと無線機でモニターしている。領空侵犯はできないが、機内にいる。周波数は140.85だ。こちらから連絡がある場合はCALLする。そちらから話があるときはSENDしてくれ。さあ、スネーク。バックパックを回収しろ』

無線を切り、立ちあがって木のある方向を見やる。そこに行くには倒木の下をくぐるか、少々高めの場所がある為そこから降りるかだ。スネークは後者のルートをとることにした。

足首を覆う程度の草むらを踏み越え、その高めの場所に辿り着いた。崖のようになっていてそこは、下までおよそ3m位といったところか。躊躇なく飛び下り、何事もなく着地する。木の根元に小走りで寄り、その木に絡まったツタに手と足をかけて登り始めた。

目的の枝を確認し、自身の体重で折れないことを確認しながら移動する。落ちぬよう慎重に枝の先端三分の一程まで行くと、バックパックに手が届く。エルードで木にぶら下がって地面との距離を縮め、

同時にバックパックを回収する。

木の枝から手を離し、草むらにしゃがんで隠れると三度無線機のスイッチに手を伸ばした。

「スネーク、バックパックを回収したようだな。武器を使用するには、まずバックパックから取り出して身につける必要がある。バックパックの中から身につけたいものを選んで装備するんだ。装備品についても同じだ」

「わかった」

「本ミツシヨンの重きはサバイバルにある。作戦行動が長引けば、君のスタミナも減っていくだろう。スタミナが低下すれば、正確な射撃ができなくなったり、傷の治りが悪くなるなど作戦行動に支障が出てくるはずだ。スタミナ切れには充分注意してくれ。」

減ったスタミナを回復させるには、ジャングルに生息する動植物キャプチャーを捕獲して食べるという。動植物は麻醉銃でもナイフでも捕獲可能キャプチャーだ」

「武器は麻醉銃、Mk22ハッシューパーのみか？」

「そうだ。専用のサブレッサーが装着してある。ただし、サブレッサーは発砲することに劣化していく。耐久度がゼロになると消音効果が無くなるぞ。乱用は避けるんだ。」

今装備している武器、装備以外は現地調達だ」

「装備も武器も現地調達とは……こんな無茶がよく通ったものだ」
「単独での隠密行動が「FOX」の基本戦略だ。決して痕跡を残してはならない。持ちこんだ武器、装備、足跡、汗、排泄物に至るまで………弾丸も薬莖もな。」

そこは既に不正規戦下の敵地内だ。米兵は存在してはならない。国際問題になる。誰にも見られてはいけない。君の存在を敵に悟られてはいけない。それがステルス任務だ。スネーク、そこでの君は文字通り幽霊ゴーストなんだ。捕まっても救助はない。当局も米政府も一切の関与を否定する」

「自分で始末をつける？」

『そういうことになる。その為に仮死薬を持たせた。SIS等では今回のような秘密工作カバードオペレーションでは青酸カリのカプセルを持たせる。いつでも飲めるように体にテーピングしておくんだ』

「優しさに感謝する」

『敵の捕虜になった時に使うんだ。しばらくの間、仮死状態になる』
「敵の目をあざむけるといことだな。で、生き返るには？」

『蘇生薬を飲めばいい』

「作戦前に奥歯に仕込まれたアレか」

『そうだ。だが気をつける。長く仮死状態でいすぎると、こちらの世界へは二度と帰ってこられなくなる。覚えておけよ』

「わかった。単独潜入と言ったな？」

『ああ』

「ということは支援は期待できない？」

『そうだ。現場任務は全て君一人にかかっている』

「まさにワンマンアーミーか」

『寂しがるな。無線で君をバックアップするサポートチームはいる』
「誰が？」

『紹介しよう、今回の任務ではサバイバルが重要な鍵キになる。君の体調管理、いわば衛生兵メディックと記録を担当するスタッフだ。彼女も「FOX」の一員だ。そして彼女もこのガンシップに同乗している』
「彼女？」

『こんにちは。私はパラメディック。よろしくね』

トム少佐と違い高めの女性の声に変わる。彼女が衛生兵兼記録を担当するスタッフらしい。

「パラ……メディック？」

『パラシユートで駆けつけるメディックの意味よ』

「女性からは本名を聞きたいものだが」

『それはお互い様でしょ？ 蛇さんスネーク』

「俺の名前なら……ジヨン・ドウだ」

『それでジャックなの？ まるでネモ船長ね？』

「俺の名前はどうでもいい。戦場では意味が無い。君の名前は？」

『ジエーン・ドウ』

「ふざけないでくれ」

『ふざけてないわ。生きて帰れたら教えてあげる。私の周波数は1

45・73よ』

『また彼女には任務の記録も担当して貰う。記録したいときは記録用の専用回線、周波数140・96にSENDしてくれ』

「任務の記録だな？」

『そう、それとあなたの健康状態の記録も』

「わかった」

『スネーク、それからもう一人、紹介したい人がいる』

その言葉に、スネークの頭には疑問符が浮かぶ。

『スネーク、蛇といえばザ・ボスを知ってるな？ お前の師匠であり、伝説の兵士……実は長官から本ミッションの実行許可を取りつけてくれたのがザ・ボスなんだ。彼女が「FOX」のミッション・アドバイザーを務めてくれる』

「ザ・ボスが？」

『ミッションの立案にもザ・ボスが協力してくれた。彼女と私はSASで同期だったんだ』

『ジャック、聞こえる？ 何年ぶりかしら？』

「ボス？」

『そう、私よ』

戸惑いを見せるスネーク、いや、ジャック。

『返事をして、声を聞かせてくれる？』

「ああ、5年と72日18時間ぶりだ」

サラリ、と今まで会っていなかった時間を答えるジャック。

『少しやせたようね？』

「声だけでわかるのか？」

『わかるわ。あなたのことだから』

同じくサラリと言ったのける。常人なら到底出来ない会話だ。

「そうか。俺にはあんたのことがわからない」

『何が言いたいの？』

「……どうして突然、俺の前から消えたんだ？」

『極秘ミッションだったのよ』

納得しきれない、というふうに黙ってしまう。

『あなたはもう一人前だったわ』

「いや、まだ教えて貰いたいことがあった」

『いいえ、戦闘の技術は全て教えた。何もかもあなたに教えた。後はあなたが自ら学ぶこと』

「確かに技術は。しかし、兵士としての精神は」

『兵士としての精神？ それは教えられない。心技体……この中で他人から教わるができるのは技術だけ。むしろ、技術はどうでもいいの。大切なのはこころよ。心と体は対をなす、同じモノ。精神を教えることは出来ない。自分で習得するしかないわ。』

いい？ 兵士はいつも同じ側とはかぎらない。兵士同士が個人的な感情を持つのは御法度よ。戦闘相手は政治によって変わる。政治は生き物、常に時代は移り変わる。昨日の正義は今日の悪かもしれない』

「それが俺を捨てた理由？」

『違うわ、あなたには関係ない。言ったでしょう、ジャック。極秘ミッションだったの。軍人はどんな命令でも従わなければならない理由や精査は必要ない。だけどあなたは闘う理由を求める。あなたは優れた兵士だけれど軍人になりきれないところがあるのよ。軍人は政治の道具で過ぎない。ましてや職業軍人なら。任務に正義を持ちこむことはない。敵も味方もない。ただ任務でしかない。どんな

命令にも従う。これが軍人よ』

「俺は成果を上げるために持てる力を使う。政治的なものは意識しない」

「それは違うわ。いずれ、悩む時が来るはず。軍人として生きるか、兵士として生きるか……」

東洋では「忠を尽くす」という言葉がある……意味分かる？』

「主君への……愛国心？」

『国への献身』

「俺も大統領や軍のトップに従う。そのために死ねる覚悟だ」

『大統領も軍のトップも普遍ではない。任期が終われば変わる』

「上が変わっても、俺はトップの意向に従う」

『任務は人が下しているものじゃない』

「では誰が？」

『「時代」よ。時の流れは人の価値観を変える。国の指導者も替わる。だから「絶対敵」なんてものはない。私達は時代の中で、絶えず変化する「相対敵」と戦っているの』

再び黙るジャック。

『「忠をつくしている」限り、私たちに信じていいものはない……たとえばそれが愛した相手でも』

「それが軍人としての精神？」

『ただひとつ、絶対に信じられるのは……「任務」だけよ、ジャック』

「わかった。だが言わせてくれ」

『何？』

「俺はスネークだ」

『蛇？ スネーク そう、スネークだったわね。ふさわしいコードネーム』

『そうだ。第二次大戦中、ザ・ボスが編成した伝説の部隊も蛇だった。コブラ部隊……大戦を終結させ、世界を救ったヒーロー……』

伝説のヒーローがサポートしてくれれば大丈夫だ。スネーク、そうだろうか？』

「わかった。ボス、あんた以上に心強い人はいない。それと……」

『ええ？』

「また声が聞けてうれしい」

『そうね。お互い、いつ死んでもおかしくない身だもの……スネーク、あなたは市街戦や建造物への潜入ミッションは得意だったわね。でも今回はジャングル。サバイバルが重要になるわ。私が教えたCQCも役に立つはず』

「CQC、クローズ・クォーター・コンバットか……この数年はグリーンベレーにいた。かなり鈍っているかもしれない」

『大丈夫よ。私がサポートしてあげる。サバイバル下での潜入ミッションは初めてでしょう？ 無線機でサポートするわ』

「ボスはどこに？ 少佐のそばか？」

『ザ・ボスは北極海のパーミット級原潜から無線で参加している』

『私の周波数は141・80よ。戦闘技術についてアドバイスをほしければ連絡して』

「了解」

『君の任務はソコロフ設計局局長の奪還だ。ソコロフ博士は君が今いる場所から北に行った所にある廃工場に監禁されている。極力戦闘を避け、見つからずに行動するんだ。ステルス任務であることを忘れるな』

『スネーク、まずCQCの基本を思い出して……』

左手で左胸部に収納された灰色の小ぶりなナイフを抜く。逆手に構え、右手にハツシユパイプを持ち、そのまま両手持ちに変える。そのまま少し、感覚を取り戻すように当たりを見回す。振りかえり、少しだけ潜めた声で呟く。

「今から……バーチャスミッションを開始する」

ドレムチイ・未踏の森 前編（後書き）

フルトン回収システム：小さな気球をヘリウムで膨らませて航空機で回収するシステム。もとは郵便配達システムのシステムだった。航空機を着陸させるといふリスクがないシステムである。ベトナム戦争で空軍などが利用した。

オリーブドラブ：緑単色の迷彩服。迷彩の聡明期に使われたもので、次第に明細の重要性が認知されるにつれ見かけなくなる。本作中でもネイキッド以上に見せ場がないことも多い。最速クリアを目指す際にはそのまま進むこともあるが……

スプリッター：屋内で使用することも多い。もとは航空機などが敵に方向を誤認させるためのものだったらしい。

Mk22：S & W社製M39のバリエーション。実銃は実弾を使用するが、本作では麻醉銃に改造されている。隠密行動用に作られているため、消音効果を高めるべく亜音速特殊弾（実弾）や専用のサプレッサーを使用するほか、スライド音を抑えるためにスライド・ストップ（スライド・ロック）機構を採用している。しかし、それ故に一発ごとに手動でのスライドが必要になっている。また、サプレッサー装着時でも狙いをつけることができるようアイアンサイトは大型になっている。

別名は「ハツシユパピー」。これを与えらるとうるさく吠える狩猟犬でもおとなしくなるように、この銃で撃たれた人間は死んで静かになるということからこう呼ばれるようになった。

ジョン・ドウ/ジエーン・ドウ：筆者のペンネームでもある。ジョンの方は男性、ジエーンの方は女性版のいわゆる「名無しの権兵

衛」である。身元不明死体の呼称になることもある（隠語である）。ちなみにネモ船長のネモはラテン語版名無しの権兵衛「nemor」からきている。

SAS: Special Air Serviceが正式名称。イギリス陸軍の、敵陣内での主要施設（通信、輸送など）の潜入破壊工事を専門とする、世界最初の特種部隊である。デビッド・スターリング少佐により提案されたものであり、航空機を破壊するために、その知識や操縦経験を持つ者も多く集められた。そして先と同様の特殊任務を行っていたL.R.D.G (Long Range Desert Group)と共同し、1941年から実戦投入された。創設当時のSASは戦後のような人質救出訓練などは行われておらず、ドイツアフリカ軍団の補給線や飛行場を攻撃する小規模な部隊であった。また「Special Air Service」 という名称は、当初64名しかいない部隊に「SAS旅団L分遣隊」という、より大規模な上位の精鋭空挺部隊が存在し、その一部であるかのように偽装して名付けられ、以降もそのまま使われているものである。ちなみに、シリーズ作品「METAL GEAR SOLID2」で、イロコイ・プリスキン中尉ことソリッド・スネークは、SEALsの中尉を名乗りながらもSASの標語的な言葉である、Who Dares Wins（挑む者に勝利あり／危険を冒す者が勝利する／敢えて挑んだ者が勝つ）、と発言している。

CQC: 近接戦闘術。本作ではザ・ボスとスネークの編み出した武術となっているが、実際は近接戦闘すべてを指すため決まった型などは存在しない。本作では敵の無音排除を目的に作り上げられた拘束、投げ、間接など、様々な要素からなる。ちなみに、後に出てくるヴォルギンからは「ジュウドー」と呼ばれるが柔道に拘束なんて寝技などしかない。ついでに間接を極めて投げる技はほぼない（

はず)。陸奥圓明流の方がよっぽど近い(修羅の門参照)。

沢のようになってい草むらを進んでいくと、一本道のようになっているようだ。足元に気を付けつつ、敵兵がいなくても限らないために慎重に進んでいく。

しばらく進むと、目の前には明らかにドロドロとしている水質の沼が広がっていた。

(あれは……ワニか!?)

目の前の沼にいくらかいたのは新緑の体に長いクチバシのような
罅……いわゆるガビアルというものだ。

刺激を与えてしまわないようにゆっくりと音を立てながら近づくと、尻尾を鞭のようにしならせ、打ち付けてくる。間一髪かわし、少し距離を取る。危険だと判断したスネークは、さつさと進んでしまおうと考えて、あたりを見回した。

すると、先程来た道の対角線上に道が見える。おそらく地図的にもそちらが目的地への道だ。となると……必然的にこの沼を通過する必要があるらしい。

少し足を入れてみる。すると、かなりの弾力があることがわかるほど足が押し返される感触があった。例えるならそう、コールタールのような感じだ。だが、こうなると厄介な問題がある。

(一度沈み込めば助からない、か……)

ここまで粘性があり、弾力性があるとはいえ体重で簡単に沈み込むような沼だ。もし沈み切ってしまうえば自力での脱出は不可能……

スネークはもう一度沼を見渡す。すると、ちょうど二つの岸の間に、ぽつかりと小島が浮いているように小さな陸地がある。そこを経由していけばいいだろう。しかし、そこには先程と同じガビアルと、八チの巣らしきものも見える。先に無力化できないかと考えるが……眠らせることでガビアルを無力化しても八チはどうにもできないし、近くを走れば起きてしまうだろう。結局はあきらめて、素

早く経由を済ませることにした。

ズブズブと沈み込む感覚に焦りつつ、しかし決して取り乱すことなく小島へ到達する。膝を余裕で覆い隠すほど埋まってしまい、危うく腰まで行くところだった。再び沼に足を踏み入れ、急ぎ気味に対岸へと渡りきった。迷彩服に染みている泥や水分で少し重いが気にするほどでもない。そのまま北の方向へと歩みを進めていった。

少し進むと大きく視界が開けた。森と形容するに相応しい場所である。

遠くに何かを見つけたらしくスネークは木陰に身を隠し、半身だけ身を乗り出して確認する。するとしゃがみつつ腰から双眼鏡をとりにだして覗き始めた。

双眼鏡越しに見えたのは二人の兵士。緑色の軍服に、少し枯草のような色のフード。一人は巨大な無線機を背負っている。

「少佐、敵兵を二名発見……」

無線のスイッチを入れ、トム少佐に話しかけた。

『おそらくソコロフを見張っているKGBの兵士だ』

トム少佐の応答が返ってきた。確かに、研究所付近のこの森なら見張りがいてもおかしくない。

「AK-47にグレネードか……」

『スネーク、君は既にソ連領土に不法侵入しているんだ。CIAやアメリカ政府の関与をソ連政府に悟られてはならない。敵との接触は禁じる。戦闘もさける。隠密行動だ。いいな』

『少佐の言う通り、本作戦はジャングルでの隠密潜入が基本になる。本作戦の成否は偽装にかかってくるわ。その場所に溶け込むような迷彩を選べば、高い偽装効果が得られるわ。』

森の中では動くものが目立つということも忘れないで。迂闊に立って走れば、すぐに気配を察知されてしまうわ。その場でホフクし

ていれば、見つからずにやり過ごすこともできるはず。重要なのは、自然とひとつになることよ。カムフラージュを常に意識して進みなさい。いいわね』

ザ・ボスのアドバイスに従い、ひとまず自分の周りを確認する。草むらにかくれ、バックパックにしまつてあるいくらかの迷彩服の中からタイガーストライプ迷彩に着替え、専用の塗装具でウッドランドペイントを顔に施していく。これでオリブドラブ迷彩のみより、かなり森に溶け込みやすくなったはずだ。

少し進んで、もとは立派な気だったのであろう倒木の根元に身を隠す。しばらくすると、一人の敵兵がこちらに近づいてきている。こちらに気付いている様子はないので巡回ルートなのだろう。鼓動を早める心臓につられて心にも焦りが出てくる。必死にそれを抑え、息を殺す。

自分の真横に敵兵が来た瞬間を見計らい、今度は倒木の根元を敵兵とはさむように移動しなおしていく。少し敵兵が進んだところで歩みを止めた。その期を逃すはずもなく、半身身を乗り出してMk 22を敵兵の頭部に向け、引き金を引く。サプレッサーにより空気の抜けるような音だけが鳴り、頭部に麻酔針が命中した敵兵は一瞬だけ呻いて睡魔に負けた。

念のため草むらに敵兵を運んで隠す。その敵兵が目を覚まさないうちにスネークは更に奥を目指した。

途中、一本の分かれ道がある。そこをやはり半身だけ乗り出して様子を伺うと、僅かではあるが敵兵の背中が見えた。間もなく視界を遮る壁の向こうにいつてしまったが、どうやらここには二人以上敵兵がいるようだ。改めて慎重に歩を進め始める。

すると先程確認したもう一人の敵兵。重そうな大きな無線機を背負う兵士だ。草むらにホフクで身を隠して耳を澄ませる。近くで聞こえる足音は今前方にいる敵兵だけ。その体勢のまま再びMk 22

の引き金を引いて麻醉針を打ち込む。間もなく睡魔に勝てなかった敵兵が倒れ、スネークはそれが見つからぬよう再び草むらにかくした。

少し場所をずらして様子を伺うと、こちらが進むべき道が見えた。そして、そのルートで気付きうる敵兵は一人。もう一人遠くにいるがこちらに気付くことができる距離ではないだろう。草むらに身を隠したまま様子を伺い、再びMk22の引き金を引いて眠らせる。今度は草むらがなくなり、敵兵に見つかりやすい位置で眠らせてしまったため迂闊に敵兵を移動できない。仕方がないのでそのまま放置することにし、上り坂になっている道を駆け上がった。

しばらく進み、再び木陰に身を隠す。今度は双眼鏡を使わずとも敵兵を視認できる距離だが、流石に細かい観察まではできない。再び双眼鏡を取り出してあたりを観察すると、あるものが視界に入り、思わずにやりと口角をあげる。

そのものがけてサプレッサーを装着してあるMk22の引き金を引く。すると、その物が落下し、敵兵の目の前に着地した。すると敵兵が慌てはじめ、急いでつり橋を渡っていく。

「どうした!？」

その様子を見た吊り橋上のほかの敵兵が声をかける。しかし、その正体に気付くと彼らもまた慌てて駆けだした。

スネークは先程落とした物体に近づき、その物体を採取する。それは、すでにハチがいなくなったハチの巣。バルトスズメバチと呼ばれるスズメバチのものであり……この中のハチが敵兵を襲ったというわけだ。彼らが戻らぬうちに速やかに……とはいえ流石にこの深い峡谷に落ちてはひとまりもないため吊り橋だけはゆっくりと、スネークはこの場所を後にした。

ドレムチイ・未踏の森 後編（ドリノヴォドノ（後書き））

ガビアル：インドガビアルのこと。動物界脊索動物門爬虫綱ワニ目ガビアル科（クロコダイル科とする説もあり）ガビアル属に分類されるワニ。本種のみでガビアル属を構成する。インド、ネパールなどに生息し、本来はおとなしい種なのだが、実験などの影響か、狂暴化しているとパラメディックは推測している。食性は動物食で、主に魚類を食べるが、カエル、鳥類などを食べることもある。食性は動物食で、主に魚類を食べるが、カエル、鳥類などを食べることもある。

KGB：ソ連国家保安委員会。1954年からソ連崩壊（1991年）まで存在したソビエト社会主義共和国連邦の情報機関・秘密警察。軍の監視や国境警備も担当していた。

東西冷戦時代にはアメリカ・中央情報局（CIA）と一、二を争う組織と言われていたが、ソ連崩壊と同時にロシア連邦保安庁（FSB）に権限を移行した。日本での略称は を翻字した KGB（英： ケージービー、独： カーゲーバー）が使われる。

AK-47：カラシニコフ突撃銃。世界で最も多く生産されたライフルと言われ、単純な構造による生産性と頑丈性が要因であるとされる。RPG-7と並び、テロなどで見ないことはないといわれるほど。これ以降もバリエーションなどが多く作られている。7.62mm弾をばらまくため、それなりに、というかかなり反動は強い。

グレネード：榴弾。今回は手榴弾のこと。今作で使用されるのはRGD-5。ちなみに、よくある誤解としてピンを抜いたらすぐ投

げなくてはならないわけではない。セイフティレバーというのが存在し、握りこむように手榴弾を持つと半自動的にこれを握ることになる。これを解除しない限り信管は作動しないため、持っていてもそのまま爆発、なんてことはない。ただし、足元に落とした際は十字でも切ろつ。

CIA：アメリカ中央情報局。秘匿性などにあふれるため疑惑の目を受けることも多い組織。スネークが属するFOXもこの組織の傘下である。

タイガーストライプ：そのままトラ模様のような森林迷彩。オリブドラブより断然森に溶け込みやすく、用途も広い。スネークがネイキッド状態で着ているのもこれである。また、特にジャングルと呼ばれる状況では殊更高的迷彩効果を持つ。ただし、草むらの中などではそれに特化した迷彩も存在する。

ウッドランド：森林用の迷彩。鼻などの凸の部分には濃い色、凹の部分には明るい色を配色することにより立体感をなくすことでより効果が高まる。大体緑系の三色で構成され、いわゆる一般的な迷彩柄を顔に施した状態。上記のように数色を塗る場合、薄い色から塗っていくと上塗りできるため失敗しても安心できる。

バルトスズメバチ：名の通りスズメバチの一種。攻撃性が非常に高く、原作の場合、ブラック迷彩やタキシード迷彩など黒系を着ていようものなら、死亡するまで（エリアをまたいで）刺される。煙や火に弱く、ナイフを振り続ければ撃退が可能（現実では不可）。木にぶら下がる形の、（スズメバチ中では）珍しい巣を作るらしい。

ラスヴェイエット・夜明け

吊り橋を渡り終えたスネークが辿り着いたのは、今までとは全く異なる人口の建物が存在する場所だった。ただし既にさびれていて、廃墟といってもなんら違和感がない。それに、現にソ連にも廃工場として知られているのだ。

元は鉄格子のゲートがついていたらしい石の壁に身を隠す。Mk 22とナイフをしまい、無線機のスイッチを入れる。

「少佐、ソコロフが監禁されていると思われる廃工場に到着……かなり朽ち果てている」

腰から双眼鏡を取り出して観察を始める。

「ここからではソコロフは確認できないが……警戒はかなり厳重だ。工場の外に歩哨が立っている……内部にも何人かいるだろう」

一旦双眼鏡を下げる。

『目標、ソコロフは廃工場の奥……北東部の部屋に監禁されているはずだ』

「北東部の部屋だな。わかった」

『気をつける。ソコロフを生きたまま連れ帰ることが任務だ。彼の身を危険に晒すわけにはいかない。危険な状態ではソコロフに接触するな』

「了解」

『それとスネーク……』

「まだ他にも？」

『いや……救出に成功したら彼に伝えてほしい』

「何を？」

『「遅れてすまない」と』

「それだけか？」

『ああ』

「……わかった。これより目標への接近を開始する」

無線機を切り、この石壁を直進して少しの距離にいる敵兵に勘付かれないよう、迅速かつ慎重に移動を開始する。左右二枚ある壁のうち、左から右の壁へまず移る。そこから彼がこちらから目を離れた隙をついて壁裏の草むらへ移動する。そのまま金網が張られたその壁に沿うように、時たま見かける草むらに身を隠しながら進む。右へ一度、左へ一度曲がると、ソコロフ設計局も角になっている。丁度東部に着いた。

(あの辺りか……)

そこから見える崩れ落ちた屋根の残り。その下が、おそらくソコロフが監禁されている部屋のある場所だ。その壁沿いに敵兵が一人いるのを見つけ、スネークは他に誰かいないか辺りを見回し確認する。見つけたのは、先程石壁越しに見た敵兵一人と、屋根がなく壁ももはや見る影がない設計局内部を巡回する兵士が一人。

再び散在する草むらを経由しつつ、赤く錆びているドラム缶に身を隠す。まだ中身が残っているようで、実弾でも打ち込めば中の油が何かに引火して大爆発を引き起こせるかもしれない。立っているドラム缶が一本と、元は立っていたのか同じ位置に横向きに倒れているドラム缶が一つ。それと背中越しに敵兵を見る。丁度こちらに向かつてきているため身を引き、立っているドラム缶を中心に敵兵の背後を取った。

足音を立てないよう慎重に近づき、ある程度近づいたところで今度は走り寄って敵兵が声を上げる前に足を払って重心を崩し、地面に叩きつける。声を上げる間もなく気絶したらしい彼を確認し、さらに奥へとやはり草むらを経由しながら進んでいく。すると、スネークの視界に屋根に上れる梯子が映る。念のため更に突き当りまで移動して角に張り付き、敵兵がいなか確認する。安全を確認したスネークは改めてその梯子に近づいた。大分錆びてしまっているが、体重をかけても大丈夫なようだ。足をかけ、足音を出さぬよう屋根に上る。その上から身を潜めつつ観察すると、どうやら目的の部屋

付近に敵兵は一人しかいない。しかも部屋は死角だ。

部屋の前まで屋根上を移動し、再び敵兵がいないか確認するとぶら下がってそのまま降りる。目の前に赤褐色に錆びきったドアが見える。ここがソコロフが監禁されている部屋らしい。

ゆっくりと扉を開け、ナイフとMk22を構えつつ中を短く見渡す。すると、丁度対角線上にある暖炉に、こちらに背を向けた光沢のある黒いコートを着ている男が何かを投げ込んでいた。カーキのズボンにそれなりのものである革靴、そして後頭部以外は禿げてしまっている頭髪。

「ソコロフだな？」

ゆっくり近づいて、声をかける。はっと振り向いた男の反応は驚きに満ちている。モノクルをつけた老人の顔は、次第に驚きから焦りや恐怖に変わる。

「貴様、ヴォルギンの手先か!？」

黒い手袋をつけた手で何かの書類らしきそれをひつつかみ、全て火のついた暖炉に放り込む。ごう、と一瞬火が噴きあがって書面が燃えたことがわかる。

「あれは渡さんぞ！」

書類はすべて焼却し、後は知るの自分のみ　　そういうことだろうか。恐らく燃やしたのは少佐が言っていた「恐ろしい兵器」に関するものだろう。

「違っ」

スネークが否定の言葉と共に両手を上げる。

「俺はCIAのエンジニアの工作員だ。あんたを鉄のカーテンの向こうへエスコートしに来た」

一瞬だけ小さく窓の外へ顎を振る。

「CIAだと？」

「ああ、2年前あんたを亡命させたゼロ少佐の部下だ」
両腕をおろし、一歩だけ近づく。

「ゼロ……」

「少しだけ考え込み、眩くようにその言葉を漏らした。」

「彼から伝言がある」

「ナイフとMk22をしまい、彼に少佐から頼まれたことを伝える。」

「なんだ？」

「遅れてすまない」だそうだ」

「そうか」

「にやりと笑みでも浮かべそうに言う。それは少し昔を思い出しているような、楽しげな、そんな感じだった。」

「どういう意味なんだ？」

「彼は約束を守る男ということさ」

「意味深に言うソコロフに、スネークはいまだわからないという顔を
する。」

「それより早くここから連れ出してくれ」

「焦りが戻ってきたように言うソコロフ。」

「奴等が来る前に」

「奴等？」

「危険や敵を感じる熊のように部屋を歩く彼に尋ねる。」

「GRUのヴォルギン大佐だ。西側ではサンダーボルトと呼ばれている」

「サンダーボルト？ ……何者だ？」

「わが連邦の政権奪取を狙う軍の武闘派だよ。2年前のキューバ危機以来、フルシチョフは西側との平和共存路線を進めてきた。軍や地方実力者などのタカ派から弱腰と非難されつつも、フルシチョフは反対勢力を何とか抑え込んできた。だが農業政策の失敗で立場が危うくなって来た上、去年の11月の事件だ」

「ケネディ大統領の暗殺か……」

「そうだ。ある意味での最大の協力者を失い、フルシチョフの足場

は急速に崩れ始めている。そしてこれを機にプレジネフやコスイギンを担ぎ、反フルシチョフ派を糾合して現政権を覆し、権力を手に入れようと画策する一派がある。その急先鋒がGRUの大佐、ヴォルギンだ。

奴はここと同じような秘密兵器設計局、OKB-812、通称グラーニン設計局を抱え後ろ盾にしている。だがそれには飽き足らず、奴は私がここで作らされていた秘密兵器を奪い、権力奪取の切り札にしようと企んでいるらしい。

奴らが、この演習中に行動を起こすという情報が入ってきていたんだ」

「じゃあ外にいた兵士たちが……」

「その通りだ」

腕を組み、ため息でもつくかのように肯定する。

「私を監視するためだけならあんな人数はいらん。奴等の任務はヴォルギン大佐が私を奪うのを阻止することだ。万一の場合は私を殺してでもということらしい。」

大佐は必ずやってくるはずだ。その前に私を連れ出してくれ」

すがりつくような勢いでスネークに懇願するソコロフ。

「わかった」

早速スネークは部屋を出ようとした。しかし、ソコロフがふと思いついたように質問した。

「ところで、あんた完璧なロシア語だな。何処で憶えた？」

「俺の師匠から」

「そうか、やはりアメリカは怖い国だ」

「気が変わったか？」

にやりと口角をあげ、ぽんとソコロフの右肩を叩くスネーク。

「いや。ここに未練はない。行こう」

その言葉にスネークはこくりと頷いた。

その場にしゃがみ、無線機のスイッチを入れる。

「少佐、こちらスネーク。ソコロフを無事、救出。怪我はない。大丈夫だ」

『よくやった。スネーク。ソコロフを連れて、リカバリーポイント回収地点まで急げ！
回収地点で落ち合おう』

「わかった」

『見張りは？』

「何とかやりすごした」

『わかった』

「ザ・ボスは？」

『ザ・ボスとの通信は先程から途絶えているんだ』

「何があつた？」

『電波状況が悪いだけだろう。とにかく脱出を急いでくれ』

無線を切り、扉を静かに押し開く。その手には、再びMk22が握られていた。左手にもナイフが逆手に握られている。

少し開いたその扉を体で一気に押し開き、警戒しながら外へ出る。その後ろからソコロフが不安気についてくる。

辺りを見回すように進むソコロフに、赤いレンガの壁に隠れたスネークが無言で隠れるよう顎で指示する。それにはつとしたソコロフは慌てて隠れ、スネークと共に顔だけで覗く。

再び顎で行くぞ、という合図をだし、ソコロフが頷いた。

扉のないそこをくぐり、スネークは即座に銃口を正面やや斜め上に向ける。そのまま歩みを進め、全ての道に注意を張り巡らせ、その正面には絶えず銃口が向いている。その後ろからついてくソコロフが何やら構えを取っているが、明らかかな虚勢だ。腰が引けている。おいて行かれそうになり、慌てて彼の後を追う。

そのまま進むと、少し開けた場所に出る。しかし、彼らは周りを取り囲む敵兵の陰に気付いていない

「動くなっ！」

現れたのはKGBの兵士五人。それぞれがAK-47を持っている。

対するスネークはナイフを左手で地面と水平に逆手で構え、右手ではMk22を構える、CQCの基本的な構えだ。

「やっと会えましたね？」

その場の沈黙を破いたのは、ソコロフを含めこの場にいる七人の誰の声でもなかった。それに銃声でもない。

拍車をつけた靴で土を鳴らしながら、そして右手ではマカロフを回しながら現れたのは黒い軍服に赤い帽子の男。

「伝説のボスに？」

「きさま、スペツナズの山猫部隊！」

KGB兵が身構える。

「GRUの兵士が何故ここに？」

威圧感を保った声で尋ねる。既に銃口はスネーク達ではなくその男に向けられている。

その言葉に回転させていたマカロフを止め、腕を下ろす。

「兵士、だど？」

左手をひじを曲げた状態で、人差し指を軽く伸ばした状態で肩付近まで上げる。

帽子のずれでも直したのか赤い帽子を両手で少し動かした後、その手を下げてKGBの兵士をにらむ。

それにはつと気が付いたようにKGB兵五人のうち一人が彼の口を口にした。

「山猫の大将！」

「間違えないでほしい！」

やれやれ、といった風に彼らに背を向け、今度はその左腕を肩が垂直になるまで上げてやはり人差し指は軽く伸ばす。

「俺は」

「彼らのほうを振り向き、自分を名乗った。」

「オセロツト少佐だ！」

数秒の沈黙を破ったのは、今度はKGB兵だった。

「ソコロフは渡さん。さつさと立ち去れ」

同志にして敵、今の彼らはそんな状態なのであろう。

「山猫は獲物を逃さない」

右手と左手を先程「兵士」と間違えられた時の高さまで持つてきて、肘を直角気味に曲げ、人差し指と中指を少し伸ばす。まるで両手で銃の真似事をするときのようなポーズだ。

「何だと！」

苛立ちを隠さずにKGB兵が言った途端、スネークが危険を察してソコロフを倒す。危険の正体、オセロットの銃を抜く仕草を見たからだ。

マカロフを手動でスライドさせ、躊躇一切を感じさせずKGB兵を撃つ。火薬が爆発する音を上げ、その膨張によって押し出された9mmマカロフ弾が兵士に直撃し、命の源である紅の血液を噴出させる。

続いて階段の上にはいた兵士を銃撃。立て続けにもう三人を撃つ。ちらりと自分が落してしまった帽子の上でもがいている兵士を一瞥し、先程スネークが乗った屋根のほうを見やる。するとそこには隠れていたもう一人のKGB兵。回転させたマカロフを止めて銃口を向けると、慌てた様子で壁に隠れる。それを見てなお余裕の表情を見せ、にやりと笑みを浮かべるオセロット。銃口を少し逸らして引き金を引く。

露出した鉄筋に当たり、火花を散らした9mmマカロフ弾は軌道を変え、壁に隠れた兵士に命中する。

そのKGB兵が屋根から落下した。それを見てマカロフをホルスターに収め、自分が落した帽子の上でいまだもかく兵士のもとに寄る。慈悲のかけらもなくもう一発弾丸を撃ち込みとどめを刺すと、彼の体を蹴って帽子を拾い、砂をはたいてかぶりなおす。

「GRUの為とはいえ、同志を撃つのは気持ちがいいものではない

な

「ソコロフ、隠れてろ」

その言葉でソコロフは廃工場の壁裏に走り去る。

その行動が解らない、そう言いたげな顔のオセロット。対してスネークは姿勢を整え構えなおす。

「ん？ おまえ……ボスじゃないな」

少し考えるようにしたあと、そんなセリフがオセロットから出てきた。

両者の間に沈黙が流れる。

数秒の後、背を向けたオセロット。そのままさしく「山猫」^{カタロット}のような声を発する。すると、五人ほどのオセロットとおなじ黒い軍服に目出し帽をかぶりやはり赤い帽子をかぶった者たちが集まる。

「GRUの部隊……」

壁の裏からそれを見ていたソコロフが呟いた。

左手で「待て」という意味らしい手振りをするオセロット。

「なんだ？ その構え方？ その銃は？」

CQCの独特な構え、そして非力なハンドガン……そんなスネークを見て、オセロットが声を上げて笑う。それに伴い、高笑いが伝染していく。AK-47やM37を持った彼らにとっては、完璧に力で勝っている状態。そう思っているのだろう。

「ボスでなければ」

笑いを止め、先程のように落ち着き気味の声色に戻す。宙に投げたマカロフをキャッチしマガジンを装填する。

「死んでもらう！」

その言葉と同時に引き金を引いたオセロットだが、マカロフに違和感を感じそれを見れば、弾詰まりを起こしている。

それに慌てるオセロット。それを見逃すスネークではない。即座に右腕を拘束し左手のナイフを首筋にあてる。そのまま地面に押し倒し、足を使って起き上がれないよう拘束、オセロットの右腕からマカロフを離させる。

それを見て、ソコロフはあの吊り橋のほうへと走り去ってしまった。隊長と目標、そしてそのどちらにもはだかる障害。どうすればいいか隊員たちがおるおるとしている。

「隊長！」

「かまわん、撃てっ！」

そうは言うが、隊員たちも怖いのかナイフでの戦闘を挑む。スネークは右手で左腕を拘束、左手をナイフを握ったまま延髄辺りに添えて押す。その隊員の肩越しに一人を撃ち、そのまま拘束した隊員を二人かたまっていくところまで押しつけていき、一人に押し付ける。そこで怯んできた隙にもう一人への左手を拘束する。その時に捻りを加えられ、痛みでたまらずAK-47のトリガーをひいてしまい空めがけて乱射する。そのすぐ後地面へ投げつける。

先程隊員を投げつけた隊員を押さえつけ、その隊員の背中越しにもう一人の隊員を狙う。数瞬硬直するが、すぐにスネークが押さえつけていた隊員が抵抗する力を使って解放後に延髄辺りを押し体勢を崩させ、同時にもう一人のほうの隊員の懐に入る。右腕で正面から左肩の辺りをつかみ、一気に勢いを利用して投げる。仰向けに飛ぶように倒される。そのままMk22を先程麻酔を撃ち込んだ敵兵に向ける。既に麻酔が効いてきているらしくふらふらとしているが、油断することなく構える。AK47を両手で保持することもできないほどになっており、ほどなくして倒れる。

念のため麻酔で倒れた敵兵から銃口を外さないでいると、後ろでいまだ意識を保っているオセロツトに気付く。素手で立ち向かってくるが右腕をとり、ひねると悲鳴を上げる。そのまま地面に勢いよく投げつけ、すかさず銃口を向ける。オセロツトの手からマカロフが飛び、地面に落ちた衝撃で詰まっていた弾丸が飛び、からからと金属特有の軽い音をたてて転がり、オセロツトの近くで止まる。

「馬鹿な……」

「初弾を手動で排莖していたな。考え方はおかしくない。だが、聞

きかじつただけの行為を実戦で試すもんじゃない。だから弾詰まりシヤムなど起こすんだ。

オトマティック
そもそもお前は自動拳銃に向いていない。リコイルの衝撃を、肘を曲げて吸収する癖がある。どちらかというトリボルバー向きだ」

「くそつアメリカ人めっ!!」

腰からナイフを取り出し、襲いかかる。しかし、右腕を振りかぶつておろす一撃はスネークに易々と見切られ、左腕を壁にされ阻まれる。そのまま右腕をくぐりつつ多少捻られ、回り込まれて延髄に右手でMk22を持ったまま打撃を加える。そのまま左肩をつかみ、地面に引き倒す。少しだけ体をそらせ、すぐに背中を地面につける。首の近くへナイフを持っていき、オセロットの身動きを封じた。

「だが早撃ちは見事だった……」

そのままスネークは話しかける。

「いいセンスだ」

「いい　センス……」

スネークの左腕をつかみ、右手で手振りを加えながら確認するよう
うに反復するオセロット。どうやら彼は話すときに手振りや身振りが
大げさになるらしい。

スネークが頷き、それを見て満足したかのようにオセロットは意
識を手放し、左手が地面に落ちる。それを確認したスネークは立ち
上がり、ナイフとMk22をしまう。彼に背を向けるようにしゃが
み、無線機のスイッチを入れた。

「トム少佐、聞こえるか？」

「聞こえる、スネーク。大丈夫か？」

「ややこしくなってきた。こいつらも、ソコロフを狙っていた。例
のGRU……ヴォルギン大佐の手下らしい」

「GRUの大佐？」

「ソ連内部の勢力争いのような。ソコロフが言っていた。KGBと
GRU、フルシチョフ派とヴォルギンの勢力……」

『KGBに守られながらGRUに狙われている？ スネーク、どう

やらそこはキューバよりもホットらしいな』

「気に入らない。嫌な予感がする」

『私もだ。急げ』

「ソコロフが一人で逃げたが、すぐに追いつく」

『頼むぞ』

無線を切るとスネークは立ち上がり、先程ソコロフが逃げた方向

ドリノヴオドノ、溪谷の森へと向かった。

ラスヴェイエット・夜明け（後書き）

GRU：参謀本部情報総局を略してGRU（発音はグルー、ロシア語での略称は（ ）と呼ばれる。旧ソ連時代から存続している組織である。組織上は、列国と同様に参謀本部の一部署に過ぎないが、参謀系統を通じた情報の収集のほか、スパイ活動・SIGINT・偵察衛星・特殊部隊スペツナズの運用も管轄しており、ソ連KGBに匹敵する巨大な情報機関である。（wikipediaより）

マカロフ：ソ連（ロシア連邦）製のオートマチックハンドガン。トカレフに代わるものとして開発され、ソ連軍正式採用のハンドガンになる。全体的にフルサールPPを踏襲している。9mmマカロフ弾を使用し、9mmマカロフ弾は9mmパラベラムに相当する地位を占めている。ソ連軍の補助武器として活躍し、その普及はソ連の公的機関にとどまらず世界中に広まり、西側諸国でも使用されたという。また、近年日本で押収率がトカレフを抜いてトップになっている。

M37：イサカM37。アメリカのイサカ・ガン・カンパニー社製のポンプアクションショットガン。12ゲージショットシエルを使用する。開発当時（1937年）最も軽いショットガンであったため「フェザーライト」と呼ばれたこともあり、構造上弾詰まりなどを起こしにくいいため長く警察などに愛用された。他にも民間人などにも多く愛用されているほかメディアの露出も多いため、ショットガンといえばこれを連想する人も多いのではないだろうか。本作ではこのショットガンのソードオフカスタム（銃身や銃床を短くし携行性や取り回しをよくしたものである。また、イサカというのはアメリカの町の名前から）。

弾詰まり：通称ジャム。弾丸、銃本体、操作のどれかに誤りがあった時などに発生するアクシデント。排莖口に弾が詰まり弾丸の発射ができなくなる。銃の手入れを怠ったり、本作のようになれない操作を行うとジャムへつながることも多い。戦場でそうなった場合、まず決定的な隙となってしまう。

裏切りのドリノヴォドノ

ラスヴェイエットを後にし、吊り橋が特徴的なドリノヴォドノへと戻ってきたスネーク。その視界には、木の前に立って考えるようにうろろろとするソコロフがいた。幸い木からはみ出るほどうろろろとはしていなかったようだが。

「大丈夫か？」

傍により声をかける。その寸前に気付いたらしく、さして驚きは見えなかった。

「やつら、山猫部隊だ」
オセロケット

驚きの代わりに、いくらかの焦りと不安がみえる。

「スペツナズか？」

「そうだ、GRUの中でもエリート中のエリート。奴らが追ってきている、もうおしまいだ！」

「落ち着け」

若干しかるように情けない言葉を吐いたソコロフを叱咤する。

「必ず俺が助ける。それに心強い助っ人もバックアップしている」

ゼロ少佐を筆頭に、パラメディックを含めた「FOX部隊」そして何よりザ・ボスという助っ人がいる。

そんな二人の耳に、突如爆音が轟いたのが聞こえる。意外と近かったその方向を見ると、ソコロフはその正体を一瞬で悟った。

「見ろ」

指をさすソコロフ。そのそつと呟いた方向をスネークも見やる。

そこには、なにか機械のようなものが煙を上げていた。

かなりの距離があるため、双眼鏡をのぞきこむ。

「あれがあんたが作らされていた？」

映ったのはまるで腕のように伸びた鉄の柱のようなものと、いまだ煙を吐き出す一本の巨大な筒。

「そう、「一歩一歩踏みしめる者」……IRBMを射出する核搭載

戦車だ」

「あんな地形からでも核ミサイルが撃てるのか？」

「ああ。しかも友軍の支援なしでな」

「単独作戦行動が可能な核搭載戦車……」

腕に見えた柱の内側には、一本の棒状のドリルのようなキヤタピラ。支柱代わりにでもしているのか、まさに吠える狐や狼のようだ。そして背後から伸びるような一本の巨大な筒は、先程ソコロフの言ったIRBMの発射用なのだろう。

「そんなものが完成しているのか？」

「いや、今はまだフェイズ1が終了しただけだ。フェイズ2をクリアしなければ完成とは言えん」

「フェイズ2？」

双眼鏡を腰に戻しながら問う。

「あの兵器の本質だ。あれが完成し大佐の手に入れば、この冷戦は終わる」

「冷戦が終わる？」

「そして始まるだろう、本当の恐怖の時代が……」

「世界大戦か！？」

「私は協力せざるを得なかったんだ！ 死にたくなかった。アメリカにいる妻と娘にもう一度会いたかった……早く私をアメリカに連れて行ってくれ、まだ間に合う」

文字通りすがりつきながら懇願するソコロフ。

「私がいなければ、あれは完成しない！」

「わかった、急ごう！」

ソコロフの様子に危機感を大きく感じたのか、スネークは頷き、構えをとりなおし吊り橋を渡るべく歩み始めた。

吊り橋を慎重に渡るスネーク。その後ろから、同じく慎重に、そしてときおり後ろを振り返りながらソコロフが進む。その微妙に揺れる吊り橋の手すりから下をのぞけば、見えるのは落ちたら絶対に

助からないと思えるほど深い渓谷とその下を流れる急流の川。恐怖感をおおるその光景に尻込みし、見なければよかったとソコロフは思う。それでも、懸命に手すりを頼りながら歩みを進めていく。

次第に、霧が濃くなってきた。とはいえ、普通の霧とは比べるまでもなく速く濃くなつてゆく。その奥に、一つの人影が見え始めた。それを見たスネークは腰を落とし、戦闘態勢をとる。

人影はオリブドラブを着て、それと同じか近い色の一抱えもあるであろう金属製と思われる細長い箱を二つ、両手に持っている。左手に持つほうは若干細長いため、中身は別々のようだ。

額に深緑色のバンダナを巻き、頭髪は金。左の胸部にさしたスネークが持つものと同じナイフ……目の前に現れたのは、ザ・ボスであつた。

「ボス？」

呼びかけに答えることなく、右手に持った箱を吊り橋に落とす。その衝撃で橋が大きく揺れてソコロフが手すりにしがみつく。もう片方の落とすと、今度はソコロフは倒れてしまう。その揺れの中でも、二人は姿勢を保っていた。

「よくやった、ジャック」

ようやく、ボスが口を開く。

「なぜここに？」

「ソコロフは、いただく」

その言葉に反応したように、彼女の後ろに八チの大群が現れる。次第にスネーク達を包むように群がり、はたから見れば八チが球状に集まっている。

「蜂！？」

慌てるソコロフの後ろに、音すら立てず迷彩服を着た、ウィッグのように白髪と黒髪が混じった男が逆さ吊りの状態で忍び寄る。そのままソコロフと共に上空へと戻っていく。

その方向には歩兵輸送用のヘリ、後にハインドと呼ばれるヘリコ

プターがホバリングしていた。そのサイドにある搭乗兵用のドアは開け放たれており、八手の模様のような迷彩を着た男が左腕をゆらゆらと振っている。どうやら八手を操っているのはこの男のようだ。

そのへりのドアからちらりと見える座席にソコロフが先程連れ去った男に押し込められる。

「戦友たちよ、また共に戦える」

「この日が来るのを待っていました」

「またあなたと共に戦える」

ザ・ボスが呼びかけると、先程ソコロフを押し込めた男が答え、八手を操っていた男が続く。

「お帰り　ボス」

ギョロリ、と目を見開きながら肩にオウムをのせたギリースーツの老人男性が呟いた。その奥にももう一人いるが、彼はしゃべらなかった。

「これで5人揃ったわね。今度は地獄の底まで一緒……」

ボスの言葉が終わると同時に、雨が降り出した。

「血の雨……彼が泣いている？」

ザ・ボスの隣にひっそりと漂うフード姿の「何か」は、まるで微笑みかけているようだ。

すうっとその「何か」が消えると、紅色だった雨はいたって普通の雨に戻る。それにはっと辺りを見回すザ・ボス。しかし、あたりにはもう「何も」いない。

へりのホバリングが響き、ライトの光が水蒸気を伝って一筋の光となる。

再び流れる沈黙。しかし、それは後ろから大柄な男が歩いてきたことであっけなく破れた。

「くわばら　くわばら……」

ばちばちと青白い電撃を体にまとわせながら、男が歩いてくる。ソ連のカーキ色のロングコートに身を包んでいる男は橙色の手袋越しに手すりに触れる。その手が近づいた時から濡れた手すりは電撃を吸い寄せ、バチバチと音を立てる。

「皆、喜んでるようだ」

その光景を見渡すようにして、その男は満足げに呟いた。

「ヴォルギン大佐……」

ザ・ボスが男の名を呟いた。ヴォルギン、ソコロフが言っていたGRUのトップだ。

「ようこそ」

呟くように言い始め、右腕を後ろのほうに振りかぶる様に、横に大きく広げる。

「我が国、我が部隊へ」

言い終わると同時に右拳を握る。

「ボス？ これは？」

全く状況の呑み込めないスネーク。当たり前だ、今まで師と慕ってきたザ・ボス。彼女がソ連軍の、敵である軍の大佐とコンタクトしており、なおかつソコロフの身柄を奪われたのだから。

「私はソ連に亡命する。ソコロフは亡命の手みやげだ」

意味が解らない。そんな表情をスネークは表にだす。

「無反動核弾頭……」

おもむろにボスが右手に持っていた巨大な箱を持ち上げ呟く。

「私への手みやげはこいつ……」

そして左手に持っていた方の箱は肩に担ぎあげ、うれしさをにじみだす。まるで新しい玩具を手に入れた子供が、それに目を輝かせている様にそっくりだ。

「嘘だ！」

ようやく先程の言葉が呑み込めたのか、スネークが声を張る。

「その男は？ そいつも弟子の一人？」

存在に今気づいた、そんなしゃべり方だ。

「連れて行くのか？」

「いや、こいつはまだ幼い。我らコブラ部隊には純粹過ぎる。まだ戦場で特別な感情を抱いてはいない」

「どういう事なんだ!？」

構えをとりなおし、スネークが再び声を張る。しかし、歩み寄るザ・ボスに対し、じりじりと後退する。

「撃てるのか？」

微笑んでいるようにも見えなくもない顔を一瞬で変え、スネークに一步を持って接近する。対応する間もなくMk22のスライド部分を取られ、射線がザ・ボスに向かなくなる。そのままスライド部分を分解し、スネークを突き飛ばす。構えを取るが、銃を破壊されたことに気付き、その破壊された部分を投げよこされる。

CQCは無手でも行える。左手で攻撃を仕掛けるが、読み切られているようにその腕をつかまれ、外側に捻られ掌が上を向く。鼻に左手で一撃をもらい、おもわず右手でかばいつつ顔をしかめる。その隙に左腕を中心に後ろに回り込まれ、上腕の肘よりの部分を折られた。

悲鳴を上げ、そのままうつ伏せ一歩手前まで倒れかける。

「そいつは私の顔を見た。生かしてはおけない」

背を向けて荷物を置いたヴォルギンがスネークに歩み寄る。

「ソコロフの事がフルシチョフにばれると厄介だ」

両手の指にライフル弾を挟み込み、腕を曲げるように上げる。体の前で伸ばした腕を交差させると、一層強い稲光が彼の体を覆う。交差させた腕を上げ、胸の前で組みながら呟いた。

「殺すしかない」

肩を鳴らすように素早く回し、直後ボクシングのファイティングポーズのような恰好を取る。左手を前に、右手をしっかりと引き、足を肩幅に開く。明らかに素人の構えではない。

「待て……私の教え子だ。私がやる」

遮るようにザ・ボスが言う。すると、渋々というようにヴォルギ

ンは腕を下ろした。

「ジャック、あなたは連れていけない」

そういうと、彼女はスネーク、いや、ジャックに右手を差し出した。ゆっくりと差し出された右手に手を伸ばす。その手を握った瞬間

スネークの腹部にザ・ボスのひじ打ちが打ちこまれる。体をくの時に折り曲げ、苦痛の呻きを漏らす。敵意を悟ったスネークがさかさず右手をザ・ボスの首筋に持つていく。しかし、ほぼ同時に、あるいは若干早くザ・ボスの右手がスネークの首と右肩の辺りをとらえていた。そのまま左肩をからめ捕る様に、吊り橋の手すりの向こうめがけてスネークを投げる。その際に、右手はザ・ボスのバンドナを掴むに終わっていた。深い谷底に悲鳴を上げながら落ちるスネーク。体は水面に派手な水柱を作り出し、流されてゆく。

「新たな血は拒絶された……」

そう呟いたのは八手を操っていた男。仮にも弟弟子であるスネークに少なからず同情の念があるのだろうか。スネークが落ちた川をみやるザ・ボス。その様子は、まるで何も思っていないようで、それでいて何か悲しげな雰囲気を纏っているようで、どう考えているのかは当人にしかわからない。

「いいのか？」

「さあ、ソコロフの設計局を襲いに行くわよ」

「シャゴホッドはいたただきだ」

スネークが流れていった川。それを手すりに左手を預けながら静かに呟く。

「流されてゆけ。私は留まるしかない」

ザ・ボスはへりのホバリングが近づいてくるのに気づき、上を見やる。

無線の呼び出し音がけたましく鳴っている。スネークの耳元だけに聞こえるはずの音は、川の流れに隠れながらも他の音がない環境下で十分に聞こえている。

呻きを上げ、うつ伏せだったジャックが目を覚ます。ゆっくりと体を仰向けにすると、苦痛に顔をゆがめながら折れて動かない左手の代わりに、右手で右の肩にある無線機のスイッチを入れる。

『スネーク、聞こえるか？』

「ああ、なんとか……………」

『スネーク、よく聞け！ 応急手当が必要だ。動けるか？』

「……………」

体を少し動かしたのか、激痛で呻きが漏れる。

『応急手当ををするんだ。がんばれ！』

よし、いいぞ。治療を始める……………パラメディック？』

『スネーク、いい？ 落ち着いて処置するのよ？』

「……………」

再び苦悶の声が漏れる。

『しっかりしなさい！ もっと酷い兵士を見たことがある。できる？』

「少佐？ ザ・ボスが……………ザ・ボスが亡命した……………」

『そのことは後だ。君の治療が先だ』

『さあ、しっかりして！ 治療は薬物治療と外科治療に分かれるの。あなたが負っている重傷は左肘とわき腹の骨折に、左上腕・右肘・右上腕及び腹部の切創よ。外科治療で処置を行って。

骨折に必要な処置は、固定具を使った患部の固定と、包帯のふたつ。切創に対する処置は、消毒薬による傷口の消毒、縫合セットによる縫合、止血剤を使った止血、包帯の4つよ。必要な治療を全て行うのよ。わかった？』

「ああ……………」

『しっかりとしなさい！ さあ、重傷を治療するのよ！』

無線を終え、スネークは木にもたれかかり腰のベルトやバックパツクにある治療品で治療を開始する。まず、左腕を放っておいて各切創を消毒、止血する。液体の消毒液が染みるが、これを怠るわけにもいかない。止血剤を患部にあてがい数秒後、あいかわらず不思議なほどの速さで止血が終了する。縫合セットを取り出し、糸を口に加えたりと左手を補いながら縫っていく。針が刺さるたび痛むが、残念なことに麻酔なんてものはもっていないし使う技量もない。辛抱しながら縫い終え、包帯を巻いていく。繰り返して四か所すべてを治療し、次にわき腹に一本の固定具をあてがい、それごときつく包帯で巻いていく。

最後に左腕を治療すべく、まず口に木材のうち小さな角材のような固定具を口に挟み、折れて動かない左腕に右手を添える。折れて内出血した青い腕は痛々しく、それを右手で保持する。これから来る激痛に鼓動が焦る様に息を荒く覚悟を決め、一気に肘を直角に曲げる。

ひととき大きな悲鳴が上がり、思わず背中を木に預ける。少しだけ息を整え、骨をはめた後、口に加えた固定具を落として右手で拾いなおし、太ももを支えに左腕にあてる。そのまま固定具が落ちないように右手のみで包帯を巻いていく。

いまだ落ち着ききらない息に木に背中を預けるが、すぐに右手を伸ばして深緑の布をつかむ。あらかじめ大きめの輪にしてあったそれは、ザ・ボスがしていたバンダナだった。ギブス代わりに首と左腕を通し、即席の三角筋にしたのだ。

『スネーク、よくやったわ』

『今から迎えに行く。そこでじっとしてろ……回収気球を投下する。設置できるか？』

しばらくすると、上空にヘリのローター音が聞こえた。おそらく、先程のハインドも含まれている。計五台のハインドが、ロープを使ってシャゴホッドを空中輸送している。夕日が空から姿を消そうとし始めた中、吊り橋の方向から向かってきたヘリ達。

「シャゴ……ホッド……」

鳥を追いやる様に飛ぶそれら。ふと、ドアをあけそこにもたれかかるようにしていたザ・ボスが地をみやる。左手をゆっくりと伸ばし、おそらくはスネークがいるのであろう場所に伸ばした。同じくスネークもその方向に右手を伸ばすが、先程とは違い、今はその手は触れ合わない。

しばらくするとやがて見えなくなり始め、スネークの右手が力尽きたように下ろされる。ザ・ボスも胸の前でその左手を握りしめるように戻す。

ハインド、ヴォルギンやオセロット、そして一人の女性が搭乗する機。思いつめたようにスネークに敗北した時に詰まった一発の弾丸とマカロフを見るオセロット。その背もたれをはさみ、反対側の座席には金髪に眼鏡をかけた女性が座っていた。

そんな中、待ちわびた玩具を開けるようにヴォルギンがデイビー・クロケットの入った箱を開く。比較的短めの箱には一発の弾頭、核弾頭が。そして細長い方にはその発射装置が収まっている。それを見てやはり子供のように箱に手をつくヴォルギン。おもむろに発射装置を取り出す。

「これでいい。大成功だ。さすがはザ・ボスとコブラ部隊……」

嬉しそうにひとり呟くヴォルギン。

「シャゴホッドもソコロフも貰った」

オセロットと女性がヴォルギンのほうを見る。女性の視線の方向

が変わったのに気付いたオセロットが素早く後ろ、つまり女性のほうを向くと、すぐさま視線を逸らした。

「この女はどうします?」

「何者だ?」

「ソコロフの女らしいです」

靴音を立てて寄るヴォルギンに、座席上だけでもと逃げる女性。目を合わせようとしない彼女の顎を強引にこちらに向かせ、その顔を見る。若々しく、人に聞けば十中八九美女と答えるであろう風貌だ。

「良い女だ。私がいただく……」

右手をそつと腰のポケットへ忍ばせる彼女。しかし、目敏くそれに気付いたヴォルギンがその右腕をつかむ。

「変な気を起こすな」

右手を出させ、その手につかんだものを奪う。一見口紅だが、ヴォルギンはその正体に気付く。

「キス・オブ・デス口紅型拳銃?」

「……KGBの?」

「利用できそうだ」

再び彼女の右手にそれを握りこませる。

「度胸もいい」

彼女を突き放すように離すと、彼は反対へと歩いて行く。その方向には、ザ・ボスの持ってきたデイビー・クロケットが。

「基地に連れて行きますか?」

「そうだな」

まるで興味をなくしたように返事をする。

「ソコロフの設計局も用済みだ。さつそく、この手みやげを使わせてもらおう」

手みやげの意味に気付いたのか、オセロットがまさかと後ろを向く。すると、そのまさか、ヴォルギンはデイビー・クロケットを発

射しようと思いを落とす。

「大佐！ 敵対しているとはいえ、同志ですよ」

「私が撃つのではない。これは亡命したアメリカ人、あの女が撃つのだ」

「同志に核を使うんですか！？」

必死に彼の体を押し倒すような勢いで止めにかかるオセロツト。

確かにKGBとGRUは敵対しているが、同じソ連の人間なのだ。しかし、それもあつげなくはねのけられる。

「アラモを忘れるな」

「大佐！！！」

オセロツトの抗議もむなしく、大佐の右手は発射スイッチを押す。瞬間、ハインドの開けられた両の扉から、一方は反動を打ち消すためのバックブラストが。そして、もう一方からは弾頭が……「アラモの英雄」からつけられた名の核弾頭が煙の尾を引いて飛んで行った。

その光景を、方や口角を吊り上げ、方や絶望の表情で見送る。夕日を覆うように真っ白な奔流が流れ、無残にも核分裂による反応が起こったことを告げた。

回収気球が投下された空。そことは少し違う方向の空から、強烈な閃光と衝撃波が襲ってくる。顔をかばうように右手を上げるスネークは、膝立ちで必死に踏ん張る。ゆっくりと立ち上がりその方向を見ると、スネークは愕然とした。その方向に見えたのは、核が撃たれた証拠、キノコ状の巨大な原子雲が成形されていた……

裏切りのドリノヴォドノ（後書き）

スペツナズ：ロシア語の「特殊任務部隊」の略。「スペツナズ」という語そのものは、「SAS」（イギリス陸軍）、「USSOC」（アメリカ陸軍特殊部隊群、通称「グリーンベレー」）等とは異なり、特定の部隊を指す語ではない。もちろんここでいうスペツナズはGRUに属するスペツナズである。

ギリースーツ：狙撃兵などが用いる、木の葉や砂などを張り付けた偽装用の衣装。普通の迷彩服と違い、実物を用いたそれはより高い偽装効果を発揮する。ギリースーツの名称は、18世紀頃からスコットランドに伝わる妖精である「ギリードウ（Ghillie Dhu：暗い若者の意）」から来ており、伝承の中で白樺の林や茂みに棲み、暗くするように木の葉や苔で出来た服を着用していたと言いつい伝えから付けられた名称であるとされている（因みにGhillie or Gillieは転じてスコットランドにおける狩猟や釣りのガイドの事と言つ意味もある）。この話で出てきたギリースーツは森林用に木の葉などを貼り付けているもの。

ハインド：Mi-24が制式名称。ソ連製の戦闘ヘリ。ソ連ではクラカチール（クロコダイルのロシア読み）と呼ばれている。汎用ヘリのMi-8（通称ヒップ）をもとに作られた。この種の「攻撃ヘリコプター」としては異例の大型機であるが、これは強力な武装で地上を制圧しつつ搭乗させた歩兵部隊を展開してヘリボーン任務を行うことを想定して開発されたため、歩兵戦闘車のヘリコプター版ともいえるコンセプトである。ただし、結果は悪方向への折衷となってしまうたうえ、アフガン侵攻などではステインガーに多数撃墜されている。ついでに、この作戦は1964年だが、初飛行は

1969年。設定上、極秘での試験運用となっている。HALO降下と同じ。

デイビー・クロケット：M-388 Davy Crockett
「アメリカ製の戦略核兵器」で、無反動核発射法（装置）とも呼ばれる。名称はアラモの戦いで玉砕した英雄デイヴィッド・クロケットの名に因む。アメリカは1991年9月にヨーロッパからの地上発射式戦術核の撤去を宣言したため、実戦で一度も撃たれることはなかった。

キス・オブ・デス：実際にKGBの女性スパイが携帯していたという。小型で、女性のたしなみのひとつである「口紅」から不自然に思われないところからカモフラージュに優秀な暗器だといえる。キスオブデスはそのまま読めば、「死の口づけ」。しかし、意味は災いを招くもの、災いのもとノ種、とどめを刺すなどの意味がある。

（wikipediaより）

フリーフィンゲ

一週間後 1964年8月30日PM11:30

北極海上空

『現在、北極海上空、高度3万フィート。ソ連領空に接近中』

高速で移動を行う、以前ソ連領空一万フィートを飛行したガンシップとは違い小型で灰色ではなくシルバーの機体を持つ一機の飛行機で、パイロットのアナウンスが流れた。

『間もなくドローン射出ポイントに到達します。』

ドローン、油圧・電圧共に正常。ペイロードへの酸素供給は正常。ペイロード用防寒装置への電力供給、異常なし。突風^{ガスト}なし。現在、

ドローン切り離しに問題なし』

『いいか、今回はHALO降下は無理だ』

タイガーストライプ迷彩に身を包んだスネークがドローン内部の体を支えるグリップを握りこんだとき、ゼロ少佐から無線が入る。

『前回の作戦以来、空域の警戒が厳重になった。バーチャスミッシヨンの時のように上空へは近づけない。よって最新鋭の兵器を使う……スネーク、これはアラン・シェパード並みの栄誉だぞ。これが最後のチャンスだ。愛国心を示せ』

言葉が終わる直前に、少し前に閉じた目を開くスネーク。その額には、ザ・ボスが……師が裏切った時に巻いていたバンダナが巻かれている。

『失敗すれば、またベッドの上で銃殺されるのを待つことになる』

「どうだ？ 最新の集中治療室^{ICU}に入院した感想は？」

「背広の連中に面会時間を教えてやってくれ。昼も夜も質問攻めでは治る傷も治らん」

いらついたような、そして怪我で消耗しているのがわかるような声で皮肉を口にする。

「軍上層部の事情聴取だな」

「尋問だ。奴等によれば、俺はザ・ボスの亡命を助けた売国奴らしい」

「連中には処分する対象が必要なんだ」

「あんたもその対象に？」

「うむ。お互いヒーローにはなりそこねたということだ」

「俺たちの「FOX」も死ぬのか？」

「いや、狐は^{フォックス}まだ狩られない。今日来たのは……そう、我々「FOX」の汚名を返上するためだ」

「なんだって？」

「状況が変わったんだ。まだ我々が生き残るチャンスがある」

「何のチャンスが？」

「落ち着け。葉巻でもどうだ。ハバナだ」

そういつて、病院、しかもICUの中で、監視カメラで撮られているにも関わらず患者であるスネークに堂々と葉巻を勧めるゼロ少佐。スネークもスネークでそれを躊躇なく頂戴し口に加える。ゼロ少佐が持ってきたライターで火をつけられ、その葉巻を吸い始めた。

「今朝、CIA長官から呼び出しを受けた」

「俺たちの処刑時期が決まったか？」

「違う。いいか、よく聞くんだ」

「昨日、ホワイトハウスにある人物から連絡が入った」

『ジョンソン大統領閣下?』

『ええ、聞こえています。フルシチヨフ第一書記?』

「フルシチヨフからジョンソン大統領へのホットラインだ」

「ソ連の最高権力者から?」

「そうだ」

『数日前に、我が国の主力設計局OKB-754が核兵器で消滅しました。ほぼ同時刻、我が軍の防空レーダーが貴国の軍用機らしい機影を確認しています。憶えはありますか? そちらへの報復体制を整え、我が軍には現在、第二戦備体制が発令されています。そちらの返答次第では、直ちに第一戦備体制へ移行。ハルマゲドン最終戦争の口火を切る命令を下さなければなりません。私はあなたの前任者と共にあのキューバ危機を乗り切った。しかし、私の権限も以前ほど強大ではなくなってきました。この危機を乗り越えるには、あなたの真摯な態度が必要です』

『こちらから連絡すべきでした……1週間前、我が軍の兵士がそこからへ亡命したのはご存知ですか?』

『……いや』

『ご存じない? 手引きしたのはGRUの大佐……エヴゲニー・ボリスヴィッチ・ヴォルギン』

『ヴォルギン? ……プレジネフ派の? 続けてください、その兵士とは?』

『第二次大戦下、連合国中の優秀な兵士を集め、組織。我々に勝利をもたらした伝説の軍人、ザ・ボス……あなたの国では戦士とも言うわれています』

『な……なんとあのボス? 特殊部隊の母が?』

『そうです。小型核砲弾を2発』

『あのボスが小型核砲弾を?』

『遺憾ながら……そちらへの亡命の手土産だったのでしょう。原子戦闘グループ投射システム「デイビークロケット」は、2年前に完成していました。ただ射程、精度などに問題が見つかり、量産はしたものの、実戦配備はしていません』

『だが、ソコロフ設計局がまるごと消滅し、汚染された』

『その件には、哀悼の意を表します』

『で……ザ・ボスがヴォルギン大佐の手引きで開発中の核弾頭を2発、手みやげにして我が国に亡命した。そして時を同じくして、我が軍の極秘研究機関であるソコロフ設計局がその核で破壊された……というのですな』

『そうです』

『アメリカ政府はいつさい関与していない？』と

『そうです。我々は一切関与していません』

『ではリーダーに映った軍用機の機影は？ 明らかに領空侵犯ですぞ。あなたの命令ではないと？』

『そうです』

『あくまでも一兵士の亡命？ それを信用しろと？』

『そう言うしかありません』

『軍部はあなた達の偽装亡命だと』

『何度でも申し上げますが、我が国は無関係です』

『私もそれを信じたい。しかしキューバ危機以来、私の軍部への権限も弱まってきている。これがアメリカ政府によるものでないという証拠が必要いのです。一週間猶予があります。あなた達の手でそのザ・ボスを捉え、残りの小型核砲弾を回収してください。どうか身の潔白を証明してください』

『潔白？』

『そうです。痛みを伴う潔白です。今回の事件が、そちらの偽装亡命ではないという証拠をみせて頂きたい。ザ・ボスはヴォルギン大佐の近くにいますはずです』

『そちらの協力は？』

『期待しないで欲しい。政局が不安定なのです。しかも、ヴォルギン大佐は現政権転覆を狙うレジネフ派……1週間です。1週間のうちに……願わくばヴォルギン大佐の排除も……』

『それはどういう意味ですか？』

『いや、意味などない。私とあなたのこの関係を保つ上での……ささやかな密約です』

『潔白が証明されなければ？』

『私も軍部を抑えられない。私は解任され、彼らは報復に出るでしょう』

『我が国を核攻撃すると？』

『今回の処理はあくまであなたがたアメリカ独断で行ってください』

『処理ですか……』

『失敗すれば再び世界大戦が始まります』

「つまり、全面核戦争を回避するには、例の兵器にアメリカが関与していないことを証明しなければならない」

「アメリカの手でザ・ボスを抹殺することが潔白の証明になると？」

「そうだ。いいか、この任務はお前にしかできない。お偉方はそう判断した。お前が彼女の最後の弟子だ。しくじればお互い葬られる。選択肢はない」

「ソ連側の協力は？」

「君と我々の通信用に、KGBが管理している通信衛星を一つ間借りさせる許可をとりつけた」

「それだけか？」

「それと内通者を用意するそうだ」

「内通者？」

「1960年9月の亡命事件……覚えているか？」

「^{NSA}国家安全保障局の暗号解読員二人がソ連へ渡った？」

「そうだ。彼等はその後こういう時の為にKGBで訓練を積んでいたらしい。コードネームADAMとEVA……」

回想する中、スネークが乗るドローンを積んだ機が、射出の為に機体を上下反転する。間もなく切り離された。

「そのうちのアダムがヴォルギン大佐のもとへ潜入しているそうだ。脱出経路も彼が用意する手はずになっている」

ドローンがもう一度反転し、同じく反転した射出機が帰還し始めるのにも興味がないようにロケットを点火した。ロケットの推進力と空気抵抗でドローンは激しく揺れ、内部にいるスネークは歯を食いしばり必死にグリップを握りしめる。

ソ連上空付近を航空していた二機のミグ。そのコクピット正面中央にある緑がかった液晶のレーダーに、一つの反応がうつった。

「コントローल、高度3万フィート、国籍不明の飛行物体を確認」

そう報告すると、操縦桿を少しだけ右に倒し、「国籍不明の飛行物体」を追跡し始めた。

「速い！ 推定速度、マッハ3以上、なおも南下中……間もなく見失う」

レーダーの範囲外へと進むそれは、機動性に優れるミグですらすやすやすと引き離していく。

国籍不明の飛行物体の正体は、もちろんスネークが乗っているドローンだ。ミグの追跡を振り切った数秒後、目的地付近の森が見え始める。ソコロフ奪還の際に訪れた森、ツェリノヤルスクだ。

腕を胸の前で交差させ、落下に備えるスネーク。ドローンが二つの小さな穴から逆噴射をはじめ、一気に減速する。揺れが強くなり、しばらくしたあと床が抜けるようにハッチが開き、スネークが外へと放り出される。すぐにパラシュートが開き、スネークは更に減速

してドローンがみるみる間に正面に向かって飛んでいく。
森へ突っ込み、枝などに当たたらぬよう顔を腕で覆う。すぐあとに
パラシュートと体を切り離して着地を行う。勢いはHALO降下よ
り強く、何度も前方へ転がりようやく止まった。四つん這いのよう
になって、息を整えるスネーク。迷彩服に着いた砂などを軽くはた
き落とし周囲を見渡す。左手で無線のスイッチを入れ、少佐に無線
を行った。

「こちら、スネーク。聞こえるか？」

『聞こえるぞ。まずは着地に成功したな』

「かなり流されたが……」

『スネーク、君の任務をもう一度伝える。ソコロフの救出。シャゴ
ホツドの開発状況の調査……破壊。そしてザ・ボスの抹殺……』

「ザ・ボスの抹殺……」

『本作戦はスネークイーター作戦と名付ける』

「ザ・ボスを含めたコブラ部隊を相手にするからか？」

『さらにGRUのヴォルギン大佐もな』

「俺は殺し屋じゃない」

『わかっている。しかしソ連政府の要請はそういうことだ』

「要請？ 要求じゃないのか？ 現政権を脅かす大佐一派を暗殺す
ることが？」

『米ソが核を使わずにすむ。それが現政権を支持するということだ』

「CIAの要請は？」

『ソコロフの救出とシャゴホツドの破壊が最優先だ』

「わかった、トム少佐」

『まっつくれ』

「どうした？」

『コードネームを変える。やはりトムでは縁起が悪い。』

「どうして？」

「実はな、私のコードネームの件だが……記憶違いだったんだ」

「記憶違い？」

「去年流行った「大脱走」という映画を観たか？」

「いや」

「ナチスドイツの捕虜収容所から脱走する実話を元にした映画だ。

捕虜たちは逃げるために3つのトンネルを掘るんだ。だが、途中で2つが発見されてしまう。捕虜たちは残る最後のトンネルで脱走に成功するんだ。そのトンネルの名前はそれぞれディック、ハリー、トム」

「わかった。あんたは縁起を担いで、脱走に使用されたトンネル名をコードネームに？」

「ああ、そうだ。そのはずだった」

「はずだった？」

「間違っていたんだ。実はハリーが正解だった。トムは、途中でナチスに発見された縁起の悪い方のトンネル名だったんだ。もう一度、映画を見て確認した。このために、わざわざ映画会社からフィルムを取り寄せたんだ」

「それはそれは。気持ちのいい話じゃないな。で、どうする？」

「うむ、やはり今までどおりゼロでいい」

「わかった、ゼロ少佐。一から仕切り直しということだな」

「いや、ゼロからのリトライだよ。私の周波数は140・85だ。

それからスネーク、パラメディックにも作戦に参加してもらっている」

「彼女にとつても最後のチャンスか？」

「失敗すれば医師免許は剥奪される。似たようなものだ。周波数はバーチャスミッションの時と同じ、145・73だ。任務の記録も同じく彼女に行ってもらおう。周波数は140・96、こちらも前回と同じだ。それと、もう一人、サポートをつける。武器装備、最新テクノロジーの専門家、ミスターシギントだ。設計局に潜入して、最新兵器を相手にするんだ。分からないときは彼に無線しろ。周波

数は148・41だ』

「わかった。ミスターシギントだな」

『この先の廃工場でKGBの協力者、ADAMが待っている』

「先週、ソコロフが捕らえられていた廃工場だな」

『そうだ。まずはADAMと合流せよ。彼がソコロフ救出の手はずを整えてくれている』

「そのADAMの風貌は？」

『廃工場まで行けばわかる。ここはあの核爆発の汚染地域に隣接している。他に誰も近づかん。合言葉は……「愛国者は」「ら・り・る・れ・ろ」』

「「ら・り・る・れ・ろ」？ 了解だ」

『今回は装備に45口径フォーティファイブを加えてある。ただし銃声には注意しろよ』

「「武器装備は現地調達」が「FOX」のやり方じゃなかったのか？」

『今回は事情が異なる。君がアメリカ政府の作業員として任務を全うしなくてはならない。君の痕跡がある程度必要なのだ。少なくとも、フルシチョフ政権に対しては。しかし、潜入任務であることに変わりはない。いいか、スネーク。君が失敗すれば、それは全面核戦争の始まりを意味する。くれぐれも慎重に頼む』

「わかった。それでは、スネークイーター作戦を開始する」

フリーフィンゲ（後書き）

ドローン降下：ドローンとは英語で雄のハチを指す語句。転じて不活発な活動体や自動操縦される無人の飛行体や車両、ハチの発するような音などを指す。ここでいうドローンは自動操縦の飛行隊であり、スネークの搭乗したドローンのマツハ3という速度は当時どころか現代でもかなり速い方に分類される。

アラン・シエパード：アメリカで初めて有人宇宙飛行を成功させた、マーキュリーセブンの一人。アメリカ海軍兵士。15分28秒の弾道飛行ではあったものの、その成果は大きい。また、月面を歩いた五人目の人物であり、月面でのゴルフは有名である。1950年代からは海軍テストパイロットを務め、その後の1961年5月5日にマーキュリー計画で有人飛行を成功させた。ただし、中耳炎が悪化し今後参加する予定だった計画を降り、先ほどの月面歩行までは作戦未参加であった。

1960年9月の亡命事件：国家安全保障局、通称NSAに所属していたADAMとEVEがソ連へと亡命した事件。日本（神奈川県）にある上瀬谷通信施設に勤務していた。理由は二人が同性愛者になったことで、同性愛を認めないアメリカの迫害を恐れたからという。二人はソ連にNSAの存在を打ち明け、これがもとでアメリカはNSAを公式に認めざるをえなくなった。また、こういった事件を繰り返さないためにある条件下では同性愛を許容することになる。

ミグ：ミグはMIGをさし、今回のMIG-21を指す言葉ではない。また、MIGは戦闘機ではなく戦闘機メーカー。ソ連時代のA・I・ミコヤーンとM・I・グレイヴィチ記念設計局が母体で、略称がMIGである。ただし、MIG社が製造した戦闘機は大抵ミグ(MIG)と呼ばれる。今回登場したMIG-21は1950年代に開発が開始されたソ連の戦闘機で、超音速戦闘機としては異例の一万機以上の生産がなされている。当時は弱点が多く、レーダーに目標追尾機能がないのをはじめ、機動性が良いものの操縦性が悪かったり、燃料が短い時間しかもたなかったり、一秒あたり90度以上のロールを行うと回転が止まらなくなるなどがあった。しかし、戦闘能力は非常に優れていたために、後のF-16やMIG-29まで「全能的」に上回る機体はなかった。

大脱走：1963年公開のジョン・スタージエス監督の映画。日本でも公開された。36回アカデミー賞で編集賞受賞。ベルリン南東160kmのザーガンにあったドイツ空軍の管理する連合軍の航空兵捕虜収容所から捕虜が集団脱走した史実を映画化したものである。ドイツ空軍の撃戦闘機部隊やレーダーに連動する高射砲部隊によって侵攻を阻まれ、ドイツ領内で捕虜となった多くの連合軍航空兵は各地の捕虜収容所に収容され、ザーガンもその一つであった。捕虜となった場合の軍人の任務の一つとして、収容所を脱走して敵軍の兵力を捜索に割かせて、味方前線部隊の負荷を削減することがあった。(wikipediaより)

45口径：文字通り45口径の弾丸を使用する拳銃のこと。45口径というのは0.45インチ(11.5mm)であり、非常にスロッピングパワー(抑止力)が強いのが特徴。ただし反動もそれなりのもの。かつて、アメリカ陸軍は制式拳銃として.38口径のリ

(ハンドガン)

ボルバーを採用していたが、1898年の米西戦争の最中にファイリピンで起こったモロ族の蜂起の際に、38ロングコルト弾の低初速による打撃力不足が判明したため（勢いを殺すことができなかつた）、同軍は45口径弾丸を採用することになる。後に「45口径信仰」と呼ばれるほどアメリカでは普及するが、弾丸の大きさ、反動の大きさからフランスなどでは不評。今作ではM1911A1（コルト・ガバメント）である。詳しくは後に再び作中に出るのでその時に。

なお、今作の原作で行うことができるパラメディック、シギントへの無線はスルーします。

宵闇のドレムチイ

辺りの草木が夜風に吹かれてかさかさ音を立てたのを聞きながら、スネークはゆっくりと立ち上がる。濃いブラウンの髪と後ろで結び目になっている深緑のバンダナの短く余った部分が重力につられて揺れる。地面に着いた膝から少しだけほこりが落ちるが、今度は気にも留めない。

既にミスターシギントやパラメディックへの無線は済ませた。シギントは……一言で言い表すなら「ゼロ少佐やパラメディックと同類」といったところ。褐色系の彼はどこでも差別的な門前払いだったらしく、ゼロ少佐が拾ってくれたことは運命的だったのかもしれない。少佐達と同類、と言うと「変人」のイメージばかりがつきまとうが、いざというとき「FOX」の面々はとても頼りになる。

シギントに関しても、武器テクノロジーに関しては本物だ。ゼロ少佐だって指揮官としての能力は秀逸だし、パラメディックも医療の腕は良い……らしい。スネークは直接診てもらったわけでもないのかわからないが。

少し着地地点から進み、北部へと進入すると、少し高め、丁度以前バックバックを回収した時に降りた崖なんかよりは少し高い程度の崖がある。他に進めるような場所もないので、迷わず飛び降りる。がさり、と草同士がこすれあう音を出したため若干焦りつつ木に身を隠したが幸い周囲に敵兵のような存在はいなかったらしい。数秒周りを見渡した後にそのまま草むらの中を進んでいく。

「ッ！？」

スネークの視界の右側に突如緑色をした細長い物体が移る。一瞬で異常と感じ取ったスネークは少し飛び退く。その正体は、木の枝に絡まったミドリニシキヘビであった。細い道であるため、この木の下は避けて通れない。仕方なくスネークは右太ももから大型のサ

バイバルナイフを取り出し、ミドリニシキヘビの首に突き刺した。蛇は前回の作戦で少佐が話したように、ジャングルでは食糧となる後で暇を見てパラメディックに聞いてみようなどと考え、先を進み始めた。

しかし、数歩歩いた後。馬が嘶く声が突如聞こえる。ミドリニシキヘビの時と同じく、スネークは飛び退いた後、今度は左にある木へと身を隠す。こんなジャングルに馬が？ と思考を巡らせつつ観察するが、ここからでは全く見えない。気のせいかとも思い、念のためM1911A1とナイフを構えながらゆっくりと歩み始めた。すると、見えたのは見覚えのあるシルバーに赤いラインが映える一機のドローン。無論、スネークがここへ潜入するときに使ったものだ。

気配を感じ、一瞬で右へと体を向ける。その先にいたのは白いアングルシアン……それも明らかに人が乗っているらしい。地面を蹄で軽く一掻きし、もう一度小さく嘶く。

ゆっくりとそのアングルシアンへと歩み寄る。特に警戒する様子なども見せないため、ナイフをしまい、ベルトの右にあるホルダーにM1911A1をしまう。手が届く距離まで歩み寄り、右手をその馬にそっとかける。

「命拾いしたようね」

突然聞こえたその声に振り向き、同時にナイフとM1911A1を構える。その銃口の先にいた声の主。黒い腰ほどまでの外套を羽織った

「ボス？」

前回ドリノヴォドノでソコロフを奪っていった「売国奴」ザ・ボスだった。

「腕は治ったの？」

腕、というのは前回吊り橋での交戦の際折られた左腕のことだろう。

「どつしてここに？」

その言葉をスネークが投げかけたが、ザ・ボスは反応しない。それどころか、放ち始めた殺気にスネークが下ろした両腕を再び構える。同時に外套を脱ぎ捨て、その下に着ていた光沢がある純白の戦闘服を露わにしたザ・ボスが駆けだす。恐るべき速度でスネークに急接近したザ・ボスは、構えた直後のスネークの右腕をとり銃を奪い、そのまま襟首を引いてスネークが地面に叩きつけられる。横にゆっくりと転がる様につつ伏せになって立ち上がる。その視線の先にいるザ・ボスはドリノヴオドノの吊り橋で対峙した時のように、今度はM1911A1のスライドを強制的に外して破壊する。

「帰れ！」

手に残ったトリガーなどがついた方を投げ捨てながら、吐き捨てるように鋭く言い放つ。その言葉に従う気はないと言わんばかりになんとか立ち上がり、ザ・ボスに接近戦を仕掛ける。

首を刈り取る様につかむために突き出された左腕は回り込むようにかわされ、逆にその腕をとられて腹部にひじ打ちを食らう。そのまま前方に一回転させるようにスネークを投げ、背中から地面に叩きつける。

「帰れっ！ この先には我が息子たちとGRUが待ちかまえている。武器もなく、任務が遂行できるはずはない」

再び体を半回転させて体を起こす。背を向けて先程のアンダルシアンに向かう。

「ボス！！」

未だダメージの抜けきらない体を脚だけで立たせ、肩で息をする状態ながらもサ・ボスに走り寄る。左を振り返る様に鋭く体を返したザ・ボスはスネークの右腕をとって自身の左肩に乗せ、腹部に膝蹴り、そのまま再び前方に回転させるように投げ、背中が再び地面に叩きつけられる。

「もはやお前のボスは私ではない」

あくまで吐き捨てるように言う。

「お前のボスはここにはいない」

再び背を向け、今度はアンダルシアンとは異なる方向へ向く。

「帰るがいい。お前の雇い主ボスの下へ」

腰に下げてあった黒い銃……XM16の面影を多少感じるが明らかにそれよりも短いそれを取り出し、円筒が二つついているドラムマガジンを下部に装着した。

「もう貞操バーチャスを示す必要もない」

ガチャリ、とコッキングレバーを引き、スネークへとその銃身を向ける。

「いいか、ここはアメリカではない」

視線をスネークからドローンへと移し、同時に右腕とその右手に持っている銃の銃口も移動させる。刹那、引き金を引かれたそれからガス圧で押し出された弾丸が連続で射出され、ドローンへと吸い込まれていく。銃の排莖口からは等しい数の空薬莖が湯水のごとくあふれていく。数十とその弾丸を受けたドローンは、ついに耐え切れず火花をそこらに散らしながら爆発を起こす。なおも銃撃を続け、爆発も連続的に起こる。その赤い光が辺りを照らし、純白のザ・ボスの戦闘服や白人である二人の肌を染める。

その様を呆然といった状態で見っていたスネーク。その銃撃も止みボスは腕を下ろす。ドローンは完全に炎上している。

「これでここも騒がしくなる。いまのうちだ」

雨が降り始め、雷が一つ稲妻をみせた。

「南に60マイル行けば国境だ。お前なら走破できる」

アンダルシアンの方へと歩みを始めたザ・ボスがスネークに伝える。

「なぜ亡命を？」

「亡命ではない。自分に忠をつくした。お前はどうか？」

振り返り、ザ・ボスがスネークに問い返す。

「国に忠をつくすか？ それとも私に忠をつくすか？」

首だけで振り返っていたのを体ごと返し、スネークに問いを続ける。

「国か恩師か？ 任務か思想か？ 組織への誓いか？ 人への情か？」

スネークの僅かな沈黙。外套を羽織り、再三背を向ける。

「おまえにはまだわかるまい。だがいずれは選択を迫られる。お前は私を許せないだろう」

そこまでいうとアンダルシアンにまたがり、それを確認したように一つ嘸く。

「しかしお前に私は倒せない。私を知りすぎているからだ」

アンダルシアンを操り、スネークのすぐ近くへ歩み寄って見下す。「そのバンダナがいい証拠だ。過去を引きずると死ぬ事になる」

ザ・ボスが手綱を引くと、嘸きを上げながらアンダルシアンが両前足を高く上げる。その足は容赦なくスネークの右腕に下ろされ、スネークが苦悶の声を上げる。

「次に会うことがあれば殺す。いいか、このまま帰るんだ」

鋭く言い放つと右足で軽くアンダルシアンの胸を蹴り、アンダルシアンは走り出した。スネークはそれを見届けた後、しゃがみこんで無線のスイッチを入れた。

「こちら、スネーク。ゼロ少佐？」

『ああ、私だ』

「ザ・ボスが待ち伏せしていた」

『なんだと！』

「ドローンが破壊されて炎上した」

『まずいな。敵の偵察部隊が駆けつけてくるぞ』

「わかってる。しかし、なぜここにザ・ボスが？ 情報が漏れているとは思えない」

『それは考えられん。ザ・ボスが組んでいるヴォルギン大佐はフル

シチヨフとは敵対関係にある』

「銃を無くした……ザ・ボスに銃を」

『スネーク、私もいまだに信じたくはない。あのザ・ボスが、伝説の英雄がソ連に、敵側に寝返るとは……しかし、現実だ。現実を受け止めなければザ・ボスには勝てない』

「いや、そうじゃない。技量的に俺はザ・ボスには勝てない。それはわかっている」

『スネーク、やるしかないんだ。わかるな、彼女は敵だ』

「敵？ 10年も一緒にいた。ザ・ボスが敵だと？」

『いいか、ADAMのまつ廃工場に急ぐんだ。ドローンの爆発で偵察隊が送り出されているはずだ。武器をなくしたんだろう？ 戦闘になれば勝ち目はないぞ。くれぐれも見つからないようにな』

宵闇のドレムチイ（後書き）

ミドリニシキヘビ：別名グリーンパイソン、ニシキヘビ科に属する。その名の通り緑色の美しいうるこ斑点模様を持つが、子は親が草に擬態するのに対し赤や黄色などの体色で花に擬態する。本来熱帯雨林などに生息する種であるが、ソ連にいたるのは実験動物としてかペットとして連れてこられたのだらうか。獲物の捕食方法はチヨウチンアンコウのように獲物を（尾の先で）おびき寄せて、その上から襲い掛かるという頭腦的なものなので詳しく調べてみると面白い。

M1911A1：コルト社のハンド・キャノンやガバメントと呼ばれるアメリカ軍旧正式採用拳銃。45ACP弾を使用する。前回ゼロ少佐の言ったフォーティーファイブはこれのこと。1911年に開発、1926年の改修を経て1985年にベレッタが採用されるまでの間、ずっとアメリカ軍に採用されていた。今なお採用しているユニットもあるという。また、今では多くの社からこの銃にならった、あるいはこの銃のバリエーションが出ている。アメリカ人にとってなじみ深い拳銃。なお、よくアメリカの銃などでみかける「A」というのは、の回数だけ改修、改良がおこなわれたということを指す。

アンダルシアン：馬の品種。原産地スペイン。700年代にイベリア半島の在来馬に北ヨーロッパ原産の大型の馬、北アフリカ原産のバルブが交配されて成立した。ザ・ボスの愛馬は白い体毛を持つ。競馬などよりは気質、毛並、気品などから演技などでよく見かける。

X M 1 6 : 今でいう M 1 6 のこと。そのうち、「A 1」を指す。アメリカ軍のアサルトライフルで、今の M 4 の原型ともいえる。多くの作品に登場し、知名度は非常に高い。弾薬の小口径化で兵士あたりの携行弾薬数が格段に増えた。プラスチックを多用して、その色合いからブラック・ライフルとも呼ばれる。また、カスタムパーツの対応性や小口径弾特有の命中精度などから、幅広く利用されている。X というのは実験段階を示し、つまり実地試験であったのが当時。それに沿い、A の部分も当時は E になっている。つまり「X M 1 6 E 1」という名称だった。

夜更けの夜明けへ

ザ・ボスの銃撃で爆発、炎上したドローン。その音に気付いたらしく、偵察部隊のものと思わしき、草を踏んで駆けてくる足音がスネークの耳に入る。咄嗟にスネークの目についたのはドローンを正面に右に伸びる道、その入り口の右脇にある草むら。スネークは即座に飛び込み前転で草むらに隠れる。ローリングのあとはそのままホフク状態になり、草むらと同化する。

「なんだこれは!？」

その数瞬の後に駆け付けた偵察部隊が疑問の声を上げる。

「本部、本部」

「こちら本部」

スネークの耳に、微かに無線が聞こえてくる。音漏れが防げないのだろう、身を潜めているために音がないこの場所で、敵の無線ははっきりと聞き取れる。

「こちらパトロール。敵が侵入した形跡がある。これより、警戒態勢に入る」

『了解、増援部隊を送る。警戒を強化せよ』

スネークは心の中で舌打ちをする。増援を送られたら、こちらは隠れても見つかる可能性が高い。少しだけどうするか考えるスネークだったが、意を決して二人いる偵察部隊がこちらに背を向けている今を逃すまいと、草むらを出てすぐに回り込むように木に隠れる。草むらの端、それも先述の道の入り口に生えている巨木は、スネークに都合がよかった。そのまま顔だけを出して様子を伺う。ドローン付近を未だ警戒する二人。警戒はまだ解かれそうにないことから、その二人はしばらくここを重点的に探すだろう。スネークは木の枝などを踏まないよう注意しながら、その木を後にした。

数歩進むと、絨毯のように道を埋める草むらが再び見える。もう一本分かれ道を挟んだところにも同じような規模の草むら。今度は

心の中でしめた、とスネークは思う。奥の方も手前の方も、草むらのすぐ一步程度が分かれ道になっている。敵がいなか観察するには都合がいい。

ホフクをやめ、後ろにいる二人がこちらを視認できない、先程の木の影。そのラインをゆつくりと歩き、草むらに足を踏み入れる。ガサガサと音がするが、この程度なら問題はないだろう。極力足音を忍ばせて件の分かれ道へとたどり着く。右へとほぼ直角に分かれるその道を隔てる岩壁に体を寄せ、肩越しにその道を覗く。腰に備え付けてある双眼鏡（シギント曰く彼が作ったらしい）を使って覗き込む。すると、その道の突き当り、左へと曲がる角の奥側に、無線機を背負った敵兵が一人。他には見当たらないが、あの壁は自分だけではなく敵も隠す。無暗にこの道を通るより、一本向こうの道を通る方がよさそうだ。

絨毯のようなその草むらを抜け、もう一つの草むらに進入する。先程と同じく、しかし今度は分かれてはいない右への曲がり角を肩越しに除くと、敵兵が二人。ただ、うち一人はかなり向こう側にいるのでこちらに気付くことはまずないだろう。問題となるのはこちらを視界にとらえうる無線機持ちの兵だ。先程から気になっていることだが、あの大型の無線機はかなり高価なはずだ。それをこんな人数に持たせるとは、よほど資金に余裕があるのだろうか、大した接客態度である。

どうしたものか、とスネークが思案を巡らせ、この草むらで、この時間帯。ふと思いついたように、スネークは視界の左に移る朽ちた木の洞に潜り込む。身長がある程度あるスネークでもすっぽりと収まるここは、ちょうど子供たちが作るダンボール製の秘密基地を連想させる。ただ、スネークにそんなノスタルジックなことに浸る暇はない。

慌てずに慣れた手つきでバックパックから一着の野戦服を引きず

りだし、そのあとに顔面用の塗料も取り出す。木の洞の内部が見える場所に敵兵が近づきそうにないことを確認すると、スネークは今まで着ていたタイガーストライプの迷彩を脱いで、ブラックと呼ばれる野戦服に着替えた。全身真っ黒なそれは本来迷彩用の服ではないが、今の闇夜に紛れるには格好のものだ。次いで、その戦闘服と同じ色の塗料を、目を閉じて顔を洗う時のように塗りたくっていく。ある程度薄めに塗られたそれはあつという間に乾き、目を開いたスネークの顔は真っ黒に染まっている。これもブラックと呼ばれるフェイスペイントだ。黒一色のそれは今の闇夜により紛れやすくなる。タイミングを計って、スネークは木の洞から飛び出して近くの草むらに身を隠す。そこから辺りを伺い、先程の敵兵配置からの移動を見る。しかし、さして変化はないらしい。スネークは草むらから覗いていた視界を下に戻し、草むらから出る。敵兵が後ろを向いた隙を突き、敵兵から数m程度しか離れていない草むらに身を隠す。

しばらく様子を伺うが、こちらに振り返ることは今までない。よし、とスネークは意を決して右手にあるものを握りこむ。黒い直方体に近い小さな箱のようなそれを、先程スネークがいた草むらの方にある壁に向かって投げつける。投げられた空の弾倉は弧を描いて壁にぶつかり、金属製の重いそれが僅かな音を立てる。しかし、静寂を保つこの場所でのその音は、間違いなく今目の前にいる敵兵に届く。

「音がした？」

背中をくるりと返し、その音源と思しき方向を見る。特に目立った変化がないことで気になった敵兵は、肩からベルトで下げているAK-47を構えてゆっくりとにじり寄るように歩みを進めていく。ある程度スネークと距離が開き、足音を聞かれない程度の距離に至った時、スネークは素早く飛び出して目の前にある多少急な坂を駆け昇る。まだその音源に向かっていた敵兵と、少し遠くにいた敵兵はこちらに気付くことはできなかった。スネークが坂を上りきった

後に残ったのは、音源に何も見つけられなかった敵兵の疑問くらいである。

坂を上りきったスネーク。少し細いその道を進むと、ドリノヴォドノを強く印象付ける、溪谷間を結ぶ木製の吊り橋が目に入る。その手前の開けた場所には、以前と異なり敵兵は二人いる。内心まいったな、と思いつつスネークはその状況を打破するべく辺りを見回す。一週間の間に再び作られた八木の巣を落とそうにも、今は銃器はない。と、なると見つからずに進むのが一番だが、この吊り橋を渡る間にほぼ確実に発見される。

意を決して、スネークは二人の視線が外れたタイミングを狙って下に滑り降りる。そのまま即座に草むらに隠れ、再び機を伺う。一人の敵兵がこちらに近づいてきた。それでも、辺りをきよるきよると見回しているのを見るとこちらに気付いてはいない。これは好都合だ、とスネークは内心ほくそ笑む。

数歩、さらに敵兵は歩み寄ってくる。しかも、さらに好都合なことにもう一人は橋の方へ行っている。向こうからも一人近づいてくるが、見つかるような距離じゃない。ざり、と敵兵の靴が砂を踏んだ音と、スネークが砂を踏む音は同時だった。一瞬の出来事に、敵兵は何が自分に起こったのかも分からないままに、襟を手繰り寄せられて地面に叩きつけられる。脳が首筋を強く打つたらしい敵兵は、一言悲鳴を上げる間もなく意識を失う。そのことを確認したスネークは、素早く敵兵を草むらに隠して、吊り橋の真ん中あたりですれ違ふ寸前の二人に向かって走り出した。今なら、スネークの企みがまだ間に合う……！

ギシリ、ギシリ、と木製の吊り橋を踏みしめる足音が頭上から聞こえる。スネークは今、吊り橋の縁に両手でぶら下がってエルド状態になっていた。と、いうのも、今スネークが着ている迷彩と顔に塗りこんでいる迷彩はブラック。となると、橋の上にいるよりも橋の下にいる方が視認性が低くなるのは言わずともわかつていると思う。そして、今まんまと敵兵はそのスネークのカモフラージュに騙されてしまう。

ギシリとなる足音が頭上を通り過ぎ、スネークの頭が二人がすれ違ったか、お互いに踵を返したことを認識する。すると、限界が近くなってプルプルと震えだしていた腕の力を振り絞って体を持ち上げ、吊り橋の上に戻る。二人の敵兵の背後にできたスペースに潜り込んだスネークは、目的地方向へと歩むほうの敵兵に、音を消して歩み寄った。数歩分の僅かな距離だが、お互いの歩むほうは同じため、思うように距離は縮まない。その歯痒さに焦りそうになる心を必死に落ち着かせながら、スネークはその距離をじわりじわりと縮める。

敵兵の体が、不意に後ろから拘束される。スネークが足をかけて体の重心を崩したところを後ろに持つていき、自分にもたれかかるような格好になる。そのまま左腕は敵の首に充てられ、手には濃い灰色の小振りなナイフが握られ、その刃先は首筋に向けられている。右腕は後ろから外側に回すように敵兵の右腕を押さえつけている。とはいえ、ほぼ身動きを封じているためほんの軽い力で抑えているに過ぎない。どちらかといえば、敵の右腕に持たれた凶器はスネークにとって危機をなす以外ない。故に、その動きを悟るためにあるといっても過言ではないだろう。

「言え」

静かに、呟くような声でその敵兵に問うスネーク。しかし、敵兵は命の危機からかしゃべることができないようだ。そのことに小さく舌打ちし、尋問するのをあきらめる。ナイフをほんの少しだけ放

し、左腕が軽く首に食い込む。そのまま体を半身ずらし、その空いたスペースに倒れこもつとする敵兵を、さらに勢いをつけて倒れこませる。先程の敵兵と同じように首筋か頭部を強く打った敵兵は、あっさりと気絶する。そのまま目立つ吊り橋にも置いておくわけにはいかない。心の中ですまんと言いつつも、スネークは容赦なくその敵兵を吊り橋の下に落とした。そのまま、もう一人とはかなり距離が開いたことを確認し、一気に走り去る様に吊り橋を後にし、敵兵がいなかったことを確認しながらドリノヴォドノを出た。

ラスヴェイエットに再び訪れたスネークは、内心「夜明け」の意味をもつこの地に夜更けに訪れるとは、と思っていた。地名だからしよつがないし、それは単に冗談の一環ではある。しかし、そんなことを心中で呟きつつもスネークは警戒しながら北東部の部屋、一週間前に訪れたその部屋を目指す。今回は別のルート、建物の内部を通るルートを選んだ。もはや建物の原型を感じさせないまでに崩れているそこは、小さい男の子が見たら目を輝かせることが保障されるほど、廃工場つぷりを遺憾なく発揮している。

「あれは……？」

そんな廃工場、その内部ともいえないような内部で見つけたのは二、三個の固まって積み上げられている金属のコンテナ。その上に何かおいてあるものを見つめる。

「ダン……ボール？」

この廃工場には似合わない、比較的綺麗なダンボール。折りたためば小さくなりそうなそれを、スネークは若干嬉々とした目で拾い上げ、バックパックに収めた。なぜ若干嬉々としていたかは、当人すら分からないのだろう。

きざぎざ、と赤く錆びたドアが地面とこすれて開く。中には誰の姿も

ない。月明かりが入り口から見て右にある窓から入り込み、見渡すことには不自由しなかった。ベッドの下にももちろん人影はない。ドアの近くにももたれかかってはいない。ではロッカーは？ と一人くらいなら入れそうなロッカーが目に入ったので開けてみる。無論誰もいるわけではない。その時、足に何かが当たる感触がした。どうもロッカーの扉とは違う。足元を見ると、何か黒い金属でできた物体が落ちていた。拾い上げてみる。

「これは……熱を感知するのか？」

ゴーグルのような使用方法と思わしきそれを被り、スイッチを入れれば、視界には青が広がり、所々に黄色が浮かぶ。たとえば、自分の手などは赤くなっている。となると、熱量を色別に分けて表示している、としか思えない。後で詳しくシギントに聞いてみようかなどと考えつつ、誰もいなかった部屋を出る。

崩れているレンガが、辛うじて壁としての形状を保っているところに身を隠し、構えた後一步飛び出る。辺りを再び見回し、ゆっくりと進み始めた。

バチリ、と音がして、その方向から同時に強い光が浴びせられる。咄嗟に顔をかばい、その方向を見る。エンジン音を少しだけ出しているバイクに跨っているのは、明るめのベージュ色をしたライダージャケットに身を包んだ人物だった。

「少し遅れたかしら？」

「エンジンを切れ、聞かれる」

待ち合わせたADAMだろうか、その人物の声は女性のように高めの声だ。それに介することなくスネークはエンジンを止めるよう警告する。

「あなたが西側のエージェント？」

しかし、その警告を聞かなかったようにその人物が再びスネークに問いかける。

「お前がADAMか？ 男だと思ってた」

「ADAMは来られなくなった」

「合言葉を言え。「愛国者は」？」

沈黙が流れる。唯一流れる音と言え、走っていないバイクのエンジン音くらいだ。

「「愛国者は」？」

語調を多少強くしてスネークが問い直す。

「答える」

警戒を強めたスネークが、構えを改めつつ短く促す。

「！」

ガチャリ、と銃器の特徴的な音に、スネークが一瞬と遅れることなくその方向を振り返る。AK-47を持つ幾名かの兵士が、スネークを囲む。

「ハメられた？」

「伏せて！」

先程までより少し小さい、スネークにだけ聞こえるような声でその人物が言う。そのセリフに咄嗟に身を投げ出すように伏せたスネーク。地面に体が着く前にライトは消え、敵兵が一瞬怯む。そこにすかさず腰から拳銃を取り出し、地面と水平に構える。トリガーを引き、爆発によるガス圧で連続で弾丸が発射される。フルオートで打ち出されるその反動で、横なぎに拳銃の銃口は移動していく。そのなぎ払いの餌食になった敵兵が、血と声を上げながら地面に倒れこんだ。五名全てが弾丸を食らったとほぼ同時に、スネークの体が地面に着いた。ここまでの僅かな時間、その間にすべてケリが着いた。

今あったことを全く気にしないように、その女性が腰の左側から細長いクリップを使って弾丸を補給する。

「これが合言葉の…… 答えよ」

クリップを投げ捨て、バイクに跨ったまま足で転倒防止用の器具を下ろした後、バイクから降りる。ヘルメットを脱ぎ、その下から

出てきた乱れ気味の美しい金髪を、頭を振って顔から払う。月明かりに照らされて蒼く幻想的に光る彼女の白い肌と、整った顔は、とても美人という印象を持たせる。

互いに数歩歩み寄り、立ち止った彼女はライダージャケットのチャックを腰までおろし、胸の下着をも露出させる。

「よろしく」

そう言う彼女だが、対するスネークは男の性なのか露出された胸の方に視線が行ってしまっている。

「EVAよ」

EVE……文字だけで表すと分らないが、けしてイヴとは読まない。アメリカではなく、ここはソ連だ。彼女の名はエヴァ、ソ連の施設に潜入するスパイだ。アメリカの読み方をする名前では即座に怪しまれるはずだが、ソ連読みなら名前で疑われることは無い。

夜更けの夜明けへ（後書き）

HQ: Headquartersの略、司令部のこと。ただし、現在では無線では傍受の可能性などを考慮して言わないことも多い。なお、原作では本部の上にルビとして用いられ、発音は普通にHQである。

無線機：この時代、無線機というのはまだ大型で、今のようなハンドサイズなんて夢のまた夢だった。また、大変高価であり、一人一つということは軍資金的に考えて不可能。故に、当時は無線兵というのが存在し、数人に一人という割合のその兵士が無線を担うことになっていた。ランドセルより少し大きいサイズの本体を背負い、通話は据え置き電話の受話器のような大きさのそれを使う。

ブラック：本来なら迷彩服ではない。だが、真黒であるその服は闇夜に紛れて潜入する際にかなり便利である。フェイスペイントも同じく真っ黒に顔を塗りつぶし、ほかの色は使用しない。原作では上記のように夜の場合、草むらではホフクだと95%のカムフラージュ率を得ることも容易だった。

エルード：いわゆる懸垂などのぶらさがり。立つことができな狭い足場でも手のひら分だけあればあとは腕力次第で移動できる。また、足場の下に自身の体が移動するため、今回のように身を隠すのにも使える。ただし、原作では長時間行くと腕力ゲージがなくなっていく。思いのほかなくなるのが早く、上げれば回復するものの短時間しか姿勢を維持できない。

ダンボール：波上に加工された紙を表裏を紙で覆ったもの。段ボール。ボール紙を使ったことと、切った際波が段に見えることが由来。イギリスでシルクハット内の汗を吸い取るために19世紀使われ、次第に梱包素材として使われる。しかし、スネークにとってはご察しの通り隠れるためのものであり落ち着く場所である。また、原作ではなぜか紙製にもかかわらず自身に燃え移った火を消化することができる。

夜更けの始まりと夜明けの山猫

静かな部屋に、葉巻がちりちりと燃える音がいつもより大きく聞こえる。その音しかしないからだろうか。

金属製の冷たく硬いベッドに腰掛けたスネークの口から紫煙が吐き出され、EVAの方を向く。

「計画と違う。ADAMはどうした？」

「あなたの名前は？」コードネーム

「俺は……スネークだ」

「スネーク？ 蛇ね。私はEVE………誘惑してみる？」イサ

EVAはスネークの隣に腰をおろし、それに興味はないという意思を示すようにスネークは右に体を向け、背を向ける。

「ADAMはどうした？」

「ヴォルギン大佐は用心深いわ。ADAMは適任でないと判断されたの」

「君なら適任なのか？」

「ええ」

「どうして？」

「彼には出来ないことが出来るから」

「NSAの暗号解読員だったと聞いたが？」

「そう。4年前にADAMと一緒にソ連へ亡命したの」ブルム・ハンドル

「箒の柄……モゼルミリタリーとはな」

EVAが右の腰をみせた時に見えたホルスターに、改めて興味を示したスネーク。先程スネークが伏せた際に、EVAが敵兵を掃射するのに使った銃だ。その独特なトリガーの形状からそう呼ばれるドイツ製の銃だ。

「火力があるから、バイク乗りには重宝するの」

「銃を横に構えて銃口の跳ね上がりで水平に薙ぎ撃つあの撃ち方……見事だった」マズルジャンプ

「西側にはないやり方でしょ？」

その、横なぎに撃った時の構えをやりながら言うEVA。その右手に構えられたモーゼルミリタリー。そこにスネークが目を付けた。「コピー品だな？」

「ええ、中国の十七式拳銃……ここじゃ、これでも高級品なのよ」
あどけるような言い方をするEVA。確かに、ソ連や中国では高級品に違いはない。

「大丈夫、あなたにはアメリカ製を用意しておいたわ」

そういつて、数歩腰かけたスネークに歩み寄ったEVAは、ベルトから外した銃を一丁渡す。それを見て、スネークがはっと興味を示す。

フォーティファイブ
「45口径か」

その銃を受け取り、近づけて観察する。すると、何かに気付いたようで、葉巻を地面に投げ捨てて足で火を揉み消す。その様は、まるで待ち兼ねていたプレゼントを渡された子供が、それまで持っていた玩具おもちゃを興味を失くして地面に投げ捨てた様と似ている。

「これは……」

「気に入った？」

確信めいたように聞くEVAだが、どうやらスネークの耳はそれを左から右へ流してしまっただけらしく反応はしない。だが、その夢中な様を見る限りEVAの勘は当たっただけらしい。

「鏡のように磨き上げられたファイディングランプ……強化スライドだ。更にフレームとのかみ合わせをタイトにして精度を上げてある。サイトシステムもオリジナル、サムセイフティも指を掛け易く延長してある……トリガーも滑り止めグループのついたロングタイプだ。リングハンマーに……ハイグリップ用に付け根を削りこんだトリガーガード。それだけじゃない、ほぼ全てのパーツが入念に吟味されカスタム化されている」

その「気に入った」らしいM1911A1カスタム品を構え、カ

チリとトリガーを引く。

「これほどのモノをどこで手に入れた？」

「西側兵器の保管庫から持ってきたの。もとは西側そっちの将校のものだったんでしょね。他にもあるわよ」

そう言っで。白い衣服らしいものと、もう一丁の銃を机から持ち上げる。

「これはあなたが持ち込んだものでしょう？」

そういつて見せた銃は、バーチャスミッションのときにスネークが持っていたMk22ハツシュパピーだった。

「あとこれも」

「なんだ？」

「科学者に変装するための服よ」

「変装？」

「そう。ソコロフを助けたいんでしょ？」

「……ソコロフは無事なんだな」

「ええ、引き続きシャゴホッドを作らされてる」

「どこで？」

「研究所よ。最新兵器を研究するために科学者達が集められているの。警備は厳重よ。だけど、科学者に変装すれば潜り込める」

「ソコロフも連れ出せる？」

「それはあなた次第ね」

「研究所へのルートを教えてくれ」

「一番安全なのは、裏側から侵入するルートね。まずはここから、ジャングルを北に向かって。物資搬送用のヘリポートに出るわ。ヘリポートを越えて北に行けば、大きなクレバスがあるの」

EVAがルートを説明し始めたのと同じくらい。スネークは左胸からナイフを取り出し、先程受け取ったM1911A1と構える。

しかし、その手にしっくりとこないようで少しだけ頭を振る

「そこを降りれば洞窟に入れる」

スネークは全く聞いていないようにM1911A1のグリップにナイフを走らせ始めている。

「洞窟を抜ければ、マングローブの林に出るわ。そのままマングローブを進んでいくと倉庫があるの。倉庫に入って中を通り抜ければ、研究所のすぐ南に出るわ」

「わかった」

「さっきから何をしているの？」

「近接戦闘ではハンドガンよりもナイフが有利な場合もある。こうしておけば、ナイフを握ったままハンドガンを確実に構えることが出来る。発砲とナイフファイトを瞬時に切り替えることが出来るんだ」

そう言いながら実際に手振りをするように見せたスネーク。言い終わった後も構えを試し、一度ずつ構えを変えてみる。

「よし、北に向かおう」

「ちよつと待って」

ナイフをしまい立ち上がったスネークを、EVAが制する。

「なんだ？」

「疲れてるんでしょ？ 少し休んだらどう？」

「大丈夫だ」

そんなEVAを左手で軽く押しつけるように進もうとしたスネークだが、一瞬だけ呻きを漏らして体勢を崩す。

「その身体では無理だわ。この先はまだまだジャングルよ」

スネークをベッドに腰掛けさせる。

「それに夜明けまでまだ1時間あるわ。夜のジャングルを案内無しに行くのは危険よ」

「君は？」

「私は戻らないと。長く空けられないわ。感づかれるもの」

それもそのはず、彼女はGRUに潜り込んだスパイだ。

「大丈夫、無線機で情報を送るわ」

「それだけか？」

「私の任務はあくまでもあなたへの情報提供よ」

「……」

スネークが肩を微妙に落としたように見える。それをEVAは見逃さなかったらしい。

「不満みたいね。じゃあ少しサービスしてあげる」

靴音を立てて、EVAがスネークに近づく。吐息も届くかというような距離に二人の顔が近づいた。

「夜明けまで見張ってあげるわ。さあ、横になって」

今の思わせぶりな雰囲気は勘違いしないでとばかりに言うEVA。それに若干の外れなことを言われたようにスネークが視線を向ける。

「どうしたの？」

それはさておきとして、眠ろうとはしないスネークに声をかける。

「信用できるほど、君を知らない」

「どこまで知れば信用できるの？」

「いや もう誰も信用できない」

恐らくは師、ザ・ボスの亡命だろう。諦めたのか、EVAは部屋の中央を越えて部屋の対角線上に立っている。その時、無線機からCALL音が鳴った。

「出たら？」

それに若干戸惑ったようなしぐさをしたスネークだが、無線機に左手を伸ばしてスイッチを入れた。

『彼女の言う通りよ。眠った方がいいわ』

無線はパラメディック、つまりスネークの衛生兵^{メディック}からだ。いつもの賑やかな彼女とは違い、少し柔らかい口調だ。

『本当ならまだ、集中治療室^{ICU}にいる身よ。傷ついた時や疲れた時は寝るのが一番よ。医療担当としての命令よ。眠りなさい。いいわね』

「ああ………」

無線が切れ、スネークはベッド……ではなくベッドが置いてある

壁に身を預けた。

その部屋の窓から見える外。そこに、EVAがなにやら大型のアタッシュケースを広げていた。どうも、アタッシュケースの中身は無線機らしく、リールデッキになっていた。どこに通信を行っているかなどは分からない。

翌朝。スネークは自身の顔に感じる明るさで目を覚ました。薄く開いたスネークの視界に映った物は……EVAの下着だった。

そんな微笑ましい一面を展開する部屋だが、その外には脅威が迫っていた。その足音に気付き、スネークが完全に起きる。

「どうしたの？」

「囲まれた……敵は……4人確認できる……」

その服は見たことがある黒い軍服だ。手にはAK-47を持っているようだ。

「まずい！ 山猫部隊よ」

そう緊迫したように言うEVA。だが、対するスネークはとはいえあるうことが視線が若干下……つまり胸部に行っていた……

「逃げましょう？ 急いで！ 武器、装備を忘れないで！」

EVAが金属製のベッドの下に手をかけた。

「さあ、手伝って」

その意図をスネークが察し、二面を壁に着けているベッドの、EVAが持っているもう一面の縁をつかむ。少し引いて、二人がベッドを持ち上げる。それを窓の下に右に90度回転させて置き、ヘルメットをベッドから取りなおしたEVAがベッドの下にあった正方形の戸を開ける。

「ここから床下に出られるわ」

その床下に潜り込んだEVAが、小さな金網越しに「少佐」を見つけた。

「オセロットだわ」

以前に出会った赤い帽子がトレードマークのあの少佐だ。

「私はバイクで突破する。また連絡する！」

「わかった、俺は奴等を引き付ける」

そう言ったスネークの顔に、EVAの顔が近づいた。

「！」

左ほおに、EVAの唇が一つ触れた。

「死なないでね」

そう言い残し、彼女はヘルメットを被って床下に潜り、スネークが油の切れたような音を立てるその戸を閉めた。

立ち上がり、左胸からナイフを、腰からM1911A1を取り出して構え、臨戦態勢に移った

夜更けの始まりと夜明けの山猫（後書き）

タイトル、始まり：この世の人間の最初の二人とされるアダムとイヴ。その片割れであるEVAから。こちらは原作にはなく、筆者のネーミング

誘惑：創世記にて、ADAMとEVEはエデンの園にて、ほかの全ての果実と異なり唯一食することを禁止された知恵の樹の実。食べれば必ず死ぬとされていたため、禁断の果実と呼ばれた。その実を食べることをアダムとイヴの二人をそそのかしたのが、今でいう蛇であったとされる。詳しくは書かないが、いわゆる失楽園のといわれるこの話をEVEは言った。

マズルジャンプで水平に薙ぎ撃つあの撃ち方：通称馬賊撃ちとよばれる方法で、文字通り中国の馬賊が行った。スネークの言うとおりにマズルジャンプ、つまり銃を撃った時の反動で銃を横薙ぎに撃つと、大変反動が強く命中率がただでさえ悪いモーゼルだが、なおさら命中率は下がってしまう。本来は、左手で手綱を握りながら右手で「振り下ろす」ように撃つのが馬賊撃ちと呼ばれていた。反動を殺すためだ。しかし、モーゼルの場合横薙ぎに撃つとその強い反動で横に流しやすい。命中率はともかくとして、とっさの掃射にはいいのかもしれない。ちなみに原作ではシギントとの無線でこのことに関する情報を得ることができる。

マングローブ：東南アジア、インド沿岸、南太平洋、オーストラリア、アフリカ、アメリカ等に分布し、紅樹林または海漂林とも言

う。熱帯、亜熱帯の地域に生息するため、本来ならソ連にあることはないはずである。河口に広く生息し、条件次第では普通の海岸でも生息していることがある。ただし、マングローブというのはいわゆる森林の種類の名称であり、一種の植物の名称というわけではない。現代ではその数を急激に減らしていることが注目されている。

山猫に睨まれた蛇

スネークは、まだ敵兵の足音が遠いため、扉の方を向いて右側にある机の陰に隠れる。そしてバツクパツクから先程EVAにもらったMk22ハツシュパピーその他を取り出す。サプレッサーをそれに取り付け、準備が終わった。腰から指向性マイクを取り出す。それを、机から少し身を放して、敵が来るのであろう壁の方へ向け、少しずつ右へずらしていく。すると、ある程度右へ行っただころで、微かに足音が聞こえ始めた。

さらに右にずらして足音を完全に捕捉し、それを追うように左に戻していく。つまり、敵が扉に近づいてきている。マイクが机の真ん中に来たあたりでマイクをしまい、Mk22ハツシュパピーに持ち替える。

「^{ムーブ}行け！」

微かではあるが、おそらく突撃隊のリーダーのような人物が号令を発したのが聞こえる。スネークが再び机に背をつけ、手に持ったMk22ハツシュパピーを顔の右横にくるように構えている。

汗が流れる。左のこめかみを通って流れ落ちるその汗は、スネークが立てていないほうの左ひざに落ちた。瞬きをする間も惜しい。もしかしたら、その瞬間に突入されるかもしれない。ナイフとグリップを握っている手に力がこもる。いつでも動けるようにと片膝が立っている両脚の筋肉が僅かに膨らんでいる。

「^{ムーブ}行け！」

今度は、明らかに扉の前でその言葉が発せられた。来る！

錆びた金属の扉が、耳障りな甲高い音を奏でる。一瞬でいくつも奏でられたその音は、熟練のスネークにはすぐにショットガンで撃つたのだと分かった。もう一発。その間にポンプを引いた音すら、いやに大きく聞こえた。

扉が音を立てて役目を放棄した音と、それに一瞬遅れて軽い金属製の何かが床にバウンドして転がる音が聞こえる。グレネードだ、と悟るのに時間はかからない。二、三秒の猶予の中、スネークは体を強張らせ、目を固く閉じ、耳を塞ぐ。

刹那、もう一つ太陽が生まれたような光の奔流が部屋を埋め、同時に耳をつんざく甲高い音が鳴り響く。閃光音響手榴弾を投げたのだ。しかし、しっかりと耳と目を守っていたスネークは、すぐに立ち直ることが出来る。部屋にどかどか入ってくる足音が聞こえ、スネークは僅かに体をずらし、机の真横に銃を向ける。もちろん、机から銃身が出るようなへまはしない。しかし、敵はすぐにあきらめたらしい。部屋から出ようとする気配を感じ、スネークはしゃがんだまま机から身を出して銃を敵四人に向けた。サプレッサーつきのそれから、空気が漏れ出るような音が4つ部屋に生まれる。四人突入した山猫部隊の一部は、全て頭部に麻酔針が刺さっている。瞬間的に昏倒した四人をスネークが確認し、スネークは先程EVAが潜り込んだ戸をあけ、そこに潜り込んだ。

潜り込んですぐ、スネークはその金網から一人敵兵がいるのが見えた。その敵兵がこちらに気付いている様子はない。スネークは金網に麻酔針が当たらないように慎重に狙いを定め、トリガーを引く。頭部に当たることは叶わなかったが、胸部に針が刺さったのを見てスネークは移動を再開した。胸部であれば、麻酔が回るのにそこまで時間はかからないはずだ。先に進むと、もう一人敵兵が見えた。先程の敵兵とは違うらしい。黒い軍服はこの緑と赤の地域では目立ってしまう。スネークはそれにニヤリとほくそ笑みそうになる。ただ、自分もその色と同じ迷彩を着ている。状況は同じ、油断はできない。むしろ、相手に数が多いので、そこが勝負の分かれ目だ。

「どうかしたのか？」

その敵兵が先程撃った敵兵の方を見て何か気づいたようだ。と、いうことはおそらく麻酔が回ったのだろう。その敵に気を取られて

いるところを、今度は頭部に麻酔針を撃ちこむ。うつ、つと呻きを漏らしてあっけなく夢の世界へと落ちていった。

一回り床下を回って誰もいないことを確認したスネーク。先程二人目の敵を撃った金網のところに戻ってきたスネークは、そのまま一人目を撃った金網とその二人目を撃った金網を一直線に結んだ時、一人目の金網とは逆方向の方にある出られそうな所へと向かっている。丁度金網がないのなら、ホフクのまま出られそうだ。そのまま出ようとして

「どこにいる？」

目の前を過った敵兵に慌てて身を引つ込める。丁度出口が草むらでよかった。危うく見つかるころだったが、通り過ぎたその敵兵をすぐさま拘束する。以前吊り橋の敵兵を拘束したのと同じ格好になっている。流石に山猫部隊エリート隊員でも死ぬ恐怖はあるらしい。そのまま左腕を右腕で引つ張るように首を絞め、ころあいを見て解放した。酸素を失って気を失ってしまったことを確認すると、スネークは屋根への梯子を指していた。その梯子へは距離はそうそうない。お目当ての梯子にたどり着いたスネークは、ゆっくりとそれをのぼり始める。屋根にのぼりきってみると、その屋根の先端にSVDを構えて警戒している敵兵の姿があった。足音を忍ばせ、銃とナイフをいつも通り構えながらゆっくりと近寄る。

「動くな」

静かに、そして低く、銃を少し揺すって音を出しながら声をかける。音で銃を向けられていると悟った敵兵は立ち上がり、両手を上げた。そのまま抵抗できないところを左腕と左肩をつかみ、足をかけて一気に引き倒す。固い屋根に頭部をぶつけられ、一瞬で気を失ってしまったようだ。それを見て、スネークはその屋根から辺りを

見回す。双眼鏡をつかっても敵は見えない。あとは、その屋根を下りて、建物の外壁を見回せばいい。スネークはEVAと待ち合わせに設定していたソコロフが監禁されていたあの部屋の前に降り、そのまま崩れた元壁を飛び越えて、外壁の方へと歩いて行った。

銃とナイフを構え、足音をある程度忍ばせてゆっくりと警戒しながら歩いているスネーク。そこに、がしゃんとなにかが倒れたような音がする。それに振り返り、その方へと歩みを進めていく。

すると、ソコロフがいた部屋の扉のように赤く錆びてしまった、外側の手すりなどが全滅している階段の近くのコンテナ。そこを通りかかった時

「会いたかったぞ」

聞いたことのある声に、即座に振り向いて構える。

「……貴様に」

その視線の先にいたのは、ヘルメットをつけたEVAを捕えて首にナイフを当てて拘束している　山猫部隊長、オセロットだった。首には、チェーンで弾丸を一発ぶら下げている。

「その構え、その構えだ」

「動くな！」

EVAがオセロットを押し、拘束から逃れようとするが、すぐに腰からオセロットに捕らえられた。首筋に再びナイフを持っていうとしたところに、たまたま胸に左手が当たった。

「ん？　女スパイか？」

首に突き付けられたナイフが垂直になり、そのままオセロットは鼻を嗅ぎ出す。

「雌犬め、香水などつけやがって。そこで止まれ！」

その間にじりじりとにじり寄っていたスネークに気付いたオセロ

ツトが、銃を向ける。

「もうジユウドーはごめんだ」

「シングル・アクション・アーミーか？」

「ああ、もうあんな弾詰まりは起こらない」

装飾が派手な鈍く光る銀色のそれを、人差し指をちつち、と振る様にかざすオセロツト。以前、スネークにリボルバー向きと言われ、て転向したのだろうか。

「あれがアクションだと？ あれは貴様の虚栄心が生んだ必然だ」
嘲笑うように言うスネーク。最後には構えをしっかりとオセロツトに向けなおす。

「なに？」

「確かにいい銃だ。だが、その彫刻はエンクレイブ何の戦術的優位性もない。実用と観賞用は違う」

「く……」

的確に突かれた自分の行動に、右手を振り払うような動作をするオセロツト。

「それとお前はもうひとつ、根本的な誤解をしている」

「？」

「お前に俺は殺せない」

分からない、という表情のオセロツト。スネークは両腕の構えを解いて下げ、一言一句区切る様に宣言する。

「なめるな！！」

激昂し、スネークに向けたシングル・アクション・アーミーのトリガーを引く。しかし弾は出ない。何度ハンマーを起こしてトリガーを引こうが一発も弾は出ない。

「！！」

オセロツトが弾切れに気付いて隙を見せた。それを見逃さず右手に持ったそれを殴り飛ばし、体勢を崩したところを左脚で後ろ回し蹴りを見舞う。それを食らったオセロツトは柵がないため地面に背中から落ちる。そのままEVAはそこから飛び、捻りを加えてその

ままバイクに飛び乗るということをやってのけた。

オセロットが立ち上がり、ナイフを構える。それを見たEVAが二度ほどハンドルのアクセルを捻る。両者が互いに走り出し、EVAの乗ったバイクの前輪が浮き上がる。その前輪はオセロットのナイフを弾き飛ばし、それに続いた後輪がオセロットの顔を蹴とばした。巨大なバイクで宙返りをやってのけたEVAはそのまま着地を決める。オセロットの弾き飛ばされたバヨネットを左手でキャッチし、ほぼ同時に先程のシングル・アクション・アーミーが地面に落ちた。

「6発だ」

「？」

「そいつの装弾数は6発、マカロフは8発。残弾数を体で憶える事だ」

オセロットが銃を取り、ゆっくりと立ち上がる。スネークが向けていた銃をさらに強く警戒して構えるが、戦闘意欲はもうないらしい。

「高貴な銃だ。人を撃つもんじゃない」

「くそっ！」

右手にもったそれをガンアクションを行いホルスターにしまう。じりじりと下がる。

「また会おう！」

語調が悔しさその他を全面的に滲み出している。そのまま走り去ろうとし、撃ちぬかんとモーゼルミリタリーをEVAが構える。

「待てっ！」

それをスネークが手で制す。

「どうして？」

「奴はまだ若い」

「後悔するわよ」

それでもモーゼルミリタリーを腰のホルスターにしまい、アクセルを捻る。マフラーから威勢のいい音が噴き出してくる。

「奴が戻る前に帰らないと」

走り出し、ハンドルを捻ってタイヤを滑らせつつ急激に方向転換する。そのまま階段を駆け上り、壁も柵もない踊り場から勢いをつけて飛んだ。それは屋根に乗るほど高く、屋根から降りたそのバイクは丁度降りたところにあるフェンスを破壊して走り去っていった。

山猫に睨まれた蛇（後書き）

指向性マイク：その名の通り、指向性のあるマイク。特定方向の音を鮮明に拾うことができ、メタルギアシリーズでは会話の盗聴、人物の特定、場所の把握などに使用される。本作で使われるのは音を拾ってイヤホンで聞くタイプ。原作では使う機会はほぼない。また、指向性がかなり強いいため、二人だけの会話を盗聴するときにもマイクを多少動かす必要があることが多い。

スタングレネード：日本名、閃光音響手りゅう弾。その名の通り約百万カンデラの閃光と約百七十デシベルの音が発生し、人間は反射的に頭を手で覆い腹部を抱えるようにうづくまる。爆発で飛び散る破片などによるけがはあるものの、ほとんど非殺傷武器である。もともと対テロリスト用に使われ、人質を含めて数秒行動不能にできるため、突入にもってこいである。マグネシウムと過塩素酸カリウム（あるいは過塩素酸アンモニウム）を燃焼させる。

SVD：日本名ドラグノフ狙撃銃。その名の通りエフゲニー・F・ドラグノフが設計した。7.62mm×54R弾を使用する。もともと歩兵隊を中距離から援護、狙撃による排除を目的としているために精度は良い方ではない。しかし、AK-47のように長期間使用を考えているため、部品数が少なかったり肉抜きが多かったりとタフで軽いものとなっている。第二次大戦中、モシン・ナガンによる狙撃の有用性が確認され、しかしボルトアクションのそれでは連射性に優れない。そこでセミオートのを、と開発された。

シングル・アクション・アーミー：コルト社製のリボルバー拳銃。通称はピースメーカー。略称はSAA。長くにわたって生産されており、途中一度の生産中止を挟んでいる。その歴史に比例するようかなりの量のバリエーションがある。西部開拓時代に使われたもの。有名なバントラインスペシャルもこのリボルバーのカスタム品。ハッチのような部分を開け、一発ずつ弾倉を回転させながら装填する独特のリロード方法で、時間がかかってしまう。そのため、S & W社のもよりそこが劣っているとされた。しかし使用弾（45LC弾）の威力や単純な機構による信頼性が高く、20年ほど、コルト・ガバメントが採用されるまでアメリカに制式採用されていて兵からの評価も良かった。マカロニ・ウェスタンを代表する銃であるため、現在でもファンが多い。

バヨネット：アサルトライフルなどのバレルに取り付けるナイフ。持ち手の鏢部分に取り付けようの穴が開いているのが特徴的。日本では三八式歩兵銃にもつけられていたため、意外に知名度は高い。ただし名称を知っている人は少ない。また、第一次大戦以降は使われる機会が激減していく。ただし、接近戦闘での有用性や、心理的な問題から、今でも装備から消え去ることはない。

一路、クレバスへ

EVAがバイクを使って破壊したフェンスは、彼女が先程言っていたクレバスへの道だ。素直にその役割を果たしていないフェンスを通り抜け、しばらくすると大きな沼が広がった。チヨルニ・プル黒の水ドと呼ばれるこの地に、敵兵は見受けられない。そもそも視界が開けて身を隠すようなスペースはほんのわずかにある木の影位。しかし……

「またワニか……」

以前、あの粘性の強いドレムチイの沼で見かけたインドガビアルが、あそこの数倍という数うろついているのだ。それに、いくらワニが両生類とはいえ、水中の方が彼らにとってはより良い縄張りテリトリーである。おそらく危険性はより高い。

あまりワニがない、こちら側の水辺の真ん中あたりから、あまり綺麗とは言いがたいが視界の確保には困らない程度の水へ飛び込むと、どうやら湖の深い部分にはワニがないようだ。来ないとも限らないので、水をかく音に気を配りながら、スネークは息の続く限り潜行を続けたが、スネークも人間である。丁度湖の中央あたりか、スネークが水面に向かって急浮上し始めた。その急浮上中でも、スネークは冷静さを欠くようなことはしない。視界の届く範囲にワニがいないと確認し、水面から顔を出す。今まで肺にためていた二酸化炭素を思いつきり吐き出し、荒い息で酸素を取り込む。どんなよりと曇った空と水面の綺麗でも汚くもない色は似ていて、唯一違うのは地上の緑や黒。その地上めざし、スネークは再び身を全て水に沈めた。

ざぶり、と水を脚でかき分け、スネークが上陸する。そして完全

に湖から体が出て、数歩歩いた時だった。左肩の無線機が呼び出し音を鳴らし始めた。

『スネーク、聞こえる?』

『EVAか』

『ええ、お待たせ』

『無事着いたのか?』

『誰にも見られてないわ』

『君はヴォルギンのそばにいるのか?』

『そばもそば……』

『ザ・ボスは?』

『ええ、彼女も近くにいる』

『気をつけるよ』

『ありがとう。ザ・ボスとは気があうの。同じ亡命者同士ね』

『どうして亡命を? 俺には考えられない。国を売るなんて……』

『ザ・ボスのこと?』

『なぜだ? 君はアメリカで生まれ育ったんだろ?』

『そうよ、小さな田舎街でね。他の国や異なる文化や考え方が存在するなんて思いもしなかった。国家安全保障局^{NSA}で働くまではね……

ある日、これまで当たり前だと思っていたことが信じられなくなっ
た』

『何を見た? 何をすれば亡命を考える?』

『信じないわ』

『教えてくれ』

『宇宙を見たの』

『宇宙?』

『本当の宇宙ではないわ。傍聴界での宇宙。そう、私は地上の重力に縛られていた。それだけ……人も国も環境で変わる。時代で変わる』

『ザ・ボスも似たようなことを言っていた』

『この国とアメリカではなにもかもが違う。でもそれは立場が違う』

だけ。見る角度が違うだけ。こつちに来てわかったことがある。今まで伝えられてきたことの半分は根も葉もない嘘で 残りの半分は利用するために創られた嘘』

「真実は何処に？」

『嘘の中に隠れているの』

「君も嘘を？」

『どうかしら。嘘でも本当のように振る舞うように訓練されている。それはあなたも同じでしょ？』

「いや、俺たちは……嘘であっても信じなければならぬ。それが任務であれば」

『覚えておくわ。何かあれば無線連絡して。周波数は142.52よ。じゃあー！』

無線が切れ、しゃがみから立ち上がったスネーク。しかし、左腕の辺りに違和感を感じて、ふとその方向をみやると、何やら白い物体が引っ付いている。どうもヒルのようだ。スネークは小さく舌打ちしたいのをこらえ、葉巻を一本取り出して火をつける。それをヒルに押し当てると、噛みついてるのをやめて自らポトリと落下した。もう一匹、腹部にかみついているのも同じ方法で剥がす。こうすれば、ヒルの歯が体内に残ることなく除去できる、と以前ザ・ボスに教わったことがあった。

今度こそ立ち上がり、歩き始めた。しかし、またもやスネークは歩みを止める。目の前に、二つの木を結ぶロープが、たまたま視界に入った。

「畏……？」

何かあるかもわからないので、スネークはそのままロープをホフクで潜り抜けた。ちらりと上をみれば、いかにも痛そうな刺々しい牙のようなものがかなりの数備えられている木がぶら下がっている。おそらく、ロープが切れるとあれが勢いよくロープを切った者に襲い掛かるというものだろう。

それから再び進むと、三度スネークは立ち止まる。正直、いい加減にしてほしいものだ。目の前にあるのは、三枚の鉄条網。それも時折バチバチと青い筋が奔る。電流が流れているのだろ。顎に手を当て、考え込んでいると、ふと視線が下に行く。すると、何かお腹ばいで通ったような跡があった。少し、地面が抉れているのだ。その先を何となく目で追うと、スネークはしめたと思った。と、いうのも、その危険な鉄条網に文字通り抜け穴があったのだから。

少し辺りを見回し、鉄条網の奥を見るが、こちらを見つけれられるような敵兵は見つからない。その地面の跡を沿うようにホフクし、鉄条網の下を潜り抜ける。万が一当たったらと考えるはいたが、どうやらその心配はいらなかったようだ。

そのホフクのまま進んでみれば、視界のなかで黒い何かが少し動いた。それにはっとし、そっと草むらから双眼鏡で覗いてみれば、その方向には鉄条網の向こうで真っ黒な犬が二匹、互いに少し離れてうろついている。

「軍用犬か……」

普通の野良犬であればよかったが、生憎とあの警戒の上手さと、近くに敵兵が一人見受けられることから、どうやらそうではないらしい。軍用犬となると、かなり厄介だ。犬は鼻が利き、足が速く、なおかつ軍用犬ともなれば人間に従いやすく、獰猛な性格であるはずだ。鼻が利く、ということとは、スネークが服装を変えて視界をごまかしても意味がないということである。とりあえず、一度その網をくぐり直し、スネークはこの場では目立つブラックのカムフラージュをタイガーストライプとウッドランドに着替え、塗り替え、とにかく人間の眼だけでも欺くことを考える。さて、犬はどうするか

……

そのまま双眼鏡で再び辺りを見回すスネーク。そして、その視界

が左に行つたとき、スネークは双眼鏡を止めた。ツタが絡まつた巨木が、枝を鉄条網の向こうまで伸ばしている。あそこからなら、敵を排除してそのまま降りれそうである。なるべく、スネークは敵兵たちがいる鉄条網の向こうから距離を取る様に、反対側の壁に沿つてホフクしていく。すると、目の前にいきなりカーキ色の物体が現れ、スネークは危うく声を上げそうになる。

（クレイモアまで……警戒が嚴重なことだ）

本来アメリカ製の指向性対地雷であるクレイモアだが、おそらく研究用に鹵獲されて使われているのだろう。しかも、本来ないはずの機器が上部に取り付けられている。

（赤外線式探知か？ 姿勢が低ければ回収できそうだな）

慎重にホフクで「ソ連製クレイモア」に近づくと、予想通り人間の背丈に反応するよう、多少上向きになっているそのセンサーに触れることは無かった。後々もしかしたら使えるかもしれないので、信管を解除したそれをバツクバツクにしまっておく。

例の大木にたどり着くまで、計三つのクレイモアがあつた。それらもすべて回収、獲得し、目当ての大木前に到着した。立ち上がることは無く、片膝をついた状態で辺りを軽く見回り、犬たちもこちらを向いていない時を見計らつて一気に木の太い枝がある高さまで登り、枝に移る。そこから再び双眼鏡を取り出し、辺りを見回し始めた。

遠くに一人、そして近くに一匹、その中間辺りの距離から、少し左に一匹。おそらく、今の位置に気付きかねないのは近い犬一匹のみ。その一匹に、Mk22ハッシュパイの銃口を向け、頭部に発砲する。サプレッサー装着銃特有の、銃口から衝撃波が抜ける音がある。その音は大きくもなく、低い音であるため聞こえても位置を特定しにくい。見事に一発で命中したその麻酔針は、人も犬も例外なく眠りに誘う。一瞬悲鳴を上げ、すぐさま眠りに落ちた。

「何だ!？」

しかし、その異変に敵兵が気付いたようだ。小さく舌打ちしたス

ネークは一度目立ってしまふ木の枝から降り、近くの小さな茂みへと身を隠す。すると、ここから50mほど離れたところにある朽ちた倒木を乗り越えてきた。スネークは咄嗟にまだ遠い敵兵に銃口を向け、再び引き金を引く。胴体に当たったその麻酔針の衝撃で、敵兵が首をかしげる。だが痛みなどがほとんどないため、すぐに疑問は打ち消された。その時間は麻酔が体に回りきるのに十分だったようだ。呻きを漏らして、地面に体を横たえたのが分かる。ふう、と一息つきたい気分であるが、そうそう暇をとれる環境ではない。地図を見ると、どうやらここで二つに道が分かれるようだ。どちらからでも同じ場所に出ることが出来るようだ。なら、今いるここから近い方の道へ進むべき、と考えて、スネークは背にした大木と同じ方向への道を進む。

しばらくは罨などもなく、しかし再び鉄条網の壁がスネークの行く手を阻む。今度は地面も削れていないし登れそうな木もない。抜け道として使えそうなのは……中央より左寄りにある鉄条網の一枚その真ん中に開いた一つの穴。人ひとりくらいなら潜り抜けられそうな大きさだが、いかんせん地上についていない。

(ローリングで……行けるか?)

普段、小さなブロック状のものや、崩れかかった壁など、飛び込み前転の要領で行うローリングを使って飛び越えることがある。それに似たような高さのここなら、潜り抜けることもできるかもしれない。一か八か、多少賭けではあるが、ここを引き返すのも時間が惜しい。多少の助走をつけ、地を蹴る。

くぐる時にひやりとしたが、その感覚が残っているということは、潜り抜けるのに成功したらしい。地面に両手をつき、そこを起点に前転に移行して着地する。そのまま勢いを殺さず走り続け、朽ちた倒木にしゃがんで背をつけ、身を隠す。そのまま背中と倒木越しに辺りを探り始める。敵兵が鉄条網の途切れている部分に一人、鉄条網の奥に一人。その一人は丁度この地がすり鉢のようになっている

高低差のうち、一番高いところにいるために視界は広そうである。

とりあえず、先に解決すべきは手前側の兵だ。ここからでも銃で狙えることには狙えるが、流石に遠い。右に視界をやれば、今より敵兵に近いところに木がある。そこに素早く隠れたスネークは、その木から半身出して様子を伺う。敵が視界をこちらから左に逸らした時、スネークが木から体を反転させながら出し、素早くMk22ハツシュパピーのトリガーを引く。頭部に見事命中させ、その敵兵は一気に意識を失う。

「何だ？」

その異変に奥の敵兵も気付いたようだが、その異変に気付いて立ち止り、振り返ったその数瞬。しかしその数瞬はスネークにとって大きなチャンスになる。素早く銃口を僅かに動かし、トリガーを引く。同じく見事頭部に命中したその兵士は、即座に地面に体を預けることとなった。

そのまま辺りを見回し、念のため以前ラスヴィエツトで入手した赤外線サーマルゴーグルを装着して見てみる。どうやら敵兵はいないようだ。温度が低いほど青に、高いほど赤や白に近づくこのゴーグルを見る限り、人ほどの体温を持つような反応はない。それを確認して立ち上がり、念のため警戒は解かずに奥へと進む。再び二股へと別れるようだが、壁の方向を見て、そこから右へと延びる道へ進む。

先程の道は、敵兵もトラップもない。進めば、目的地への経路地、大いなる口腔ホルシャヤ・バスト中継基地に到着したらしい。そして、スネークの目にある物が止まる。

（Mi-8……？ いや、違う……新型か……？）

近くの草むらに身を隠しながら、その視界に入った迷彩柄のヘリを観察する。ソ連の新設計のヘリのように、その周囲にも一人敵兵がいるようだ。それと、その手前にある機銃にも一人、そしてフェ

ンスのように張られている鉄条網を沿うように巡回している兵士が一人。ただ、その兵士はこちらに気付くような距離でもない。

（機銃は厄介だな……）

銃口がこちらに向けられるその機銃、DSHK38を見て、スネークはその危険性から、一番近く、おそらく配置的に敵が現れた際にその機銃を使うことになっているだろう兵士を眠らせる。胴体を襲った二つの麻酔針は、あつという間にその敵兵の意識を奪い去る。ばたりと仰向けに倒れたその敵兵に気付きそうな兵士もない。しかし、遮蔽物になるようなものがないこの敵基地内で眠った敵兵を隠すのは困難である。とりあえずスネークはその敵兵を放っておき、その敵兵と同じ位置から施設の周りを徘徊する敵兵に麻酔針を撃ちこみ、昏倒させる。

その敵兵が昏倒しているのを確認したスネークは、その敵兵が徘徊していた辺りを巡らされている外壁に背をつける。丁度建物的一面を覆うようにあるその外壁は、張り付いてしゃがみながら移動すれば中から完全に死角になる。もっとも、その死角ゆえの敵兵配置だろうが、その敵兵はいない。慎重に外壁に沿うように移動し、問題なくその施設がある地域の出口、つまりところEVAのいう「北にあるクレバス」へとたどり着いた。

一路、クレバスへ（後書き）

ヒル：環形動物門ヒル綱に属する。原・本作で登場するのは吸血性を持つ白色のヒル。付着すると噛みつかれて吸血され、スタミナが減っていった。ちなみに、無理やりはがすと歯が残るとというのは迷信。ただし傷口が広がったりはするので無理にはがしてはいけない。火以外にも塩水や醤油などでも落ちるとか。また、ヒルは血液凝固を抑える効果のある唾液を持つので、処置を怠ると大変なことになる。

クレイモア：指向性対人地雷。中に入っている400個ほどの鉄球をC-4爆薬でばらまく。原・本作では時代の関係上C-4爆薬は存在しないため、TNT爆薬を使用している時代のクレイモアを使用している。また、アメリカのような信管とは異なり、センサーで人体を感知、その感知が信管の作動条件という方式に変更されている。ソ連がアメリカから鹵獲したものを改良している。

Mi-8ヒップ：1961年にMi-4を改良した原型が初飛行した。単純で頑丈な構造と汎用性の高さが特徴。また、数多のバリエーションが存在する。原・本作では名前だけの搭乗になる。

DSHK38：重機関銃。愛称はDushkaで、アメリカはDush-K（ダッシュ・K）と呼んだ。ソ連製の対空用兵器。しばしば歩兵隊にも使用された。ヴァシリ・デグチャレフとゲオルギ・シユパーギンが設計を行った。1930年に完成したが、相談数の少なさが問題となり、改良型が1939年に採用になった。普通の

ロシア・ソ連製の機関銃と異なり、ベルト給弾は左から行われる。
原・本作ではなぜか弾数が だった。

山猫は獲物を逃さない

ポルシヤヤ・バストの北部にある大きなクレバス。この地の名の由来ともなったそこに、スネークがたどりついた。岩が多くあるそこを、クレバス手前までしばらく歩いていたら、クレバスの向こうの岩陰から、靴音が聞こえた。間もなくその岩からブーツと黒い軍服が見える。

「やはり来たな」

その正体は、オセロット少佐だった。トレードマークの一つである赤いベレー帽。どこことなくマカロニ・ウエスタンを想像させるこの地に、彼はよく似合っている。いや、彼が似合うような恰好をしている、というべきだろう。

「ザ・ボスの情報は確かだ」

歩くのを止め、クレバスの裂け目の中ほどを挟むように対峙した二人。オセロットは黒いシングル・アクション・アーミーを一丁スネークに向け、対するスネークはいつでも攻撃に移れるよう腰を落とし、左胸のナイフと腰のホルスターの銃を握る。

その一秒程度の睨み合い。オセロットが銃口をスネークから外し、人差し指をトリガーにかけたまま手前側に回す。それもそこそこにキヤッチしてホルスターにしまう。

「お前は俺の顔に二度も泥を塗った」

以前、最初にラスヴェイエットで出会った時のように、『鳴き声』を上げる。すると、以前の黒い軍服の山猫部隊員がスネークの背後を囲い、銃口を一齐に向ける。その一列の向こうに、GRUの迷彩服の数名が、バックアップを行うように彼らの背後に銃を構える。

「コブラ部隊には悪いが、お前はこれオセロットがもらっ」

右手と左手を銃のようにする例のポーズを向ける。

「お前たちは下がっている」

隊長のその命令に、山猫部隊の彼らは銃口をスネークから外し、

構えを解除して膝立ちをやめて立ち上がる。

「二人つきりだ。邪魔するものはいない。オセロットは気高い生き物だ。本来、群れることはない」

そういつて、彼は二丁のシングル・アクション・アーミーを顔の隣に掲げる。どちらかとも黒い、どちらかといえば地味なモデルだ。その両の二丁を回転させ始める。時折スネークに銃口を向けるなど、ガンアクションを続ける。長いガンアクションだが、スネークはそれを撃つほど無粋ではない。

「12発だ」

ガンアクションを止め、スネークに二丁とも銃口を向ける。

「……いいか、今回は12発だ」

ガンアクションを行いつつホルスターに収める。どうやら、先程の宣言は自分への宣言であるようだ。

オセロットが足の幅を微妙に広げ、手に握りはしない程度の力を籠める。

互いの視線が交差し、乾いた風が二人の間に吹く。

「さあ、来いっ！」

二人の、いや、蛇達と山猫の戦いの火蓋は、たった今この荒野にて切られた。

互いに岩の裏に隠れる。スネークはホルスターからM1911A1を取り出す。岩に張り付いた姿勢から反転させ、サブレッサーを既に取り外してあるその銃口をオセロットが隠れた岩に向ける。オセロットもほぼ同じタイミングで体を出し、一丁のシングル・アク

シヨン・アーミーの銃口を向けてくる。互いにトリガーを一度引くと同時に岩に再び身を隠す。弾丸が互いが身を隠す岩の表面で爆ぜ、跳ねる。

再びしんと静まり返り、二人の耳には風の音だけが入る。スネークは岩を背にしたまま視線を動かさず、左を向いた時に映った木が隠れるほどの大きさと悟る。今手にしているM1911A1の装弾数は7発、マガジンが残っている内にリロードを一度行っているため8発。一発発砲したため残りは7発。向こうは11発。

膝立ちのまま背を離し、一気に木に向かって駆ける。その時に銃口はクレバスの向こうを向いており、同時に向こうもこちらの視界の左から右へと走る。向こうは3発、こちらは1発を発砲するが、どの弾丸も地面や木、岩に当たって爆ぜるか跳ぶ。後数歩というところを両者ともローリングで埋める。再び遮蔽物に身を潜め、相手の方を伺う。タンブルウイードがかさかさと言を立てながら風に転がされ、互いの視線を横切る。それを合図に、再び先程隠れていた場所へと走り出す二人。今度はすべての弾をばらまく勢いで乱射する。

「不思議だ、この緊張感！」

オセロットが向こうの大きな木の裏でリロードを始める。シングル・アクション・アーミー特有のそれは、時間がかかるリロード方法だ。

「マグチェンジでは到底味わえない」

1丁目のリロードを終え、左腕でリボルバーを走らせてホルスターにしまう。2丁目を取り出し、そのリロードに取り掛かるそのスキに、スネークもM1911A1のマガジンロックを解除し、空マガジンをしまう。新しいマガジンを取り出し、滑らせるように装填する。

「リロードタイムが、こんなにも息吹を！」

やがてリボルバーを回転させる6つのトリガーを引いた音が聞こえ、再びリボルバーを腕を走らせて回転させて、再びホルスターに

しまつ。

そして、二人が遮蔽物を再び背にし、緊張が走る。砂が擦れる音が嫌に大きく聞こえ、その二人の足は筋肉が収縮している。無駄な力はお互い籠つていない。そして、二人の靴底が砂を舞い上げ、二人の銃口は互いに向き合った

その二人の周りを、黄と黒の虫が飛び交う。どうやらハチだ。

「くそつ、見つかったか！」

疑問を隠さないスネークの表情と、その事情を知っているようなオセロット。スネークが後ろに視線を移したとき、その方向にはおびたらしい数のハチが山猫部隊やGRUを襲う。無論それはスネークとオセロットも例外ではない。強風にあおられたように片膝をついてナイフで何とか凌ぐスネーク。対してオセロットは、そのシングル・アクション・アーミー2丁をガンアクションで高速回転させ、それにハチを巻き込んで落としていく。

後ろの兵士たちが悲鳴を上げる。倒れて目出し帽が取れた一人の兵士。その顔はハチに幾度も刺されて原型を止めないほどに腫れて、見るからに痛々しい。逃げ出す兵士たち。しかし、そのうち数名がハチに刺されたショック症状などで倒れていく。阿鼻叫喚、地獄絵図という言葉が相応しい状況になっている。オセロットもそのハチの数を捌ききるには難儀しているようで、先程リロードの際に隠れた大木を背にする。

「邪魔が入った！ また会おう！」

右手で銃のポーズを作り、軽くそれを振り、走り去っていくオセ

ロット。スネークは何とかナイフで接近を妨げていた状況を打破すべく、必死で転がりつつも立ち上がる。そのままクレバスへと走り、そのクレバスへと飛び込んだ。スネークの悲鳴のような叫びが木霊し、ハチはその場に取り残されていた。

山猫は獲物を逃さない（後書き）

マカロニ・ウエスタン：1960 1970年代に作られたイタリア製西部劇。もとはスパゲッティ・ウエスタンと呼ばれ、「荒野の用心棒」が日本に入ってきた際、スパゲッティでは貧弱そうだ、ということ（と中身がない、という暗喩があるともされる）である。映画評論家がマカロニ、とした。よってこれは海外では通じない。例外で韓国では通じる。アメリカ製西部劇などとは根本的に別物の雰囲気作品が多い。オセロットはこのマカロニ・ウエスタンを好んでいるようだ。

タンブルウイード：西部劇などでよく見かける転がっていく枯草の塊のようなもの。オカヒジキ属に属し、転がっていく際に種子をまき散らす。直訳は「回転草」で、株もボール状に成長する。

八手に刺されたショック症状：八手に刺された際、毒よりもこちらの方が死因的に多数を占める。アナフィラキシーショックなどと呼ばれるが、専門的な知識（医学に精通していないとわかりにくい）であるため、ここでは省略する。アナフィラキシー（英：anaphylaxis）とはヒトや他の哺乳類で認められる急性の全身性かつ重度なI型過敏症のアレルギー反応の一つ。僅かなアレルギーで生死にかかわる場合もある。

宵闇が如き

スネークが何とか無事に地面に足をつけると、そこは真つ暗な洞窟の中だった。明かりひとつない、まるで街頭も全くない街の夜のように暗い洞窟では、自分の体すら視認が難しい。

ライトを装備に加えておくんだった、と思うスネークだが、生憎と今は後悔にしなければならない。ついでに言えば、「FOX」は原則的に武器、装備は現地調達。ライトなど持ってこられるはずはない。しかたなく、何か代わりになるものはないかと思案するスネーク。無論、この暗さに目が慣れても、そこまで期待できるものではないだろうから、その案は補助的な案としてだけ考える。

「……ハンドガンにスタングレネード、ダンボールにサーマルゴーグル……あとは食糧が少しと葉巻か」

バックパックの中身を確認し、少しだけ肩を落とす。ハンドガン類、つまりMk22やM1911A1を使えばマズルフラッシュで明かりは何とかなるかもしれないが、そんなに乱射すれば弾丸はもたないし、貴重な戦力を無くすこととなる。それは避けたい。そもそも敵兵がいなくとも限らない。サーマルゴーグルは、熱源を探知するものなので却下。スタングレネードは光が強すぎるし、数もそうそうない。

「……葉巻、か……」

葉巻は、火をつければ煙草と違ってゆっくりと燃える。ならば、明かりにも使えるはずだ。マッチを擦り、口に咥えた葉巻に火をつける。橙の暖かな光が僅かに灯り、自分の体の輪郭程度ならわかるようになった。それに、壁に近づけば壁があることもすぐにわかる。スネークは、右の方向にあった壁に手をつき、そのままそりそりと進んでいく。行き止まりには、グレネードやM1911A1の弾薬がいくつか落ちている。近くに白骨死体があるから、彼らの遺品なのだろうか。すまないと思いつつも頂戴し、同じく右手で壁を

伝いながら歩いて行く。

すると、スネークの右手、それと体に水が大量に落ちる感覚がする。

「滝……？」

音を立てながら豪快に落ちるのは、二つの滝だった。二つの滝は、扉のように正面がぼっかりと空いている形で存在している。中には空洞があるようだ。同じく右手を壁に着けながら進んでいくと、Wグレネードが落ちている。それを拾ったスネークが進もうとしたとき、さらに足に何かが当たる。骨ではなさそうだ。

「……………松明か。またこの遺体の遺物か？」

やはりというか、近くには白骨死体。ただ、それでも有り難いことに変わりはない。松脂まつやにを使った松明は、非常に長く火を灯す。火の大きさも葉巻は比べ物にならない。松明に火をつけると、一層明るく暖かい橙色の光が辺りを照らす。そのまま窪みから出て、松明の明かりを頼りに周囲を見渡すと、どうやら滝の上は棚のようになっており、水源がどこかは分からないが、とにかく通路にはなっているようだ。一つ、人が立っても入れるような入り口が見える。おそらくは、あそこが目的の出口になるのだろう。この壁を登れないかとも思ったが、水で浸食されているのか掴めるような凹凸は見当たらない。仕方なく、迂回路を探し始めた。

一度、先程落ちたらしい小部屋まで戻ってきた。同じ距離を同じ壁を伝ってきたのだから、おそらく間違いない。ここから搜索を始めよう、とスネークが考えたのは、この部屋は目印になる物があるからだ。中央あたりに、崩れ落ちてきたのか分からないが、一枚長方形の岩がある。ここを基点にすれば、一週したりしたとしてもわかるだろう。スネークは松明をつけてもなお薄暗いため、どちらかといえれば下方向を注意しながら進み始めた。

次の小部屋にさしかかる。とはいえ、ちょうど壁一枚を挟む形のこの小部屋は、次の、と言っているのか分からない。ともかく小部屋を一週するように調べてみると、一つの小穴が見つかる。ホフクなら入っていけそうだ。松明を持ってても問題ないだろう。だが、ガスなどが漏れていると心配なので、なるべくゆっくりと、そして鼻に入ってくる匂いに注意しながら奥へと進んでいく。

しばらくすると、前方から水音が聞こえてくる。それも落下していく水の音。滝だ、と分かるのにそうそう時間はかからなかった。なおも少しホフクで這いずると、やはり先程見上げていた小規模な二つの滝の上にスネークは出てきた。内心、この暗い洞窟ではもつと迷うかと思つたため、スネークはほつと一息つきたいような気持だった。無論、そんな暇もないのだが。

靴底を走っていく水音を聞くのも、僅か数歩だった。先程の入り口へたどり着いた時には、既に岩の上に立っていた。なおも進み、支洞から主洞とよばれるエリアに進入する。

支洞よりも道が若干広く、また薄暗さも若干……いや、かなり微妙ではあるがマシになる。それでも、松明は手放せない。やはりいくつか転がっている白骨死体のそばには、弾薬やグレネード類が落ちている。有り難く頂戴し、しばらく進むと、何度か道がうねった後、不意に明るさが増した。見ると、どうやら先は湖のようになつており、なおかつ上部は崩れ落ちたように天井部分に大穴があいていて、そこから太陽光が降り注いでいた。

その湖に近づき、立ち止るスネーク。危険な動物、トラップはな

いか、そもそも湖は泳いでも大丈夫かを軽く確かめているようだ。そのスネークの思考は、僅か数秒で断たれる。羽音が一気に近づいたことで、スネークが顔を上げると、そこにはその発生源、八チが何匹も飛んでいる。見上げれば、そこにはまるで球を成すようなおびただしい数の八チ。それが一斉に襲い掛かってきたのだから、たまったものではない。スネークは目の前にある湖に飛び込み、八チの軍隊を何とかかわす。水面に向かい水をかき、浮上する。

「ようやく捉えたぞ」

先程スネークを襲った八チ達が、湖の中央付近にある大きな一枚岩の上に集結し、その周囲から声がある。八チが柱のように集まり、その中央から声が聞こえてくるようだ。

「我らは、ザ・ボスの息子たち……」

八チの柱を吹き飛ばすように現れたのは、覆面を被った、黄色が基調の迷彩を身にまとった男。ベストのようなその迷彩以外は、黒い厚手らしい衣服を纏っているため、全体的に黒と黄をメインにしている。

「俺はザ・ペイン。おまえにこの世で最高の痛みをやるぞ」

中国拳法のような形をしつつ名乗るザ・ペイン。小さな岩の上でスネークが左胸に刺してあるナイフを抜く。

宙返りで後ろに一步下がり、目の前で掌を合わせるような仕草をするザ・ペインの腕辺りに、小さな球のように集まる八チ達。先程より高密度で、もはや八チのボールのようだ。その腕を広げ、両腕に一つずつその八チのボールを纏わせる。

「いくぞっ！」

「行けっ！」

叫ぶと同時に、三本ほどの試験管のようなものを投げつけてくるザ・ペイン。何かあるかも分からないので、後ろに飛び退くようにかわすスネーク。無論、水中へ飛沫を立てて落ちる。カシャン、と

小気味のいい音と共に試験管らしきものが割れ、水中から顔を出したスネークの目に、先程まで乗っていた岩の上で黄色い煙が小さく立ち込めるのが映る。その場所に十匹ほどの八チが群がり、興奮状態にあるようだと分かる。おそらく、八チを興奮させるか誘うような成分が含まれたものを投げつけたのだろう。そのまま水中からM1911A1を構え、発射するが、それが分かっていたのか、くると回る様に体を横に移動させたザ・ペインはその銃弾をかわして見せる。

「トミーガン！」

八チのボールを右手にまとったかと思うと、その八チが霧散するようにどこかへ飛んでいき、ペインの右手には宣言通りトミーガンが握られている。顔を水面から出して岩陰に隠れたとほぼ同時に、連続して岩が爆ぜる音が聞こえてくる。破片などで思わぬ怪我をしてしまわないことを心の中で祈りつつ、その連射が収まるまで待っている。すると、トミーガンのマガジンを落とす音が耳に入り、続いてマガジンを装着する音が聞こえた。マガジンを変えたことを悟り、まだ出ないほうが良いと判断したスネークは、そのままじつと岩陰に隠れる。

再び掃射が止み、スネークは耳を澄ませる。マガジンの交換音は聞こえず、代わりにトミーガンを投げ捨てたらしい音が聞こえたため、スネークはさつと体を反転させて岩に乗る。そのままM1911A1の銃口を向け、トリガーを引こうとしたその瞬間。

「来い！ お前たち！」

ザ・ペインの合図で、辺りを飛んでいた八チが一斉にザ・ペインに覆うように集まる。そのままスネークが銃口を引き、100分の45インチもある弾丸を撃ちこむ。

「無駄だ！」

しかし、その強大なストップピングパワーが売りの45口径弾ですら、その八チが鎧となって効果がないようだ。ならば、とスネーク

は腰から小さな円筒状の物体を取り出し、ピンを素早く抜いてザ・ペインの乗る大きな一枚岩に向かい放り投げる。放物線を描いて、1、2回跳ねたそれは、白い光の奔流と爆音の奔流を生み出す。スタングレネードを投げたのだ。

「ちいつ!？」

ザ・ペインが纏っていた八手は吹き飛び、その光と音から身を守るべくザ・ペインは顔を腕で覆っている。スネークはその隙に顔を覆っていた腕を素早く下げ、もう一つスタングレネードを投げつけたが。

そのスタングレネードは周囲に散っていた八手が囲み、何とそのままこちらに持ってきている。咄嗟に水の中へ避難したスネークは、一瞬前までいた岩の上で強烈な光と音が発せられたことを感じとる。

岩に上りなおすと、ザ・ペインは再び中国拳法の形のような動きを取る。その動きのまま覆面を取ると、彼の八手に刺され、膨れ上がった顔が姿を現した。膝をつき、そのまますぐ立ち上がる。短く雄叫びのような声を上げ、口を開く。すると、今までより一際大きな八手がその口の中から飛んでいく。もう二匹が同じように吐き出され、周囲を耳障りな音と共に飛んでいる。高笑いを上げ、八手を再び身にまとったザ・ペイン。どうやら、彼は隠し玉を使っただけらしい。

「行けえ! バレットビー!」

彼の号令と共に、唸るような羽音を立てながら、三匹のバレットビーが襲い掛かってくる。再び水中に身を潜め、しばらく間をおいて浮上すると、どうやら三匹もあきらめたらしい。

「逃げているだけか!？」

八手を身にまとったのを解除し、挑発するように言う。若干警戒

を強めつつも、そのザ・ペインの胸部めがけ、水面からM1911 A1のトリガーを引いた。

がくり、と膝をつき、さらに右手をも使って体を支えるザ・ペイン。そして、ゆっくりと立ち上がり、己の両手を見つめるようにつぶやく。

「この感覚！……この痛みペイン！！ この痛みペインだ！！！！」

叫び終わると同時にそのまま後ろに倒れ、その身体が地面に着き

「ペイン！！！！」

爆発と共に、絶叫が洞窟内に轟いた。爆発に巻き込まれた八チがいくつも水面に落ちるのを気にも留めず、スネークはその湖のもう一つの出入り口へ向かうべく、水をかきだした。

宵闇が如き（後書き）

WPグレネード：白燐を用いた燃烧手りゆう弾。Wはホワイトの頭文字、Pはリンを表す元素記号である。黄燐、白燐と呼ばれる種のリンは空气中で自然発火する性質があり、それを利用して発火させるのがWPグレネード。火炎瓶と異なり、皮膚についた際は水につけたままナイフなどで白燐をそぎ落とすか、部位ごと切断しないと、再び発火し始めてしまう。また、その白燐が燃烧した際に空气中の水蒸気と反応して、視認性を著しく下げる白煙を発する（ゲーム中は不可）ことから、煙幕を張ることに使われる。WPの文字から、アメリカではときたまウィリー・ピートの愛称で呼ばれる。ゲーム中のように激しく燃烧を起こす、というのは実際数秒程度の短時間であるため、現実では専ら発煙用のみ使われる。現代では赤燐を使ったものがメイン（煙で赤外線は防げないため、赤燐を使えば防げるというらしい）。

トミーガン：M1928。アメリカ正式採用短機関銃。トンプソン・サブマシンガン。別名ではトミーガンのほかに、トムソン銃、シカゴ・タイプライターなどがある。頑丈な構造で、耐久性と信頼性に優れる、1919年以来なお生産が続けられる長命な銃。5Kgほどの重量があり、フルオートでも制御しやすい。もともとは膠着状態にあった塹壕戦用の個人携行短機関銃の目的であり、後に世界中に広まった。

雷電、蜘蛛、終焉、山猫、兵士、そして蛇

ザ・ペインを討った後に、出口を目指しているスネーク。ザ・ペインと戦った場所から出口に近づいていく道は、どうやら一部天井もないらしく、光に困ることは無かった。

EVAの話を知るとすれば、この洞窟を抜けた先が北の方角で……北の方角で……スネークの思考はそこで大きく停滞する。どうやら、あの時グリッブを削るのに夢中になりすぎて、EVAの話は聞き流し状態だったらしい。しかし、ここから特に分かれ道は見えない。分かれ道があれば、少佐やEVAに連絡すれば何とかなるだろう。再びスネークは歩き始める。

洞口と称されるそこを歩いている時、今まではだいぶ細かった道が、曲がり角に入って少し開ける。まるで、一旦川の流れが止まる小規模な池のように。

ふと、スネークの耳に、ヘリのローター音を高くしたような、独特のサイクルを持つ音が入ってくる。咄嗟にその音が聞こえてきた方向の壁に身を隠す。スネークに気付くことさえせず、突っ切る様に飛んでいくのは二台のそれ。ちょうど一人用の、大きな機械、たとえばフィクションで出てくるようなロボットを整備したり、あるいは高層ビルなどの窓を拭くときに使うような、ゴンドラのように。その下部に見えた青白い光で、おそらくあそこから出ているその青白い炎と共に発生した推進力で浮遊している、と予想できる。確か、アメリカにそんな規格があった、とスネークは考える。確か、フライングプラットフォーム、とか言ったはずだ。無論、先程のように整備や清掃が目的ではないはずだから、あれは偵察用で、操縦者もGRU辺りの兵士だろう。となると、武装しているはずだ。どこを警戒しているかまでは分からないが、おそらくこの先にも待ち構

えている。気をつけねば痛い目に合うと確信し、そこで思考を終わりに再び歩き出す。

もう一か所ほど、ここと同じように少し開けている以外は、特に変わらず峡谷のような一本道だった。二か所目のその開けた場所では、数匹の蛇がいたが、スネークにはまだ食糧に余裕もある。そういえば、いまだ食事はとっていないな、などと考えつつも、スネークは歩き続けた。

しばらくすると、どうやらもう出口らしい。今立っていると、から、明らかに外へつながる入り口が見えている。落差が大きい。道は続いているらしい。何度もうねるその道をスネークは降りていく。スイッチバックするようにいくらか折り返すところがあった。その道を、崖に落ちぬよう慎重に下りていくと、そうそう時間もかからず降りることが出来た。既に日が傾いているのか、橙色に輝いているようにも見えるそこから出れば、腰ほどまで水のある川になっている。その両岸にはマングローブが群生しており、手をつくところも見当たらない。

川下の地ボニゾヴィエと呼ばれる地域の南部であるそこは、スネークにとっては良い環境だ、とは言えなかった。というのも

(……厄介だな)

先程頭上を飛び越えていった二つの乗り物。それが、スネークの視界には収まっている。どうやら先程の二人組は、この警備をすゝるために来ていたらしい。幸いなことに、背面以外にも流石に頭や上半身の一部は鉄板の盾には隠れていない。腰から Mk22 を取り出したスネークは、いったん水中にもぐり、ある程度彼らに近づくと水中で視界がぼやけ、狙いがつけにくい。水深はまだ浅いのでどうにかなる。胴体に麻酔針をそれぞれ一つずつ打ちこみ、スネークは引き返す。丁度先程の洞窟の部分は少し広いため、川の壁は彼らに対する遮蔽物となる。そこでしばらく身を隠すと、そのうち二つの爆発音が聞こえた。だが、どうやら他の警備地区には届かなかっ

たのか、増援が来そうな様子はない。腰ほどまである水をかき分けて進むより潜る方が速いと知っているスネークは、再び身をその川に沈め、水をかき始めた。

脇道が一本存在した以外は、ここも一本道のようだ。脇道は無視し、確か北へすすめと言っていたかと思いだして泳ぎで距離を稼ぐ。すると、そろそろ泳ぐにはつらい水深になってきたため、スネークは歩きに変え、そのまま歩みを進めていく。

すると、どうも倉庫の外に来たらしい。ああ、そういえばEVAも倉庫がどうか言っていた、と思い出すには遅すぎることを思い出す。遠いその倉庫外部の場所で、兵士が何やら黒いコートらしい物を羽織った男とがいるのが見え、しゃがんで双眼鏡を手に取る。スネークの視界に入ったのは、目的の一つ、ソコロフと、一人の兵士。そして、双眼鏡を左にずらせば、ヴォルギン大佐と、金髪に眼鏡、カーキの服を着た女性が歩いてきた。どうも倉庫の内部を通ってきたらしい。

「離せ！」

開いている、赤い大きな倉庫内部へとつながっているらしい扉の方へと兵士に押されたソコロフが抵抗する。

「私はいかんぞ！」

語気を強く言ったソコロフだが、左の方から聞こえた足音に、その方向へ首を向ける。

「全く、何度言えばわかる？」

金髪に眼鏡の女性の左肩へ右手を置いたヴォルギン。すると、青

白い稲光がその女性を痛めつける。

「ターニャ！」

力なく階段を転がり落ちた女性の名前らしい。明らかにソコロフが動揺した声を上げる。しかし、彼女の元へ行こうとしたソコロフを、先程の兵士が腕一本で止める。

「お前が抵抗するたびに、この愛人が痛い目にあうんだぞ？」

「ヴォルギン……！！！」

ふん、とせせら笑うかのように言ったヴォルギンに怒りを隠さないソコロフが食ってかかろうとしたのか足を前へと出す。しかし、それすらも先程の兵士に腕一本で制される。突き飛ばされ、体勢を整える前にAK-47を向けられる。

「くそ！」

悔しさを滲み出すように言うソコロフに見せつけるかのように、ターニャの首をつかむ。子猫を掴むように、いとも容易く足が地面に完全につかないほどに持ち上げられた。左胸のふくらみに、同じく青い稲光を纏わせた右手を近づける。見せつけるように近づけられたその手に、明らかに恐怖によって呼吸が荒くなるターニャ。ついに体に触れられ、体を電撃が走る。悲鳴を上げた彼女のストッキングが、電撃によって所々穴が開き始めていく。もはやストッキングとしての役目を果たさなくなったころ、やっと右手は体を離れる。

ヴォルギンがソコロフの方に向き直り、見せつけるようにターニャを放す。崩れ落ち、もはや立っていることもかなわないらしい。唾然としたように、落ちた眼鏡を拾ってかけなおしたターニャを見ていたソコロフを、兵士がAK-47を突き付けつつ連行しようとする。

「待て」

コツリ、コツリと靴音を響かせて、制止する声をかける。

「売国奴」

その正体はオセロット。それを確認した兵士が、ソコロフを押し、バランスを崩さないために本能的に前へと数歩駆ける形になったソコロフに、一つの小さな黒い穴が向けられる。シングル・アクション・アーミーの銃口だった。無理矢理に慣性を殺し、踏みとどまるソコロフ。じりじりと後ずさるようなソコロフ。すると、オセロットはいつも通りガンアクションをまじえて、とはいえ回転させるだけで、横からその銃を見せつけるように顔の横に持ってくる。そして、左手に取り出したのは一発の弾丸。

「お前の運を試してやろう」

その一発の銃弾を、上げていたシングル・アクション・アーミーに装填する。

「よく見ておけっ！」

左手でリボルバーを回し、ガンアクションをまじえて止める。右手だけアサルトライフルを移動中に持つように、若干銃身が下を向くように横向きに構える。右手で一つ、左手でもう一つさらにシングル・アクション・アーミーが取り出される。

「この3つの銃のどれかに、1発だけ実弾が入っている。続けて6回トリガーを引く。いいか？」

まるで、命が賭かっていることを感じさせない、ゲームをするような口調で説明する。右手に持っていた一丁が、高く放られる。それを開始の合図に、器用に三丁のシングル・アクション・アーミーをジャグリングしていくオセロット。ソコロフは慌て、腰が引ける。時折銃口が向けられ、ついにソコロフは腰が抜けて座り込む。来るな、という意思からか、少しでも抵抗するために手を上げるソコロフ。その腕を下ろしたかと思えば、彼の股間は明らかに濡れ、僅かな湯気が立っている。

「まだ運があるようだ……」

ひときわ高くシングル・アクション・アーミーを投げたオセロット

ト。しかし、そのシングル・アクション・アーミーは突如姿を現した、黒い外套を羽織った人物にとらる。即座にその人物が左側、つまり水面に向けてトリガーを引く。乾いた音と、ほぼ同時に水面に小さな水柱が立ち、無論その水柱も音を立てる。

「戦場で運をあてにするな」

咎めるように言ったその人物は、伝説の兵士ザ・ボスだった。オセロットがしよげ、逆にヴォルギンは今の「茶番劇」を見て高笑いを上げる。兵士の方を見やり顎をしゃくる。その意味を了解した兵士が一つ頷き、座り込んでしまっているソコロフを連行していく。

「勝手な真似はするな」

オセロットはシングル・アクション・アーミーを返してもらおうと思ったのか、手を伸ばしかける。すると、ザ・ボスはそれをオセロットから放すように掲げる。

「奴は我々コブラ部隊が処理する」

そこまで言うと、オセロットに押し付けるようシングル・アクション・アーミーを返す。見れば、リボルバーの部分だけが外されている。そのことを訴えようとしたのか、顔を上げるオセロット。だが、ザ・ボスの怒気か何かを感じたのか、不貞腐れたように赤い大きな扉をくぐっていった。

「CIAの犬は片付いたのか？」

「……ザ・ペインがやられた」

「なんだと！」

ヴォルギンは怒りの形相を作り、思い切り右拳を壁に叩きつける。青白い雷光を纏った拳で壁を次いで二度殴る。左、右、と下半身までつかって繰り出されたその動きは、壁に大きくヒビを作る。明らかに、素人の動きではない。

「ガキとはいえ、やはりザ・ボスの弟子だな」

腕を引き抜き、右手で作っていた方の拳を開放する。軽い金属音を立てて、四つのライフル薬莖が落ちた。

「フルシチヨフが裏で手を引いているかもしれん。早いほうがいい、

最終試験の前に消してくれ」

「大丈夫だ」

目、どこるか顔すら別方向を向いたまま、ザ・ボスが応える。

「彼らに任せる」

そういったのを見計らったように、車いすがやってきた。乗っているのは、ギリースーツを纏った老齢の男。意識を持っているようには見えないが、誰かが車椅子を押ししているようにも見えない。

「ザ・ファイアー、任せたわ」

ザ・ボスが呼びかけたのに答えるように、一人の男が突如車いすの後ろに姿を現した。まるでライトをつけたように急に表れた彼は、以前ドリノヴオドノの吊り橋でソコロフを抱えていった男だった。蜘蛛の巣のような模様の迷彩に身を包み、黒い頭髪は一部メツシユを入れたように白くなっている。礼をするように右腕を軽く腰辺りまで上げ、声を上げて上に跳ぶ。そのまま、奇声を上げつつ、あるうことか水の上を走り、跳んでどこかへと行ってしまふ。

「このじいさん、ずっと寝てるが大丈夫か？」

「余命のエネルギーは戦場のみに使う。ジ・エンドは普段、死んでいる。時が来れば目覚める」

一筋、空に稲光が走る。その音に気付き、二人は後ろを見やる。

「そして、奴は……ジ・エンドだ」

雨が降り始める。振り始めにもかかわらず、その勢いは強い。それをきっかけにしたのか、ヴォルギンはターニヤの元へ歩いて行く。「来い、ソコロフの愛人。雨が上がるまで私を楽しませろ」

見せつけるように、いまだ握っていた左拳を開放させ、右拳と同じく四つのライフル薬莖が落ちる。

「くわばら……くわばら……」

まだ痛むらしい左胸を抑え、呼吸も整わぬままにその後には歩くターニヤ。ザ・ボスはそれを見送り、軽く腕を広げて空を仰ぐ。

「ザ・ソロー？ いるの？」

スネークが覗いていた双眼鏡に、一瞬だけ黒い影が映ったように感じる。雨が上がると、ザ・ボスもその大きな赤い扉をくぐっていった。

川辺、建物、そして森（前書き）

今回は特別短いので、あらかじめご了承ください。

川辺、建物、そして森

ジ・エンドをのぞいて、その場で会話していた者たちが去り、スネークも行動を起こすべくさらに双眼鏡をのぞく。敵兵は、四人見える。コンテナの奥に一人。棧橋を警備しているのが一人。その曲がり角がいくつもある棧橋をコンクリの地面まで渡ったところを警備しているのが一人。そして、今ジ・エンドの車いすを押して、やはり赤い大きな戸をくぐろうとしているのが一人。

一番近い、棧橋を警備する敵兵ならここからでも狙撃できる。サイレンサーを装備したMk22を構え、その大きめのダットサイトで狙いをつける。リアサイトの真ん中にフロントサイトが並び、スネークの視界と銃身が一直線になったことを告げる。次いでそのフロントサイトを敵兵の頭部に合わせる。グツ、と右手の人差し指を握りこみ、その直後、ほぼ同時と言っていいタイミングでサブレッサーから僅かに音が漏れる。吐き出された超音速の麻酔針は敵兵の左こめかみに突き刺さり、容赦なく眠りの世界へと連れ去った。同じく、その棧橋の奥にいる敵兵へも銃口を向ける。こちらは頭部は無理なので、胴体に突き刺すよう銃身を移動させ、トリガーを握りこむ。

スネークが少し前進し、すると大陸棚が一気に亡くなったようにスネークの体は肩ほどまで水に浸かる。腕を広げ、脚で水を掻き、浮力を作って丁度足が地面から浮いているような体勢になるスネーク。そのまま、もう一人いる敵兵の動向に気を配りつつ、その身を棧橋に近づける。

十ほど水を掻くと、棧橋に手が届く。なるべく水音を立てないように棧橋に上ると、ちょうど残った一人はコンテナの資格へと歩いて行くところ。その隙に棧橋に寝ていた一人を水中へ突き落す。少しもがく音が聞こえたが、装備が重いのか上がってくることは無い。スネークと違い、装備が支給される彼らは、泳げるほど身軽ではな

いのだろう。もう一人、棧橋を歩いて行ってコンクリの建物へと足を踏み入れた時に足元にいた彼も同じく水中へと捨てる。そして、その位置から、こちらに背を向けている敵兵の頭部へ先程と同じく麻酔針を撃ちこめば、ここは完全にスネークの独壇場となった。特に搜索することもなく、スネークは己が目指す内部へと入るため、先程皆が入っていった赤い大きな扉へと向かう。

しかし、大きな扉の方は、鍵をかけられているのか、開く気配はない。仕方なく視界を巡らせれば、右の方には先程ヴォルギンとタニーヤが使った通路。そこを通つても、おそらくは中へと入れるはずだ。スネークはそう確信し、足音を忍ばせてその内部へと入っていった。

中へ入ってみれば、少しの一本道。今のうちにフェイスペイントを塗り替えるべく、道の端へしゃがみこむ。布で顔に施したペイントを落とし、新たに濃い灰色の塗料を取り出す。数本、指を走らせる。出来上がったのは、バーチャスミッションの時に塗っていたペイント、スプリッター。スネークは素早く立ち上がると、建物の内部へと侵入していく。

一つ角を左に曲がり、ドアをくぐる。三階建ての倉庫は、階段以外は天井は三階部分まで存在しない。つまり、屋根はとても高い。スネークが立っているのは二階部分。通路の手すりの一部を塞いでいる、腰ほどのコンクリの壁に身を隠す。そこから観察すれば、敵兵数はまたも三人。階段下に二人がいる。背中越しに、二人の位置を確認する。右に首を振れば一人、反対へ持つていけば一人がそれぞれ映る。それぞれに麻酔針を撃ちこめば、一階はもはや制圧したも同然。一階に降りて上を見れば、こちらに気付いた様子もなく巡回する兵士が一人。丁度地面から45度位を見上げて真ん中に来る

程度の三階にいるその兵士にもやはり麻酔針が飛ぶ。階段を進めば、あっけなくこの倉庫を通過することが出来てしまった。

その倉庫をぬけると、スネークは思わず目を細める。木々や葉で遮られたとはいえ、今まで薄暗い倉庫内にいたスネークには、日光が多少まぶしかった。そのまま辺りを見回すが、特に誰かがいるというわけではなさそう。しかし、油断するほどスネークはアマチュアではない。CIAがそんな人材を飼うわけがないし、何よりスネークはザ・ボスの弟子だった。

双眼鏡を取り出し、辺りを見回す。右、左、上。何も無い。続いてサーマルゴーグルを使う。すると、あるわあるわ反応の数々。それも、全部が全部ブービー^{間抜けの罠}トラップ。以前見た、大木のスパイク突きが突っ込んでくるものもあれば、矢や手榴弾が仕掛けられたもの、落とし穴、スネアトラップ……しかも、遠くにある、誰かがすでに引っかかった罠に、体温が異常に低い人体の影が見えた。改めて双眼鏡でのぞけば、それはもはや名前通りではなくなってしまうている白衣を着た男性。そう、彼の血で白衣が赤く染まっているのだ。先程確認した罠の位置に気を付け、その白衣の男の元へと向かうスネーク。

その男は、予想通り力尽きている。脱走でもしようかと企んだのか、あるいは兵士たちの鬱憤晴らしにでも使われてしまったのか、あるいはもつと別な理由なのか、それはスネークに知る由もないし、知る必要もないことだ。しかし、まさかこのすぐ近くにあるグラニーニ・ゴルキーの職員であろうこの男は、この森の罠を知らなかったというわけではあるまい。少なくとも脱走では別ルートを通ったか、あるいは罠の位置が変更されたか……と、ここまで考えてスネークは思考をきっぱりと停止する。

そのまま、この森から唯一出られそうな場所、そして目的地グー
ー・三三・ゴルキーへ続く道へと歩きを早めた。

レーニン勲章受章者と金属の齒車

グラーニニ・ゴルキー研究所の外壁にスネークは辿り着く。道が開ける場所にある草むらに身を隠し、辺りを伺う。目の前一带には例によって例の如く高圧電流のオマケつきの鉄条網。そしてその奥には、右と左に視界を動かせばそれぞれ一人が目に入る。どうやら右にいる敵兵は無線兵らしい。そして、黒い影、軍用犬も一匹。

スネークは、鉄条網の向こうにいる無線兵へMk22の銃口を向ける。胴体に向けて発射し、次いでM1911A1に持ち替え、軍用犬の頭部に命中させる。敵兵が何か異変を感じ取ったらしく、左右から近づいてくる。しかし、右から来ていた方は麻酔で道半ばで力尽き、左から寄ってきた方も頭部に麻酔針を撃ちこまれて昏倒する。

ゆっくりと鉄条網を見ていけば、左端の方に基盤を見つけた。辺りに敵兵がいないのを確認し、M1911A1で打ち抜く。バチバチ、と音を立てたかと思えば、すぐに黒煙を上げて機能を停止する。どうやら、この基盤で高圧電流の調整を行っていたらしい。そして、下にはやはり野生動物でも通つたらしい跡。礼によって例の如くそこを通り抜ければ、先程この地帯に入った時にとおってきた道の先に、大きな鉄色の門がある。そこを開けようと試みるが、どうも開きそうにない。仕方なく他のルートを探す。無線兵を倒した方に行ってみれば、角を曲がって少し行ったところに、裏口のような扉があるではないか。

しかし、同じく鍵がかかっている、開く気配はない。ほんの少しのいら立ちをこめて、扉を拳を作って肘を打ちつけるように軽く殴る。

「今開ける」

しかしなんと、今のがノックと取られたのか、中から兵士の声が聞こえてきた。慌ててさらに奥にあったコンテナに身を隠す。ほぼ

同時に、ガチャリと音を立てて鍵とドアの取っ手が操作され、中から一人兵士が出てきた。通路がそちらに広がるからか、スネークが最初にドアを開けに来た時の方向を見る兵士。

「誰もいない……」

「動くな」

チャンス、とばかりに近寄り、敵が左右に小さく視界を動かしたのを見計らい、M1911A1を突き付ける。兵士としてその意味を瞬時に理解した彼は両手を上げる。

「う、撃つな……！」

正面に回り込み、銃口を顔に向ける。そうすると、彼は命乞いはじめ、腰を揺すって何かの弾薬を落とした。命だけは、ということか。スネークはそのまま素早く首をひつつかみ、そのまま足を払って投げ倒す。頭部を強く打ち、スネークの想像通りあっけなく意識を失った。彼を近くの草むらに隠して、そのまま開け放されていた扉から内部へと侵入する。

中へ侵入すれば、丁度今くぐった壁は城壁のような部分に当たらしい。それなりの広さを持つ庭のような場所に出て、スネークはまずその中心にある大きな建物に目が行く。あれが研究所の本体だろう。赤レンガを主体に作られたその建物は、外見上は二階建てに見える。流石に真正面の扉は先程の門から考えても開いていないだろう。あるとすれば職員などが出入りする小さな扉。観察すれば、今は目の前にあるレンガの……倉庫だろうか、そんな小さな建物の影になって分かりにくかったが、大きめの正門の角に、小さな扉がある。微妙に中から光が漏れているように見えることから、鍵はかかっていないのだろう。

敵兵は近くには一人だけ。その一人が背を見せた瞬間を見計らって、その扉から飛び込む。近くに一人、外の迷彩を着た兵士と違って、制服を着た将校のような男がいる。しかし、こちらに気付いた

様子は無い。すぐに分かれ道に着く前に麻酔針を撃ちこみ、その身体を引きずって近くの、受付にでも使っているのである。長机の影に隠し、自分もバックパックから一つの服と布を取り出す。

素早くその服を着用し、布に専用の薬品を塗ってフェイスペイントを落とす。最後に細い縁の角がない四角形の眼鏡をかけ、科学者への変装を完了する。

あとは、怪しまれさえしなければこの研究所内は自由に等しい。グラウン設計局と呼ばれるこの研究所の責任者室は、恐らくは地下だ。二階や一階などは、狙撃の危険性を考慮しなければならない。何より、昔からこういう場所にいる高い地位の人間は、下へ下へと掘り下げていきたがるものだ。

そして地下一階。牢屋とは格子で隔てられているこの場所は、研究室のあるフロアでもあるらしい。科学者たちには自分の立場がバレルであることから、必死に顔をそむけて進む。奥の方へ進めば、木製のドアがある。中は小さな部屋になっており、奥には白い木製の扉。ビンゴ、とスネークは内心ほくそ笑みたところだ。ナイフを懐から取出し、白いそのドアを少しだけ開き、中を確認した後に完全に進入する。中は、茶系の縦線が様々な太さで入っている壁紙、そして机や棚などがあり、写真などもいくらか飾られている。書類などがいくらか散らばっており、扉の右にある机の向こうでは、蒼いスーツを着た誰かが、椅子に座って背をみせている。ちらりと見える頭髮は、すっかり白くなっているようだ。

「ソコロフなら、もうここにはおらんよ」

気配をある程度は消して接近していると、不意に声をかけられる。椅子を横に回してこちらを見るその男は、顔にいくつも皺が出来ている、身長の高い男だ。左手には銀色の湾曲したスキットルを持つ

ている。スネークは彼が振り返る時に手に取ったM1911A1を向ける。

「物騒なものを出すな、酒がマズくなるだろうが」

スキットルを振りかざすように怒鳴る。

「あんた、例の侵入者だろう？ さすがは資本主義の犬、人間の礼儀を知らん」

「お前は？」

「私を知らんのか？ それでよく干ジェント工作員がつとまるな」

酒に酔っているのか、多少荒い語調でスネークに話す彼。椅子の手すりに力をかけて立ち上がる。

「まあいい。私はアレクサンドル・レオノヴィッチ・グラニン。一言で言つて、偉大な男だ」

先程とは打って変わって、機嫌良く自信満々に自分の名を名乗る。名乗りを終え、レコードを止める。アコースティックギターらしい楽器で弾かれていた、穏やかな曲調の曲が止まり、少しだけ部屋にさみしさが生まれる。

「我が連邦最高の兵器開発者であり、栄光あるグラニン設計局の局長でもある」

ふ、とスネークの視界に、グラニンの左胸に光る勲章が目に入る。グラニンも、元から話すつもりでもあったのだろう、その視線に気付いて左胸をスネークの視界から隠れぬよう角度を少し調整する。

「レーニン勲章だ。最も優秀な功労者へ、社会主義労働英雄の称号と共に贈られる最高の栄誉。私の輝かしい実績に対して授与されたものだ」

心底嬉しそうに、その勲章とその勲章を授与された自分をアピールする。その自信に値するほど、レーニン勲章は偉大なものだ。

「偉大な共産主義社会建設のため、私は大戦中から様々な兵器を作り出してきた。下劣なナチ共を追い出すことができたのも、私のお

かげと言っている。今、お前らがSS-1Cと呼んで恐れおのっている、道路移動型弾道ミサイルの基礎を作ったのも私なのだぞ」
グラーニンが指した方を見れば、ケースの中に三本に分けられた模型が飾ってある。いずれも、ミサイルに関係するもののような。スキットルに手をかけ、恐らくウォッカであろうそれを煽る。口から放した際、少し服や顎を透明な酒であろう液体が濡らす。

「随分酔ってるな」

「酔おうとしてるだけだ。今はコイツを飲^やる以外にすることがない机を挟み会話する彼ら。その机の先にある壁には、古びた写真が飾ってある。おそらく、彼と、そして眼鏡をかけた男性がもう一人いる。周りには他にも写真がいくつかが飾られている。

「奴のせいだ」

「奴？」

「ソコロフだよ。あんたの目当ても奴なんだろう。奴のせいで私は全権を奪われた。私の研究もお払い箱だ、見る！ 画期的な移動核ミサイルシステム……二足歩行戦車……」

右脇の机の引き出しからいくらかの書類を取り出す。それをばさりと置き、スネークはそちらへ回り込んでそれを見る。

「二足歩行戦車？」

「歩く戦車、ロボットだよ。猿から人への進化におけるミッシングリンクの話を知ってるか？ この技術は歩兵と兵器をつなぐ歯車になる。まさに金属の歯車。兵器は革新的な進化を遂げる……偉大な金属の歯車なのだ！」

「^{メタルギア}金属の歯車……」

「だが私はタダでは引かんど。泣き寝入りはゴメンだ」

お払い箱にされた研究。それをタダで受け入れないと宣言した彼は、何かを企んでいるような笑みを浮かべている。

「私はこの資料をアメリカの友人に送ってやるのだ」

「何だと？」

彼が投げつけたり叩きつけるように乱暴に置いた一枚の紙を手に

取り、内容を見る。文面のほかに、図と、一枚の写真。写真に写っているのは、金属製でできた、二足で立っているらしい機械。見た目は、恐竜をモチーフにでもしているらしい。

「この連中は後悔する。そして自らが標的になったとき、身をもつて私の偉大さを思い知ることになるのだ！ そう、私の研究はソコロフの下品な発明とは志が違う！ 戦車にロケットエンジンなぞつけてどうする！？」

「それでソコロフは？」

「そもそも戦車に付加すべきなのはロケットなどではない！ ……これを見てみる」

机の中から出てきたグラーニンは、右手で足元を指す。

「いい靴だ」

先程部屋に入っていた時に、机にかけていた足でコツコツと鳴らしていた、茶色の革靴。

「違う！」

無論、彼の示したものはそれではない。

「脚だ！！ どこへでも移動できる脚なのだ！！ 人類が直立歩行したようにな！ それこそが真の革新だ！ あんたもそう思うだろうが！？ だが上層部の馬鹿どもはソコロフを選んだ」

「そのソコロフはどこに？」

「私の研究は廃止、『賢者の遺産』もソコロフに回された」

「何の話だ？」

「『賢者の遺産』だ。あんた、『賢者達』を知らんのか？ 大佐はその莫大な『遺産』を引き継いだのだ。ヴォルギンの親父が『賢者達』のマネーロンダリングを担当していた。奴の親父は大戦後のどさくさに紛れてそれらの『遺産』をいただいた。ヴォルギンはそれを違法に相続したんだ。軍の予算など取るに足らん。この設計局のあらゆる兵器開発費は、全てその大佐の懐から出ている。ここで生まれた数々の兵器が遺伝子となって、やがて戦争の形を変えていくだろう！ 私の研究資金もその『遺産』から出ていた……出ていた

んだ。金も人員もすべてシャゴホッドに回され、いよいよ明日最終試験だ。ソコロフがヴォルギンの本拠地、大要塞グロスニイグラードの兵器廠で最終調整をしている間、私はここで敵のスパイ相手に酒を飲むしかない」

「ソコロフはそこに移されたのか？」

「ああ」

「シャゴホッドもそこにあるんだな？」

「そうだ」

「おい？」

部屋に入ってきたのと同じ扉に歩き始めたスネークを、グラインが呼び止める。

「……グロスニイグラードへ行く気か？ あの要塞は文字通り鉄壁だ」

「だろうな」

「死ぬぞ」

「そのつもりはない」

「待て！」

再び進もうとしたスネークを、またも呼び止める。

「なんだ？」

「人の話を聞け。手を貸してやろうというんだよ」

「なんだって？」

「褒めてくれた礼だ」

「俺が何を褒めた？」

「靴だ。タチアナに貰ったこの靴を褒めてもらった礼だよ」

「要塞への侵入ルートを教えてやる……そのかわり、必ず奴を連れ

出し、シャゴホッドを破壊してくれ。グロズニイグラードの下には地下壕が張り巡らされている。それをうまく使えば内部へ潜り込めるはずだ。山岳地帯に行くといい。地下壕への入り口がある。こいつをやるう」

そういつて、彼は一枚のカードを取り出す。スネークはそれを受け取り、すぐにしまう。

「あんた、ここへ来るのに倉庫を通つただらう」

「ああ」

「そこに鍵がかかった扉があつたはずだ。覚えているか？」

「……」

「これを使えば、その扉が開けられる。その向こうは広大な密林だ。その一番奥から山岳地帯へ登ることが出来る。一度倉庫まで戻れ。それから鍵のかかった扉を開けて先に進むんだ。分かつたか？」

「なぜ俺に協力を？」

「私はソコロフのように亡命を考えたことなど一度もない。私は

この国が好きだ。この土地を愛しておる。他で暮らすことなど考えられん。私はこれからもこの偉大な祖国の英雄でいたいのだ。隅へ追いやられ朽ち果てていくなど耐えられん……」

しんみりとした声で、独り言のように言うグラーニン。

「もう夜明けだ」

そういつてグラーニンが視線を動かす。その方向に沿ってみれば、振り子式の小ぶりの壁掛け時計の針は、既に五時半を回っている。

「急ぐといい。私はもう少しここで飲ませてもらう」

スネークはいったん戻つた机の前から、白い扉の前へと歩いて行く。

「資本主義に！」

彼の突然の声に、その方向に振り向く。すると、僅かに笑みを浮かべていた彼は、スキットルを一気に煽った。それを背に、スネークは白い扉をくぐり、出ていった。

レーニン勲章受章者と金属の齒車（後書き）

レーニン勲章：ソ連の最高勲章でソ連人民最高位の勲章。

ソ連人、外国人、職場集団、公共施設、組織、都市等に、研究・文化・芸術・産業の各分野での抜群の業績ならびに国家の重要問題の解決に尽くした功績に対して授与される。「社会主義のノーベル賞」と呼ばれていた。（wikipediaより）

森に溶け込む恐怖

グラニンからという予想外の協力を得たスネークは、再び研究所を後にすべく動き出す。一度通ったルートを忘れる……流石にそこまで馬鹿なスネークではない。大体把握した程度での敵の動きをかいくぐり、来た時よりも早く研究所から抜け出し、草むらに隠れてタイガーストライプ迷彩に着替え、中庭を抜ける。外壁部分も例外なく難なく通過し、南部にある森に入る。

夜明け前に通過したときに、敵の影は見えなかった。それでも、巡回ルートの可能性もあるし何より数多の罠がここにはある。銃は構えていないものの、視界を常に周囲にめぐらせつつスネークは歩いて行く。

一段低い場所へ小さな坂を下って降り、比較的大きめの木の隣に差し掛かった。突如、スネークの左脚に激痛が走る。思わず地面に両手をつき、追撃をかわすべくそのまま横に転がり、木の陰に隠れる。幾つか飛んできた矢を回避し、木に背を預ける。再び大きくなつた激痛に声を上げるスネーク。その左脚には、一本の短めの矢が突き刺さっていた。M1911A1を抜き、一瞬だけ顔を出す。即座に危機を感じて戻せば、木に矢が刺さつた音がいくつか耳に入る。枝を踏みつける音と、それによって落ちた木の葉達の音が、連続して枝の上を何者かが跳んでいることが分かる。何とか立ち上がり、木から顔を出した瞬間、狙われたことを感じとってやはり木を背にする。新たに一本木に矢が生える。

木に背をあずけ、矢を抜こうとするスネーク。しかし、激痛と矢の形状からそれを抜くことが出来ない。意を決して、感じ取った気配の先に銃口を向け、その気配を追う。正面に来たその気配が、枝から飛び降りる。同時に、いきなりその空間に出現したように姿を

あらわにした。深い緑を基調に、白に近い線を蜘蛛の巣のように施した迷彩を着た、黒と白が混じった頭髪の男。ザ・ボスとドリノヴオドノで対面した時、ソコロフをへりまで抱えていった男だ。地面に手と足を使つて着地したその男が、異様に長い舌で一度舌なめずりし、顔を上げる。

「俺はザ・ファイアー……その矢にはクロドクシボグモの毒が塗られている。じきに耐えがたい激痛が全身を襲うだろう」

右腕で鉄色のボウガン突き付けて、先程スネークが左脚に食らった矢が毒矢だと宣言する。

「体が麻痺し、息も出来ず、やがて心臓が止まる。しかし、それでは面白くない」

もはやザ・ファイアーの話聞いてるスネークは脂汗を浮かべている。ザ・ファイアーはボウガンをスネークから外す。

「まだ死ぬな」

そう言うザ・ファイアーだが、既にスネークの視界は焦点を失い始めている。

「ボスの教え子よ……貴様にまだ見たことのない本当の恐怖を見せてやろう」

身体での動きを加えつつそう言う彼。ただ、おおよそ内容とは関係ないようだ。

「俺の巣の中で……」

逆立ちで、脚は足の裏をつけ膝を曲げ、丁度内側がひし形になるような恰好で言う彼。

「さあ　　恐怖だ、恐怖を感じる！」

右腕、左腕の順で腕を振る彼。まるで肘が脱臼したかのように曲がるが、彼に痛みを感じている様子はない。そのまま彼はこちらに体を向け、背中側に曲げた腕と足で木を掴み登っていく。スネークがその姿を追うと、再び彼は景色と同化したらしく目に見えなくなってしまう。

木の陰に隠れ、スネークは右太腿からサバイバルナイフを取り出す。素早く矢の刺さった部分に刃を突き立て、無理矢理矢を引き抜く。痛みを歪めるが、それに悶えたりできる時間はない。素早く消毒を済ませ、止血剤を傷口に当てる。さらに小さなアンプル

解毒剤を服用して、解毒を行う。少しの時間木に背を預けていると、恐らくクロドクシボグモの毒のせいであろうケイレンが止まり、スネークは立ち上がる。体を反転させて飛び出し、銃を構える。姿が見えないが、枝を飛び移っているらしく音と木の葉が落ちるのが見える。先程姿が見えなくなったのは毒による視界不良ではなかった、と確信し、一度木陰に戻る。見えないのでは撃つことが出来ない。枝を見ても飛び移った後という可能性が大きい。そのまま考え、同時に枝を飛び移る音が止む。スネークは駆け出し、その直後に地面と木にいくつか矢が刺さる。少し走り、また別の気に隠れたスネークは、思考を対抗策へと巡らせる。どうにか奴の姿を捉えない限りは、こちらの勝機は薄い。バックパックの中身を思い出していくスネーク。その間にも走り続け、飛んでくる矢をかわす。「死ぬ気でよけるよ？」

そうどこからか聞こえた直後、弦が矢を弾く音が連続してスネークの耳に届く。すると、なんと上空からスネークめがけて矢が降り、間一髪かわす。同時に、スネークにあるアイディアが浮かぶ。

「今度はグレネードだ！」

宣言と共に放たれた矢をかわし、スネークはサーマルゴーグルを被る。矢が飛んできた方向を見れば、予想通り体温までは欺瞞できなかった。ファイアーの白や赤の影が鮮明に映っていた。爆発音が一つ。その間にスネークがM1911A1の銃口を合わせ、トリガーを二回ひく。ザ・ファイアーの悲鳴が命中を知らせ、もう一度トリガーを引こうとするが、流石にザ・ファイアーも移動を開始する。

いくつも銃弾と矢が飛び交い、かわしかわされの攻防が続く。次第にザ・ファイアのスタミナが底をついたらしい。猛烈に腹を減らしたようで、それが彼の口について出る。

「腹が減った……」

いくつか枝を飛び移った彼に、目当てのキノコという食糧が映る。「食料だ！」

スネークそっちのけでキノコに駆けていき、そのキノコを口にする。

「しまった！ 毒か！」

しかし、あるうことかそのキノコに毒があつたらしく、スネークは内心何をやっているんだと呟く。戦闘の最中に飯を食らい、揚句毒のある物を食べて自爆している彼。むしろそれが作戦の内であるかのようにも思えるが、恐らくそれはない、とスネークの勘は訴える。事実、ザ・ファイアは常にこの森で戦っているわけではないため、食糧には詳しくない。

そんなことを考えている間に、丁度スネークの視界に入る位置にザ・ファイアが降り、毒物を吐き出そうと嘔吐する。スネークにとってはそれは隙でしかなく、銃弾を撃ち込む。すると再三悲鳴を上げ、木の上に戻る。飛び降りてきたかと思えば、木々に張り巡らせたワイヤーで蜘蛛の巣の蜘蛛のように中空で止まる。

「恐怖！ 恐怖だ！ 見えたぞ、恐怖が！」

舌を出し、目を痙攣させるザ・ファイア。

「ファイアー！」

爆炎と爆音が空気を揺るがす。スネークはそれと同時に大木に身を隠し、直後辺りに大量の矢が降り注ぐ。そつと顔を出して様子を伺うスネーク。既に死体ごと爆発で吹き飛んでいるためか、ザ・ファイアは見当たらない。サーマルゴーグルで見てもそれは変わらなかった。

一息つく間もとらず、スネークはそのまま倉庫を目指し始めた。

森に溶け込む恐怖（後書き）

クロドクシボグモ：ブラジリアン・ワンダリング・スパイダー。
シボグモ科。蜘蛛の巣は張らず、夜中に徘徊し、丸太や岩、バナナ
などの下に隠れ、獲物を神経性の毒で捕獲するという捕食スタイル
を持つ。一般成人の場合、約25分で死に至るほどの猛毒を持つ。
体長は5 8cmほどの比較的大型の蜘蛛。一匹当たり最大約8m
gほどの毒を所持し、推測ではおおよそ80人程度を死に至らしめ
るほどという。全身に痛みを覚え、それに伴い血圧の上昇、全身に
マヒが広がる。ちなみに、南米ではすでに血清が開発されている。

森に潜む終焉

ザ・ファイアの爆発が外に聞こえていないとも限らない。スネークはこの森に未練など持つていないはずもなく、振り返ることなく倉庫に急ぐ。倉庫に入り、階段の踊り場の直上辺りに走り寄り、壁の僅かに飛び出た柱に身を隠す。周囲を観察すると、最下層のコンテナが多く置かれている部分を巡回する兵士が一名。今いる場所から1階分下にあるスペース、食糧庫前の通路を巡回しているのが一名。他にはいないということを確認すると、最下層の兵士をMk22で狙撃し、逆L字状の通路になって今いる通路の角まで走り、空マガジンを先程いた階段踊り場の方へ投げつける。

「音がした……？」

案の定、近くにいた巡回中の兵士は調査を行うために階段を上ってくる。必然的に、敵兵の背後をスネークが取る。そのまま角を曲がり直進すると、そこは袋小路になる。しかし、スネークは慌てることなく手すりを飛び越え、そのまま手すりを掴む。こうすれば踊り場で方向を変えた敵兵にはばれることは無い。しかしスネークはその手すりを放してしまう。流石にここから一番最下層まで落ちてしまえば、スネークといえどひとたまりもない。

落下速度が加速を始めた時、スネークは再び手すりを握る。と言っても、その手すりは無論先程まで手にしていた手すりとは違う。もう一つ下の階層、つまり先程兵士が巡回していた階層にある手すりだ。落下速度を一度ゼロにし、再び手を放す。すると、ほとんど痛みもなく最下層に到達するスネーク。空マガジンで引きつけた敵兵をよそに、スネークはやはり警戒を解くことは無くグラニンに言われた扉を目指す。少し進んだ位置にある階段を上り、夜に入ってきた際の扉の左にある、ロックがかかった扉にカードキーを差し込む。穴の位置が合致し、ロックが解除されたのを確認し、スネークはその戸をまたぐ。短い階段を上り外に出ると、そこはグラニ

ンの言うとおりまさしくジャングルであった。

少し進むと、スネークの無線機がc a l l 音を鳴らす。茂みにしやがんで身を隠し、スイッチを入れる。

『スネーク、聞こえる？』

『EVA？ 今どこに？』

『大要塞、グロスニイグライドよ。ソコロフ博士もここにいる』
『無事なんだな？』

『ええ、今、要塞内でシャゴホツドの最終調整をさせられてる』

『少なくともまだ奴は必要とされているということか』

『今のところは。でも、急いで。フェイズ2のテストも完了したらしいわ。最後の調整が済めば彼は用済みになる。CIAに奪われるくらいなら、大佐は簡単に殺すわ』

『EVA、ソコロフのそばを離れないでくれ』

『わかつてる。スネーク、グロスニイグライドの場所わかる？』

『ここから北にある山岳から要塞へとつながる地下壕へ行ける、とグラリーニンから聞いたが……』

『グラリーニンが？』

『ああ。奴はここへ進めるよう鍵も渡してくれた』

『どうして？』

『酔っていたからじゃないか？』

『冗談でしょ？』

『さあな』

『……でも、スネーク、そのルートにはひとつ問題があるわよ』
『どんな？』

『要塞内部へ繋がる地下壕の山岳側出口は封鎖されてるのよ。鍵がなければ入れない』

『鍵？ ……グラリーニンがくれた鍵では？』

『その鍵では開かないわ。大丈夫、私が何とかする。そうね、山岳の頂上に廃墟があるから、そこで落ち合いましょ』

「山岳の頂上、だな。わかった」

『待つて、まだあるの』

「どうした？」

『コブラ部隊の一人が山岳手前のジャングルで待ち伏せしてるらしいわ。伝説の狙撃手……ジ・エンドよ』

「……そいつなら見た。かなりの老人だろう」

『侮らないで。彼は近代狙撃技術の祖とも言われている兵士よ』
ソルジャー

「奴は一人か？ 観測手は？」

『いいえ、彼も一人よ。観測手は必要ないらしいの』

「どういうことだ？」

『森の全てが彼の味方らしい……』

「森が……」

『気をつけて』

「わかった。俺もここでゲーム・オーバーになるわけにはいかない」

その一言を最後に、通信が切れる。北を目指して、スネークは歩き始めた。

しばらく、敵兵の姿は見えなかった。しかし、やがてジャングルが深くなり敵兵の姿を見受けられるようになる。現に、今スネークが身を隠している朽ちた元樹木の壁の向こう側に、1人巡回している敵兵がいる。壁越しに空マガジンを投げ、木に当てる。その音に敵兵が背後を見せた隙に、素早く通り抜ける。細い道に入り、その途中にいた兵士はかわせそうもないためMk22の麻酔針を頭に打ちこみ、草むらに隠す。

もう一度開けたそのジャングルのスペース。敵兵の数は二人のようだが、こちらに気付き得るのは一人のみ。後の一人は木の陰に隠れればやり過ぎそう。木の影から麻酔針で昏倒させ、もう一人、右手側にいる敵兵に注意を配りつつ歩みを進める。と、もうすぐククロヴィエノというところで、スニーキングを行っていたスネーク

が目敏く一本のロープを発見する。見上げれば、ロープの真上付近には鳴子がいくつもついており、恐らくロープを引くとこの仕掛けが作動するのであるうということが容易に想像できる。踏んだり引っかけたりしないよう、慎重にロープをまたぐ。大きな問題は一つもなく、ソクロヴィエノへと到着した。

ソクロヴィエノの南部から進入したスネーク。EVAの話によれば、ここ、至聖の森域ソクロヴィエノでは、三人目のコブラ部隊、ジ・エンドが待ち構えているという。警戒をしていたスネークの顔が、一瞬だけ動く。ただならぬ殺気を感じ、筋肉に力がこもる。

ソクロヴィエノの南部にある、ある高台。眠っていたジ・エンドのその姿勢は、第三匍匐状態と呼ばれるものだ。微かないびきをかぐその身体は、ギリースーツで見事に森と同化している。いや、もはや彼自身、森の一部なのであるう。蛇や虫が、彼の体を這いまわる。一匹の、緑の鳥　　オウムが、彼の肩に止まった。と、同時に、スネークの気配を感じ取った彼は、ゆっくりと目を覚ます。そしてスコープに右目を近づけ、飛び出さんばかりに見開く。

「どうか、最後の獲物を倒すまでの余命をください。もうしばらくわしをこの世界に……」

眩き目を閉じたジ・エンドに答えるかのように、穏やかな木漏れ日が彼を照らす。心なしか、枯れたような色合いだったギリースーツが生き生きとした鮮やかな緑になる。

「わしは既に一生分は眠った……あの世の分も。礼を言わせてもらう。よくわしを起こしてくれた。貴様が現れなかったら、本当に永遠の眠りについていたらとこころだ」

若干聞き取りにくい口調で段々と語気を上げていったジ・エンド。そう、まるで「若返る」かのように、声に覇気が漲っていく。すくりと立ち上がり、その行動に驚いたらしいオウムが飛び立っていく。「蛇よ！ 聞こえるか！ わしはジ・エンド！ 貴様に本当の終焉を見せてやろう！ 最後にはもってこいの獲物だ」

堂々と、そして年不相応なまでに覇気の満ちた声で名乗りを上げる。立ち上がった状態から二ーリング・ポジションに移行し、スコープを覗く。やはり飛び出さんばかりの右目で覗き込み、全くと言っていいほど動かなくなる。森を見上げるスネーク。そのスネークをあざ笑うように森が音を立てる。静寂に戻った森を見て、木の陰に隠れたスネークは無線機のスイッチを入れる。

「EVA、例のスナイパーが現れた」

「ジ・エンドね。彼は狙撃の父と言われた伝説の狙撃手よ」スナイパー

「市街戦や海上での狙撃なら経験はあるんだが……」

「森では？」

「初めてだ」

「そう……その森は川、高台、広場の3つのエリアで構成されてる……彼はそのどこかであなたを待ち伏せしているはずよ」アンブッシュ

「長期戦になりそうだな」

「体力勝負ね。気をつけて。ジ・エンドのカモフラージュ技術は神がかり的と聞くわ」

「動いた方が負けか……だが奴は100歳を越えているんだろう。スタミナならこっちが有利だ」

「そうとは言えないかも」

「なぜ？」

「彼は光合成するって聞いたことがある」モンスター

「化け物か？」

『あと、ジ・エンドは『森』と話が出来るそうよ』

「『森』を知り尽くしているわけだ」

『ええ。でもあなたを知ってるわけじゃない。あなたなら、きっと勝てるわ』

「ああ。そのつもりだ」

それを最後に無線を切る。木の陰に隠れたまま、辺りを見回すスネーク。EVAの言う通りとするならば、こちらは動こうが動くまいが向こうの想定内、そして対策済みの範囲であることはほぼ間違いないであろう。ならば「動いていない」ように「見せかける」ということが重要になってくるはずだ。誰にも見つからない、というスニーキングミッションを得意とするスネークと、見つけることと狙い撃つことを得意とするジ・エンド。ある種、これで互いのアドバンテージは相殺されるはず。

木の向こうを覗くと、スネークの目にはこの自然の森の中に不自然に浮かぶコンクリートを見つける。全て見えるわけではないが、恐らく建物か何かであることに違いはない。その建物に逃ければ、とりあえず銃弾からは身を守れるし、中にある物によってはこちらに有利なもの、例えば、食糧や武器があるかもしれない。そんな淡い希望を抱き、その建物に託すことを決める。

さて、移動するにはどうすればよいか、とスネークは考える。カムフラージュ。ダメだ、こちらの存在を注視しているはずの奴に、そして何より奴の得意分野であるそれで挑むには、リスクが大きすぎる。スタングレネード。こちらもダメだ。閃光の範囲は流石に爆発した場所からせいぜい数mで目がくらむ程度。物陰などに隠れて進む以外、方法はなさそうである。だが、それにはまず敵の大まかな方向を知る必要がある。

腰から集音マイクを取り出し、ゆっくりと周囲を巡らせていく。右から左へと巡らせていくと、しばらくして変化が訪れた。僅かではあるが、呼吸音が聞こえてきたのである。いくらジ・エンドが光

合成をおこなえたとしても、結局は人間である。呼吸は生命活動維持に必要不可欠であり、スネークはそれを見事にとらえた。丁度、目的地である建物方面が彼の視界にもっとも入りやすいようだ。少なくとも、そこまではわかる。

スネークは辺りをもう一度見まわす。倉庫まで隠れることが出来るようなものは少ない。しかし、距離はあまりないようで、400m程度しかないように思える。スネークは念入りにその建物までの遮蔽物を確認し、立ち上がって走り出す。

「眠れ」

遠くからそんな声が聞こえてきた気がすると同時に、スネークが身を隠した岩壁が僅かに砕ける。弾け方からおそらく実弾ではないように思えるが、どうであつても狙撃される立場というのは厄介極まりない。せめて視界が比較的開けているこの森ではなく、もう少し視界が狭いような森であれば、チェ・ゲバラの如くゲリラ戦を仕掛けるのも可能であろうが、それも言っていられない。再び走り出し、今度はリズム、そして方向を変えつつ走る。と、いうのも、もはや遮蔽物という遮蔽物が存在しないからだ。

幾度か弾が突き刺さり、それでも走つていくと、建物前の坂にたどり着く。わざわざ2m程もコンクリートで小さな高台を作り、その上に作つてあるその建物は、どうやら倉庫のようだ。当てが外れなかったことを喜びつつも、全力でその倉庫へ駆け抜ける。坂の辺りで、倉庫がこちらを隠したらしく、射撃が建物に一度あたつて以来止んだ。中に入ったスネークはといえば、駆け抜けた疲労以上の脱力感の原因を探していた。すると、答えは簡単、先程撃ちこまれた弾だった。正確には、弾ではなく小さな注射器のようである。丁度、スネークの持つMk22と同じようなものだ。原因を探し当てたスネークは、器用にサバイバルナイフを使ってその麻酔針を抜く。流石に麻酔針を抜いても体に入ってしまった麻酔は抜けないため、疲労感が残る。

動けないほどでもない、と判断したスネークは、改めてその倉庫の中を見渡す。3m四方程度の内部には、弾薬や武器が置かれている。武器庫のようだ。しかも、幸運なことに、恐らくジ・エンドの持つ狙撃中よりは数段精度が落ちるであろうが、狙撃中であるSVDが置いてある。弾薬の数も問題ない。マガジンを入れない状態で一度構えて引き金を引く。正常に作動することを確認したスネークは、そのSVDにマガジンをねじ込む。半自動スナイパーライフルであるこの銃であれば、質より量の攻撃であれば彼と同じ位置に立てるはずである。

スネークは残りの弾薬などももてる限り貰い、倉庫の扉をゆつくりとあける。そして倉庫前の短い坂ではなく、その脇に飛び降りる。丁度高台を背にした状態になったスネーク。頭上でジ・エンドの撃った麻酔針が弾ける音を聞く。その方向に咄嗟に振り向き、SVDの引き金をいくつか引く。そのうちのいくつかが、彼の潜伏場所かその付近にでも行ったのだろう。狙撃の際に感じる気配を感じなくなり、スネークは彼が移動したのだと察知する。慌てて彼を追う、ということはずせ、彼は彼でどこか自分が潜伏できるポジションはないか、と動く。

静かなこの森に、久しく今日は銃声が轟いた。いくつか銃声が轟き、そして静まり、長い沈黙を経て再び銃声が起こる。そんなことを幾度か繰り返していた。スネークは、途中動植物を食料として捕獲^{チャー}、そして食べてスタミナを維持させつつ、潜伏、索敵、狙撃の応酬を乗り切っている。どこかスネークは、この戦いに戦争ではなくスポーツや力試しに近い心境で臨んでいたが、それは本人にも自覚はなかった。

静かに、霧のように雨が降り出した。やがて雨脚は強さを増し、視界を悪くする。サーマルゴーグルに切り替えた彼は、もはや幾度ジ・エンドの獲物になりかけたか、そして彼を倒しかけたか分からなくなっていた。潜み、探し、狙い撃つ。この3ステップの作業の繰り返しは、常に緊張をはらむ。

ソクロヴィエノの北部ともいうべき場所の、とある高台に、スネークは伏射姿勢でSVDを構え、スコープと耳に意識を集中していた。先程からここで彼を搜索していたが、もはやスコールのように短かった雨は上がり、霧のようになっていく。逆に視界が悪くなったため、サーマルゴーグルを外す。意識を再び集中すると、スコープが彼を捉えた。ついにこちらには気づいていない、狙撃準備が整った体制になった。頭部は隠れているが、胸部は見える。一度深呼吸で肺の空気を入れ替え、息を深く吸い込む。意識を集中し、スコープを覗き込む。独特の、赤いV字のレイトクルを彼の心臓に合わせ、息を吐くペースを狙撃独自のゆったりとしたものに変える。手振れを抑え、視覚以外の情報が遮断される。引き金をゆっくりと握りこみ、乾いた爆発音が森に響く。ほぼ同時に、弾丸はジ・エンドの背中を襲い、僅かに心臓よりも下部に着弾したものの、明らかに致命傷だった。

立ち上がったジ・エンドは、ふらりふらりと数歩歩いたところで再び地面に体を横たえる。仰向けに倒れた彼は、しっかりと相棒であるモシン・ナガンを両手で抱えていた。

「森の精霊たちよ……ありがとう。ザ・ボス……素晴らしい弟子だ……これからは若い世代の時代だ。一世紀以上も放浪したが、ようやく役目が終わった。素晴らしい幕切れだ」

最初の名乗りの時の覇気は、既に感じられない。彼のリリーススーツが、いくらか赤みを帯びる。

「思い残す事はない。これでわしも森へ還れる」

彼の口から、入れ歯がはじき出された。

「ジ・エンド！」

爆発と同時に鳥たちが飛び立ち、木々が揺れる。まるで、哀悼の意を示し、そして捧げるような森たち。まさに彼にとって、森は一部であり、彼は森の一部であったのであろう。

森に潜む終焉（後書き）

ギリースーツ：狙撃の際などに使用する迷彩。木の切れ端、木の葉などを再現し、より高い迷彩効果を狙うもの。中には本物の木や木の葉を使う時もある。ただし、自然のものを使うのではあるが、誤って別の木の葉などを付けるとかえって目立つことがある。

市街戦や海上での狙撃：それぞれMGS / MGS2でのこと。ただし実際ネイキッドスネークが体験したものは別の事であると思われる。プレイヤー自身の経験を指す。原作中ではそれぞれに上記の作品のルビがふられていた。市街戦はシャドーモセス島においてのもの。特にスナイパーウルフとの狙撃戦。海上は、実際にはポートなどでの狙撃ではなく、ある程度安定している「ビッグシエル」の脚部からの狙撃が主であった。あるいは、脚部同士をつなぐ連絡橋での狙撃もあった。

ニーリング・ポジション：狙撃姿勢の一つで、立って狙撃を行うスタンディング・ポジションと、伏せて射撃を行う下記の姿勢の中間的存在。射撃後の移動速度と、狙撃の際の手振れの抑えやすさなどからの射撃精度が両者の中間あたりで、この姿勢での狙撃は多い。左手でバレルを支える場合、左膝を立て、その上に左ひじを置く。

ブローンポジション：上記の射撃姿勢と比べ、精密射撃に特化した姿勢。伏せて射撃を行うため、射撃後の移動は相手の射撃可能な面積を減らすことにつながり、移動するより当たらないことで補う。利き手ではないほうでバレルを支えるほかにも、三脚（二脚）や小

さめの砂袋などを用いて、ストックをその時に空いた手で押さえ、その加減で照準を調整する場合も多い。

セミオート：半自動と呼ばれる。引き金を引きつぱなしにすると弾丸が連続でばら撒かれるのがフルオート、全自動。引き金を引くと弾丸が一発撃ち出され、なおかつ一発ごとの装填、排莖などを人間ではなく銃の機構が行う構造。現在の多くのハンドガンがこの機構であり、リボルバーに対しオート拳銃などと呼ばれている。スネークの持つM1911A1、通称ガバメントやハンドキャノンと呼ばれるそれもセミオート拳銃である。SVDは、モシン・ナガンのボルトアクションという機構上の連射力のなさを克服すべく生まれ、たセミオートライフルだという。中距離からの射撃を主とするためであろう。同じような理由で、PSG-1やWA2000が開発されている。こちらの開発の発端はミュンヘンオリンピック事件であるが。

モシン・ナガン：モシン・ナガンM1891/30。セルゲイ・モシン大佐とナガン兄弟の開発による。小銃として生産され、その中でも特に精度のよかったものに改修を加えて作成される、五発装填のボルトアクション式ライフル。後のSVD開発のきっかけ（狙撃の有用性）になったものでもある。精度が大変高く、原作中無線でシギント曰く「東部戦線のドイツ兵が自身の狙撃銃ではなく鹵獲したモシン・ナガンを使った」というものを聞ける。ちなみに、製造年数が長く、1998年まで製造されていた。ジ・エンドの使用するモシン・ナガンは麻酔銃に改造されたものであり、ほかにピストルグリップ、折り畳みストックを追加されており、シギントもこの意味の不明瞭な改良に疑問を抱いていた。しかし、後のMGSシリーズではモシン・ナガンといえはこのカスタムで登場する。

美しきはずの山

ジ・エンドを下し、北にあるというクラスノゴリエへの入り口を
目指すスネーク。急な斜面を登り、曲がりくねった道ともいえぬ道
を進むと、今までの純自然的ジャングルにそぐわぬコンクリート製
のトンネルがあった。中は先程の雨のせいか、いくつか水たまりが
ある。次いで、もともとここを根城にしていたのであろう大量のコ
ウモリと少数のネズミが見える。さらに200m程のそのトンネル
を進んだ突き当りの壁には、蒼いクモも潜んでいた。ついザ・ファイ
アのクロドクシボグモを思い出すが、触れなければどうというこ
ともないと自分を納得させ、その左数歩分にある梯子に手と足をか
けた。上を見れば、それこそ霞んで見えるほど頂上は遠い。首が痛
くなる。エンパイアステートビルをも彷彿とさせるその高さ、ス
ネークは一つため息でも落としたい気分になる。

無限につづくかのような感覚の梯子を上りきると、流石に痺れて
きていた腕をもみほぐして血液を巡らせ、続いて肩を少し回す。目
の前数十mもないかというところには、出口と思しき扉が開いてい
た。トンネル内の薄暗さに慣れていたスネークは、少しばかり目を
細める。見渡してみれば、クラスノゴリエ美しき山とは名ばかり、一面黄土
色の、草木の一切ないような山であった。この美しさは理解できな
いな、と心中で毒づいたスネークだが、岩山に近いということは、
身を隠す場所が少ないということになってくる。より敵の位置を詳
しく観察する必要がある。トンネルから身を乗り出し、敵兵がいな
いことを確認し、次いで曲がり角まで小走りで寄り、再び身を少し
乗り出して確認する。すると、今度はいくらか人影を見ることが出
来る。ここから見えるのは、巡回中の兵士が二人、そして天然の高

台の上にも一人。そしてその一人は

(対戦車ロケット砲か……)

パンツァーファウストを基に開発された、ソ連製の対戦車ロケット砲を、まさかこんなところで見かけるとは思わなかった。確かにテロリスト達が多用することもあるが、専らアンチマテリアルとして使用する。スネークが一人ではなく、戦車や装甲車を使っているならまだしも、スネークは生身の人間だ。サンダーボルトの思惑は読めないが、地面にでも当てて爆発でもさせられれば、自分はひとたまりもないはずだ。警戒するに越したことはない。

珍しく長めの思考にふけたスネークだが、ついに行動を開始する。まず、高台にいる視界を広くとることができる、件のRPG-7持ちの兵士には麻酔針を撃ちこみ、行動と視界を封じる。見たところ、天然の地形であるが故か他に高台に使えそうな場所はないし、兵士の姿もない。と、進んで砂丘のように盛り上がったいくつかの山の向こうに見つけてある敵兵をやり過ぎすべく動こうとしたスネークが、足元に気配を感じ、Mk22の銃口を向ける。すると、この岩山の色に酷似した蛇が、今まさにスネークの脛に噛みつこうとしている。咄嗟に銃口を引くと、間一髪噛みつく直前に体を地面に横たえる。

ふと、ケージにその蛇、パラメディック曰くタイワンコブラとかいうそれを入れたスネークの頭に、一つのひらめきが浮かぶ。タイワンコブラを入れたケージを軽く揺すり、意識を覚醒させる。すると、少し暴れだすが、おもむろに首の部分をひつつかみ、小さすぎる丘の向こうにいる兵士めがけ、投げつける。

いきなり飛んできた蛇に、大慌てするその兵士。どうやら噛み付かれたらしい。ようやく振りほどき、しばらく対峙する。ナイフを構えた兵士は、やはり速度が高いというべきか、毒蛇を目前としても対峙している今は落ち着いている。鎌首をもたげたタイワンコブラが、威嚇の音を出す。数秒の後、振り下ろされたナイフで絶命し

たタイワンコブラではあるが、その毒は確実に兵士を蝕んでおり、汗を腕で拭った直後、死亡する。少々申し訳ない気持ちになりつつも、先程眠らせた高台の兵士が目覚めないうちに突破せねばなるまい。蛇をバックパックにしまい、左手にいるはずの兵士に見つからぬよう素早く走り去る。再び視界に一人の新たな敵兵が入り込むが、問答無用で麻酔針を撃ちこみ眠らせる。

アーチのようになった岩を潜り抜けると、今までの比較的傾斜の緩い、しかし凹凸というよりも起伏の激しかったその地形と異なり、路面の凹凸はもはや壁となり、まるでその間を潜り抜けるように上るための通路はスイッチバックを繰り返して上る電車の路線のようになっているのが、遠目でもわかる。兵士も数名巡回しており、おおよそ折り返し一回につき一人はいる。いっそ、先程手に入れたスナイパーライフル^{SVD}を使って、排除しつつ進んでしまおうか。見つかりさえしなければ、死体も見つからないのだから、応援も呼ばれないし、見つかることもない。

早速伏射姿勢になり、左にスコープの視界を走らせる。1人の敵兵の姿を捉え、赤いV字のレティクルをこめかみに合わせる。トリガーを引き、ほぼ同時にスコープ越しに血を噴水のように噴出した兵士が倒れる。構うことなく、銃身を右に持つていく。丁度、巡回コースが手前に来たのであろう。間抜けにもスコープのど真ん中に姿を現した兵士は、眉間に7mmを越える穴が出来上がる。次いでさらに左にスコープを持つていく。先程より一段上がった場所にも兵士はいる。頭部は岩で隠れて見えなかったため、セミオートであることを利用し、右足を撃ちぬき、よろめいて晒された頭部を素早く撃ちぬく。

後は姿が見えないが、全くいない訳でもあるまい。スネークは素早く立ち上がり、SVDをM1911A1に持ち替えて走り出す。角を曲がるたびに銃口が振られ、道をクリアリングしていく。そして、4度目。1人の兵士がまだ生きていることを見つけ、咄嗟に岩陰に隠れたスネーク。幸い背を向けていたため、見つかつてはいない。足音が止まる前にと、その敵兵に大きく一歩踏み込んで近づくと、

銃口を突き付け、制止の言葉を口にする。意味を一瞬で理解したらしい敵兵は、両手を挙げて手にしていたAK-47を落とす。その間、銃口を向けながらスネークは正面に回り込む……ことはせず、後ろから足払いをかけ、重心を崩した瞬間に掴んでもたれかからせるように拘束。左手のナイフをちらつかせる。

「言え……！」
ナイフをわざと見えるように首に近づけ、脅迫する。

「ライフルでも……ヘリのキャノピーなら……」
いきなり突拍子な情報ではある。しかし、あの新型ヘリの事を指しているであろうそのヘリというワード……正直、あのヘリがどれだけの性能かは分からなかったため、多少有り難い。他に聞いてみるも夕湯女情報も得られない。首を絞めて気絶させると、スネークは先を急ぐ。

他に、敵兵が一人、そして出口付近では歩哨が三名いたが、いずれもすべてかわしたスネークは、いよいよ山頂へとたどり着いた。あとは、EVAと合流するだけである。しかし、やはりというべきか敵兵が多い。地図を確認すれば、ここは塹壕をたどれば小屋に着くらしい。近くにいた敵兵を眠らせた後、他の敵兵に見つからぬよう塹壕へと降りるスネーク。この中であれば、上からなら見つかる心配も少ない。敵の足音に注意しつつも、身を隠しながらスネークは進んでいく。途中、幾度か敵兵を眠らせつつ、曲がりくねったそ

の塹壕を上っていく。すると、どうやら目的地に着いたようだ。赤い扉が見え、廃墟なのだという雰囲気を感じたその建物は、恐らくEVAの言った廃墟に間違いはない。スネークはそれでも警戒を解くことなく、ゆっくりとその建物に近づいて行った。

美しきはずの山（後書き）

蒼いクモ：コバルトブルー・タランチュラのこと。ツチグモの一種で、名の通り青い。タイやミャンマーに生息する。毒性、気性ともに強く、ケージでペットとして飼われることもあるが、その際は脱出を防ぐために敷き詰めた土と蓋部分は離しておくことが必要。開けた時に逃げられることがある。ちなみに、ツチグモであるため、蜘蛛の巣は張らず、地中に穴を掘って生活する。故に、飼う際は深めに土を敷き詰めることが必要。

RPG-7：現在ではAK-47とともに世界中に拡散した兵器。理由はAKと同じく構造の単純性。RPG-7の名称は、ロシア語で「携帯式対戦車擲弾発射器」を意味する「-7」：

（ルチノイ・プラチヴァタンカヴィイ・グラナタミョート）「の英字綴りである「Ruchnoy Protivotankoviy Granatomet」の頭文字をとった略称から作られた。英語の訳表記では「Rocket-Propelled Grenade（ロケット推進擲弾）」と綴られるが、これはバクロニムであり、厳密には誤りである。また日本語では、しばしば対戦車ロケット弾発射機と称される。たしかにRPG-7から発射される弾の多くにはロケットが備えられているが、このような弾を使用する場合であっても「装薬によって砲身から射出すると共に後方にも装薬の燃焼で発生したガスを噴射することによって反動を相殺し、発射後に弾体の固体ロケットに点火して飛翔させる」という機構であり、またロケットを持たない破片榴弾OG-7Vが用意されていることから、「無反動砲」に分類するのが正確であるとする意見もあるが、現在使われている弾頭のほとんどはロケット推進弾であり発射時は

無反動砲の原理で射出されると言うだけでその後は弾体の安定翼を開き、固体燃料ロケットで推進し命中させると言うものであり無反動式射出型のロケット弾という形態であり無反動砲と断言するのは過ちである。(wikipediaより) また、使い捨てではないが比較的軽量である。ただし、弾薬の構造上、羽が存在するため、あまりにも低い場所では使えない。

タイワンコブラ：台湾や中国南部、タイなどの山地や森林、平原、水辺などに生息している蛇で、神経毒を持つ。哺乳類やトカゲ、カエルなどが主食。なお、コブラ特有の性質として威嚇の際に首回りにあるフードを広げ、噴出音を発する。なお、ペットとして飼われる場合もある。

キャノピー：ヘリの操縦席を覆う風よけ。強化ガラスなどで作成され、拳銃などでは歯が立たない。また、最近のヘリでは対物ライフルですら易々と防いだりするような性能を持つものもある。今作ではキャノピー越しにライフルを操縦者に叩き込めば、操縦できなくなるため墜落する。

合流

赤く錆びた扉に手をかけて押すと、やはりEVAが開けておいてくれたのかそもそも鍵がないのか、すんなりと開く。既に錆びた鉄の骨組みのみになってしまっているベッドと今にも崩れそうになっている木製の小物を置くラックのみが設置されている、廃墟そのものと言わんばかりの小部屋。その奥にある、人1人がやっとという程度の細さの階段を上っていく。階段が終わりに近づき、一度腰をさらに落とし、銃を上げて警戒を強める。無論、待ち合わせの通りならEVAのみはずだが、戦場に絶対など存在し得ない。

二階部分に相当する部屋に入るスネーク。丁度、EVAは着替えの途中であつたらしい。黒い胸の下着が露出している。咳をわざとらしく行くと、EVAもスネークの存在に気付いたらしい。

「あら、早かったのね」

ライダーズーツを上げることなく、振り向きざまに言うEVA。しかし脚ではブーツを椅子の下に蹴って隠すようにしまう。今はいるのは紐付きの、ブーツというよりはシューズと呼ぶべきベージュのもの。

「疲れているようだな？」

「ええ。大丈夫。二役が忙しくてちょっと寝不足なだけ」

「その傷は？」

「大佐に……」

「まさか、ばれたのか？」

「だったら生きてはいないわ。彼の趣味よ」

僅かに焦りを見せたスネークに、EVAは多少呆れたように言う。確かに、スパイが彼女だとばれようものならば、今頃あの男は彼女を生かしておくはずもない。せいぜい、拷問を行うために生かし、外へ出す事はないだろう。彼の趣味、というものがどういうものか、

というのは研究所南の倉庫に垣間見せた、加虐趣味である。サディヒズム

「人をいたぶる、人を痛めつけて快楽を得る。最低の男……」

珍しく怒りや嫌悪を露わに言うEVA。まさしく生理的に受け付けない、というようだ。

ふと、背中を向けたEVAのある一か所に、スネークの目が行く。それに触れようとしたスネークだが、気付かれてEVAは軽く笑みをこぼす。

「珍しいの？」

「いや、俺も同じく……傷だらけだ」

「見せて？」

「ダメだ」

押し倒すかのようにスネークの肩に手をかけたEVAを制止するスネーク。しかし、決して実力で反抗しようとはしない。あくまで踏みとどまるのみ。

そこで、再びスネークの目が丁度EVAの脇腹あたりに引かれる。

「この傷はどこで？」

「ソ連に亡命してから」

「いや、もつと古い傷だ。NSAは内勤だろう。どこでこんな傷を

……」

「知りたい？」

「……」

再び背を向けていたEVAが問う。スネークは答えない。

「教えない」

「……」

振り返りながら言うEVA。スネークは不満げな顔だ。そんな彼の顔を包むようにスネークの顔を引き寄せ、EVAは静かに、艶やかな声で言う。

「いい女に秘密はつきものよ。そんなことより、急いで。シャゴホツドのフェイズ2の実験が始まる。実験を邪魔しようとする動きが

あるわ」

今までの雰囲気から一転、凜とした声色で、急ぎ気味に荷物を漁りながら話す。

「フルシチヨフ？」

「彼の軍がこつちへ向かっている。それに対抗する為に大佐は部隊を集結させている。もたもたしていると警戒がさらに嚴重になる。例の鍵よ。これで地下壕への扉が開くわ」

ライダースーツをきつちりと着たEVAが、右手を突き出す。掌でその右手から落下した鍵を受け取る。少しくすんだシルバーのシンプルなものだった。

「その先を進めば、グロズニイグライド内部へ出られる」

スネークは小さくうなずいた。

「あと、これも」

EVAがトランクから取出し、顔の横に掲げた二つの小さな袋。

「なんだ、これは？」

「21世紀の食べ物よ。宇宙航海時代のね」

受け取るうと手を伸ばしたスネークだが、EVAは少しだけずらし、遠ざける。

「たまには美味しいものも食べて」

そう言つて、スネークに手渡す。見てみれば、袋には黒く太字で何か書いてある。スネークには読めないものの、日本語で「即席ラーメン」と記されていた。

EVAが寄り、スネークの唇に触れる。

「あなたとキスしたら きつと獣の味がするわ」

EVAは、静かにそう呟いた。

「ソコロフはグロズニイグライドのどこにいるか、わかるか？」

「要塞の中心部、兵器廠よ。兵器廠は、3つの建物にわかれている。

研究施設のある東棟。兵器の組み立てが行われる本棟。シャゴホッ

ドもここ。そして本棟から渡り廊下で繋がっている西棟。ソコロフがいるのはこの西棟よ。潜入するには、東棟から本棟に入って、本棟の2階から渡り廊下を通ればいい」

「わかった、兵器廠の西棟だな」

「でもひとつ問題があつて」

「またか」

ため息をつくように、スネークは漏らす。もつとも、すんなり行くとは思っていないが、それでもこつ問題続きではいかに覚悟済みとはいえ多少はげんなりとしてくる。

「西棟のセキユリティは最高レベルなの。大佐クラスでないと入れない」

「大佐クラス？」

「いい、この写真を見て」

渡されたのは、モノクロの、男性二人が向き合つて映っている写真。一方はヴォルギンだ。もう一方は、将校帽を被つた、白色に近い髪を持つらしい男。

「イワン・ライデノヴィッチ・ライコフ少佐。彼に化けるといいわ」「どうやって？」

「彼の服装を奪えばいい。背格好も近いから大丈夫。顔は似てないけど……変装の方法は考えて。彼は東棟のどこかにいるはずよ」

「わかった。だがソコロフを連れ出せたとして脱出方法は？ 上官からは君が用意すると聞いているが……」

「ちゃんと準備してあるわ。北に30マイルのところ湖があるの。そこにW I Gが隠してある」

「W I G？」

「最新鋭の表面効果機よ」

「表面効果機？ そんなもの俺はとばせないぞ？」

腕を軽く広げ、脱出経路に異議を唱える。しかし、EVAにはそれも予想の範囲内なのか、特に反応した様子はない。

「大丈夫。私は名パイロットよ」

腰に手を当て、自慢げに言ってみせる。

「湖からの離水は厄介だ。バイクの扱いとは違うぞ。もっと繊細に扱わないと……」

「もちろんそのつもりよ。バイクの運転を見たでしょう？」

「……」

ふと、その言葉を受けて視線を下げたスネーク。その視界のなかに、革製のブーツがバイクのペダルに擦ったらしい傷が入る。しかし、敢えて何も言わない。

「わかった、脱出については任せよう。俺はグロスニイグライドへ向かう」

「待つて」

出発しようとしたスネークの腕をEVAが引き留める。

「聞いておきたいことがあるの」

「なんだ？」

「ザ・ボスとは どんな関係だったの？」

「俺の親であり、師匠だった」

「恋人でもあった？」

「……それ以上の存在だ」

「それ以上？」

「俺の半分はザ・ボスのものだ」

「好きなの？」

「そういう感情じゃない」

「嫌いななの？」

「好きか嫌いか……そのどちらかでないといけないのか」

「そうよ」

スネークの肩にEVAの腕が回される。吐息を感じるほどに、EVAの顔が近づく。

「男と女の間がらはね」

「10年、生死を共にした。とても言葉ではいえない」

「そんなザ・ボスを　　殺せるの？」

その言葉にEVAの顔の方を向いたスネーク。視線がぶつかる。EVAが腕を放して、半歩だけ下がる。

「ザ・ボスの暗殺。それがあなたの任務でしょ」

少しだけ立ち尽くしたようなスネーク。EVAとは反対方向の壁へ数歩歩きより、再び立ち尽くす。そのそばにEVAが歩み寄った。

「スネーク　　恋人は？　好きな人はいるの？」

「他人の人生に興味を持ったことはない……」

「ザ・ボスには興味を持った？」

「彼女は特別だ」

「そう、私は？　私はどうなの？」

「君こそどうなんだ？」

「私？　私は任務のためなら人を好きになれる。あなたの事も……」

言い終わると同時に、初めて出会った時のようにチャックを下ろしていく。軽く唇を触れるだけのフレンチキス。

「スネーク？」

スネークは答えない。再び唇が触れ合い、続いて右の頬にも唇が触れる。

「どうしたの？」

ただ立っているスネークを見て、流石に疑問を抱いたEVAが問いかけたその時　　外から銃声が轟いた。スネークが

はっとしたように動きだし、扉に手をかけ、EVAに視線を送る。

トランクを持ったEVAは頷き、二人はもう一つの出口から小屋を出た。

合流（後書き）

即席ライメン：1958年、日本が初めて開発に成功した袋入りのライメン。チキンライメンが日清から発売された。原作ではチキンライメンではなく、袋上部にでかかと即席ライメンと印字され、ライメンの写真が載り、下部はオレンジの細いラインが入った柄となっている。ちなみに、パラメディックとEVAは大変強い執着を持っているらしく、パラメディックからは持ち帰ってほしいと強請られたり、EVAに至ってはスネークに渡す分をつまみ食いしている。

WIG：ソ連製表面効果機。あるいは地面効果翼機とも呼ばれる。当時の最新鋭のもので、時速は700kmを超える。飛行機に似ており、主翼で揚力を得るといふ点では変わらないため、飛行機に準ずる速度で運行可能。ただではなく、表面効果を利用するため、飛行機以上の運搬可能重量のキャパシティが大きい。ただし、操縦にはかなりの腕がいる。主に第二大戦中に開発、研究がなされた。

大要塞グロスニイグラード

小屋を出ると、そこはグロスニイグラードを見渡せる、山頂部分になっていた。両脇を岩に囲まれ、正面は多少広いものの、しばらく行けば切り立った崖。とてもではないが、準備なしには降りられない高さだ。予めおいてあったEVAのバイクを見る限り、EVAはこちら側から山頂に来たらしい。

「スネーク、それじゃ、気をつけてね」

グロスニイグラードを見やるスネークに、バイクに跨り声をかけるEVA。

「君は？」

「もう一人の私を演じないと……急いでるの」

「大丈夫なのか？」

「それが……さすがに彼らもスパイが居ることを疑い始めている。

あなた一人でここまで来られるはずはないもの」

確かに、スネークは鍵などのいくつかの壁を、EVAやグラードンからの助けで乗り越えてきた。本来なら、どう足掻いても越えることが出来ないはずの壁を越えてきたのだから、怪しまれるのも当然である。特に、スネークの存在をヴォルギンが知っているというなら、なおさら警戒されているはずだ。

EVAはヘルメットを被り、ペダルを勢いよく蹴る。エンジンがかかり、あるうことか崖の方向へと走りそのまま崖から飛び降りる。EVAが操るバイクは、そのまま短い滞空を終え、壊れたのではと不安になるような音と共に着地する。スネークはそのまま走り去っていく彼女を見ていた。

双眼鏡をのぞく。既に遠くにいるEVAのバイクが見え、その視界を左に持っていく。大要塞、恐るべき要塞グロスニイグラード。軽く見回しただけでも、大量にある装甲車や戦車などの兵器や、武器庫などと思

われる倉庫群、そして嚴重な警備体制。

ふと、双眼鏡を動かしていったスネークの視界に、とある物が入る。緑の外套を着た男が、ドラム缶を殴りつけている。青い稲光が奔る。ヴォルギンだ。

二つ、蒼い稲光が奔る。そのたびにドラム缶が音を立てる。中から、煙が漏れている。もう一撃。さらに一撃。側面を覗き込むように見たヴォルギン。ふん、と笑いをこぼし、再び殴りつける。

ドラム缶の下部から、紅い液体が滲み出てきた。明らかに、人間の血である。背を向けるヴォルギン。しかしもちろん、その血を見て気分が悪くなったのではない。

腰から8つのライフル弾を取りだし、両手の指に挟む。左脚を動かして振り向き、腰に持つてきていた右手と、その拳に向き合わせたような左手。唸るような声と共に気合を入れ、比例するように青い稲光が弾ける。気合の声と共に、勢いよくドラム缶が吹き飛ぶ。その後ろに積み立ててあったいくつものドラム缶にぶつかり、ボウリングのようにそのドラム缶を吹き飛ばす。ヴォルギンが殴ったドラム缶はと言えば、宙に高く打ち上げられ、頂点に至ったところで中にいた人物が放り出される。青いスーツに皺と白髪を携えた顔。グラニーニ・ゴルキー研究所局長、グラニーニであった。

「大佐」

グラニーニを吹き飛ばし、殴った後の構えを解かぬままの大佐に、オセロットが声をかける。

「何か吐きましたか？」

「いや、その前に死んだ」

構えを解き、肩をまわしながらいつもよりいくらか低い声で答えるヴォルギン。ただ、その中に後悔の念は感じ取ることはいかない。対するオセロットは、振り返って視界に入った煙を携えたグラニーニ

ンの死体を見て、多少驚いたようだ。

「スパイではなかったのでは？」

オセロットの問いに答えることなく、ヴォルギンはグラリーニンの亡骸に歩み寄り、右足の靴底をねじる。

「これを見る」

出てきたのは、小さな黒い箱のような物。

「発信機？」

「そうだ。こいつの居場所を知らせるものだ」

その直後、大量の火花を散らして発信機が役目を終える。ヴォルギンが電撃を流したのだ。その発信機の目の前にいたオセロットは、思わず顔をかばう。

「しかし、グラリーニンがスパイだったかどうかは？」

「奴は誰かに利用されていたのかもしれない」

「かもしれない？ こいつも同志ですよ」

「いずれにせよ、もう必要ない男だ」

「こんなやり方、納得できません」

ヴォルギンに歩み寄り、オセロットは抗議する。

「納得などする必要はない。私が司令官だ」

「……核砲弾の件も……」

睨まれ、ほんの少し萎縮しながら、なお抗議を続ける。

「なんだ？ またその事か。軍部に報告する気か？」

再び背を向けあう二人。二人の仲は、あまりよくないらしい。

「これは戦争だ。いいか、冷戦という名の諜報合戦なのだ。スパイは見つけ出さなければならぬ。やるかやられるかだ」

グラリーニンの亡骸に歩み寄るヴォルギン。高い身長の彼が、亡骸を見下ろす。

「疑いの芽を摘むことだ。組織の結束には邪魔な感情だ」

なおも二人は背を向けあっている。

「誰かが手引きしているはずだ。単独で出来ることはたかがしれている。必ず内部にスパイがいる」

「同志を疑うなど」

振り向き、なお抗議の声を上げるオセロット。

「C3爆薬が盗まれたんだぞ」

ヴォルギンもまた向き直り、スパイが内部にいるとしか言えない状況にあると言外に言う。

「例のアメリカ人では？」

「いや、奴はまだこの要塞までは来ていないだろう」

「では一体誰が？」

「部下を疑いだすとキリがない」

突然として、オセロットとヴォルギンのどちらでもない、女性の声。その正体は、アンダルシアンを背後に、黒い外套を羽織っているザ・ボスだった。

「ボス？」

「どこに行っていた？」

そして、ボスとは逆方向からタチアナが姿を現し、それに気付いたオセロットが問いただす。彼女は顔をそむけて答えない。

「ザ・ファイアー、ジ・エンドがやられた」

ザ・ボスはそう告げると、ザ・ファイアーの愛用していたボウガン、リトルジョーを放り投げる。二挺のうち、連射力に優れる小型のボウガンである。オセロットが拾い上げ、ヴォルギンは右手に力を入れ、少しだけ青い稲光を走らせている。

「くそっ！」

振り向きざまに倒れていたドラム缶を勢いよく殴りつける。凄まじい音に、タチアナが悲鳴を上げる。

「CIAの犬めっ！^{アメリカ}残るはザ・フューリーののみか……伝説のコブラ部隊がいつも容易く……」

「さすがだ……」

トリガーに掛けた指でリトルジョーをまわしながら、小さな声でオセロットが呟く。その言動に、少しだけ驚いたような顔をするタチアナ。

「惚れたのか？」

ヴォルギンもまた、それは意外だったらしい。だが、流石に惚れたと一言目で言うものだろうかと聞かれれば、彼の性癖を知る者なら頷くだろうが、そうでないものは首をかしげることだろう。オセロットは問いに答えることなく、代わりにかりトルジョーの回転を止める。

「心配するな。あの男は私がやる」

「奴の狙いはなんだ？ ソコロフだけとはおもえん」

「アンダルシアンに跨り、ザ・ボスは答える。」

「アメリカの狙いはシャゴホッドの破壊と、大佐が受け継いだ……」
空に雷光が奔り、彼女を照らす。

「『賢者の遺産』」

再び、雷が轟く。

「まさかつ！ あの『遺産』を……」

僅かばかりの沈黙。

「そして私の抹殺……」

そう告げたザ・ボスは、どこか悲しげな顔をしていた。

「大佐、ここの警備を強化しろ！ 彼は必ず来る！」

アンダルシアンが嘶き、前足を持ち上げる。

「私はデイビークロケットを取ってくる！」

ザ・ボスはそう言い残し、兵器廠の方へとアンダルシアンを駆けさせる。ヴォルギンも立ち去り、その場にはオセロットとタチアナ、そしてグラリーニンの亡骸が残された。

オセロットも、その場から立ち去ろうと歩き始めた。しかし、タ

チアナの前を通り、不意に足を止める。

「ん？」

彼女に歩み寄り、首辺りのにおいをかき取る。

「香水か？ ふむ……」

違うという考えがオセロットにはあるのだろう。彼女の周りを悩みながら歩き、リトルジヨーをまわす。そのリトルジヨーを止め、だらりと腕を下げる。いきなり、彼女の首に矢が装てんされた状態のままのそれを突き付ける。首をそらせ、怯えの表情を見せるタチアナ。

「いいブーツだ。ちゃんと磨いておけよ」

リトルジヨーを離し、ブーツの傷を見たオセロットはそう告げる。オセロットが例のポーズと共に去り、タチアナもスネークのいる山頂をちらりと見やり、その場から小走りて去った。

スネークはその一連のやり取りを見終えた後、双眼鏡をしまい、行動を再開した。

行動を再開したスネークは、山頂側の小屋の扉をくぐり、自身が入ってきた塹壕側の扉から出る。風が強い。唸りを上げ吹き付ける風は、ただでさえ低気圧低気温の山頂の環境を悪くする。塹壕の中はいくらかマシとはいえ、あまりこんな場所にはいたくはない。身を縮める暇もなく、スネークは塹壕内を歩き出した。

しばらく進み、曲がり角に差し掛かった時。がしゃり、がしゃり、と機械が何かを揺らしながら誰かがこちらに歩いてくる。咄嗟に塹壕の壁に、角を背にするよう身を隠すスネーク。段々と近づく足音の主。緊張が高まり、手に持つMk22を握る力が強くなる。壁ギリギリまで身を動かし、その間に自分の視界の中に敵兵がいないことを確認する。後ろにも、気配だけではあるが敵兵はいないらしい。後一步、というとき、その足音は遠ざかっていく。しかし、反対方向ではない。スネークのいた方向とは逆に角を曲がり、そこにある段差を上って塹壕から抜け出そうとする。その隙を逃すことなく、麻酔針を後頭部に命中させるスネーク。

よく見ると、その敵兵は燃料が詰まっているらしいボンベを背負った、火炎放射兵のようだ。遅れてさらに汗が噴き出したが、止まっている暇もない。そのまま塹壕から抜け出し、辺りを素早く見回す。左手にある壁にそって進み、一段落ち込む場所へと身を隠す。ぽっかりと切り取られたように空いたスペースをうまく利用し、壁越しに敵兵の位置を確認する。先程登ってきたときに見た扉は、確か丁度この下あたりだった、とスネークは思い出す。注意すべき敵兵は2人。背を向けた隙について、1人ずつ突破する。崖を二段飛び降り、赤い扉の前に到達した。ここが、地下壕への入り口であるはずだ。

鍵を差し込み中へと侵入したスネーク。薄暗い階段を降りると、今度はほとんど視界がゼロになる。流石になれない場所で暗闇とい

うのは不安が強い。松明を灯し、ふと思い出したようにブラックの迷彩服、フェイスペイントに着替える。

着替えが終わったスネークは、階段を直進、細い手すりのある通路にさしかかる。左に曲がり、突き当りで右しか道がないためしたがって右に曲がる。しばらく行くと梯子がかかっているようだ。ゆつくりと梯子を降りるスネーク。念のため、明るくなって敵に見つかりやすくなる松明は消してある。M1911A1とナイフをいつも通り構え、ゆつくりと歩き始めたスネーク。

しばらくとしないうち。炎が勢いよく燃える音と、それに騒いでいるらしい蝙蝠の騒がしい声。右に振り向くと、いくつか仕切られたうち、2つ先の通路が異常に明るくなっていた。本当に火が上がっているらしい。ゆつくりと慎重に、その方向へと歩き始めたスネーク。コンクリート製の壁のような柱の間を抜け、通路に出る。右、と銃口と体を向け、クリアであることを確認する。そのまま前進し、壁が腰ほどまでになったところでは少し身を屈め、向こう側を伺いながら歩く。再び壁が柱となるうという時。がしゃり、がしゃり、と足音と共に機械か何かを揺らしながら歩いてくる音。黒い影がスネークの視界の先に現れる。壁を乗り越え、こちらより低いのか上った時よりスネークの視界が大きく上に流れる。着地した足音に気付いたのか、スネークの左側にある、通路が柵の様に交わる場所、つまり地下壕そのものの壁に当たる部分から一本手前の角が朱色に染まる。その熱気に思わず顔をかばうスネーク。

その波のような炎が流れてきた方向から、黒い耐火服に身を包んだ人間が出てきた。背には白いタンクを背負っている。振り向いたその男の右手には、炎を吹く銃の様なノズル。黒いヘルメットには、白字で「^{撃て!}」と書いてある。天井に向かい、炎が波となって吹

き荒れる。赤い太めのパイプを包むように炎はうねり、逃げ遅れた蝙蝠が数匹落ちる。かばっていた腕を戻し、銃口を向けるスネーク。「私はザ・フューリー！ 怒りの炎で貴様を焼き殺してやるう！」ザ・フューリーのヘルメットに炎の明るさでスネークの顔が映る。「私は宇宙からの帰還者。その時、灼熱の世界を見た。そこで見出したものはなんだと思う」

そこまで言うと、ザ・フューリーは再び天井に炎の波を打ち上げ、スネークはその熱気に顔をかばう。

「怒りだ」

左手で、ポンベを支える黒いラック状のそれから伸びるレバーを握る。背中にあるノズルから勢いよく噴き出した炎が、ザ・フューリーの体を持ち上げる。さながら、テレビなどに映るロケット打ち上げのようだ。

「生きる事への憤怒だ」^{フューリー}

体を傾け、かなりの勢いでスネークに突進するように近づく。身構えるスネークも、既に臨戦態勢に入っている。

「おまえにもあの灼熱のブラックアウトを感じさせてやるう！」

炎の波が襲い、スネークは顔をかばいつつ脱出を図る。

「焼け死ぬがいい！」

がちやり、と金属製の地面に足をつけた音と共に言うザ・フューリー。スネークは柱状のコンクリートに背をつけ、身を隠す。音を聞く限り、少し遠くに着地したらしい。列も異なるようなので、スネークは気配の察知に気をやりながらも、足音を立てないように慎重に歩き出す。向こうは足音を消さないらしい。遠いため微かにではあるが、先程と同じくがしゃりがしゃりと音が聞こえてくる。

思い返せば、向こうの来ていた服も黒であった。お互いにこの暗闇では見つけにくいか、とスネークは考える。となると、なおさら今回の戦いではスニーキングが重要となるだろう。

曲がり角に来るたび、その先をクリアリングしていくスネーク。

もう一か所、残っている場所があったが、自身の射撃が外れた際に爆発してしまっている。

背中をつけた壁の浦に、丁度ザ・フューリーが来た。スネークはM1911A1を一度しまい、右の腿につけてあるサブバルナイフを抜く。足音が背を通り過ぎた瞬間に飛び出し、気付いて振り返る間も与えず連続して斬りつける。逃げようとしてもした時に斬られたのか、吹き飛ぶように倒れるザ・フューリー。しかし耐火服の上からであったからかあまりダメージもないらしく、すぐに立ち上がる。しかし、戦況が変わっていないかと言えば違った。

「耐火服が!？」

そう、いくつも切れ目を入れられた耐火服は、既に破れてしまっていたのだ。スネークはダメ元ではあるがグレネードを投げつけ、一度離脱した。

スネークは今、銃口を上げている。向けているのはドラム缶。腰ほどまでの壁があるため、そこに銃と腕をのせ、自身のみはほぼ隠せている。左右や後ろの方へ来ても対応できるよう気配に気を配りつつも、息を殺してドラム缶の前を通るのを待っている。先程はクレイモアを見つけられて破壊された。なら、銃弾を撃ち込んでドラム缶を破壊するまでである。

「どこへ行った？」

足音を立てながら言うザ・フューリー。その声はドラム缶より少し左で聞こえる。SVDのスコップを覗く目が一旦離れ、辺りを見る。あと15m程度の所を歩いているところが見え、その歩みはドラム缶へと向かっている。再びスコップを覗きこみ、トリガーガードに指をかける。やけに足音の感覚が広がっていき、自分の心臓の音も聞こえ始める。そして、ついにスコップの中の視界の端にザ・フューリーを捉えた。トリガーガードからトリガーに指をかけなお

し、彼が3歩の歩を進めた瞬間、トリガーは引かれ、内部の機械類が作動、火薬が爆発し、7.56mmロシアン弾がドラム缶へと直撃した。爆発と共に悲鳴が轟き、黒い影が吹き飛ぶ。壁に打ち付けられつつも立ち上がる。スネークは通路を走りながらM1911 A1に持ち替え、突き当りでザ・フューリーと対峙する。

「ザ・ボス……コブラ部隊もこれで終わり」

ふらふらと歩きながら、ザ・ボスに呟くザ・フューリー。その身体にまとう耐火服は、めらめらと炎を燃やしている。

「あなただけは……生き延びてください。私も　　ザ・ソローの下に行きます」

突如、爆発的な勢いで炎が噴き出す。思わず顔をかばうスネークの視界には、僅かにではあるが、大量の炎に包まれるザ・フューリーが映る。呻くような声が聞こえるが、その中には負の感情以外も感じる事が出来た。

ヘルメットを脱いだ途端、箍を外した水のように炎が吸い込まれていく。

「憤怒の炎！　地獄の灼熱が私を浄化してくれる！」

炎が収まり、一步、力なくも前に踏み出すザ・フューリー。対してスネークもM1911 A1の銃口を向けなおし、臨戦態勢に戻る。「見えた！　管制塔聞こえるか！」

その呼びかけに答えるように、録音でもされていたのか電子的な通信機器を通した声が聞こえる。再びレバーを握りこみ、背後のノズルから炎が噴き出す。勢いにまたも顔をかばうスネーク。ザ・フューリーのつま先が地面を離れた。

「還ってきた！！」

凄まじい勢いで煙をまき散らしつつ、天井へと突っ込む。

「大地だ……」

砂煙と共に、ザ・フューリーがぶち当たった周囲の天井が崩落してくる。咄嗟に自身に落ちそうになった巨大なコンクリのそれを転がる様にかわす。すぐさま立ち上がり警戒を解かずにみやると、怨

嗟の念でも籠っているらしい炎が二つ、塊になって地下壕を駆ける。大回りで回り込むように一度端まで行った炎の塊は、スネーク目がけて突っ込んでくる。危機感を覚えたスネークは咄嗟に再び転がってかわす。直撃は免れたが爆風にあおられる。立ち上がり、ナイフを顔の前に構える。視界の右端からもう一つの日の塊が現れる。どうしようかと刹那の間戸惑うが、先程日の塊がぶつかったのはドアの部分だったらしく、崩落している。そこに走りこみ、その直後、炎の塊がドアの枠にぶつかって爆発した。

「フューリー！」

間一髪、ドアの前で起きた崩落から逃れたスネーク。後ろを見ると、完全にドアが瓦礫で埋もれてしまっていた。もう、後には引き返せないだろう。

振り向いたのを止めて前を見る。梯子が一本ある。恐らく、この上がEVAやグラニーンの言っていたグロスニイグラードへの入り口なのであろう。スネークは左右に特に何もないと確認すると、その梯子を上り始めた。

梯子を上るスネークの吐息は、注視しなくてもわかるほどに真っ白だった。しばらく上り続けると、梯子が途切れふたがされている。その金属の蓋を押し開けると、一気に視界が広がる。一段くぼんだここは、丁度2m程の高さの壁に囲まれたそれほど大きくないスペース。灰色の空から、いくつも白い雪が舞ってきている。近くにあった直方体に近いコンテナが集まった場所に身を隠しつつ辺りを伺う。サーチライト、大量の巨大なコンテナ、コンクリートで仕切られた壁、そして奥に見える兵器廠と思われる巨大な建物

大要塞グロスニイグラード。敵の本拠地に来たと、スネークは実感した。

Intrude to Groznyj Grad (後書き)

火炎放射器：太平洋戦争やヴェトナム戦争などでも使われた、その名の通り炎を噴射する兵器。非人道的な兵器（不要な、過剰な苦痛を与える）として戦争では使用不可能。ただし、日本などでは害虫駆除などに用いていることもある。穴に逃げ込んだ人を、酸欠状態にすることなどで殺すことができ、かなりの戦力になったらしい。また、逆にその惨たらしさなどから真つ先に狙われ、燃料などを撃たれ仲間を窮地に陥れることもある。燃料が燃え、ボンベなどに炎が逆流しないように数秒から十数秒で止めなければならない。

ロケット燃料でも使っている：実際、ザ・フューリーの使う火炎放射器はロケット燃料の非対称ジメチルヒドラジンとテトラニトロキシドを使用する特殊性。これによって射程、威力が普通のものと比べ段違いに高くなっている。ちなみに、なぜかダンボールを被ると服に火が燃え移ったものを即座に消化できたり、あるいは天井にあるパイプを撃つと水が噴き出すものがあり、その部分の火が早く消えるなどの小技がある。

Sneaking to building

大要塞グロズニイグラードの南東から侵入したスネーク。慎重に出てきたところの左側にある赤い階段を上る。目の前に敵兵はいるが、背後を向けている。その隙に更に右、つまり出てきたときには正面にあった、トラックに積むようなコンテナの影に隠れる。縦横それぞれ三つずつ並んだそのコンテナ群は、身を隠すのにもってこいだ。一番端、スネークの侵入した場所から見れば丁度右奥に当たる部分のコンテナに身を隠し、半身だけ乗り出して覗く。丁度一個向こうのコンテナに向かい歩いて行く敵兵が一人。その敵兵が背後を見せている間に通り抜け、コンテナ群の最後、十字路の様になっている場所で、コンクリ製の壁に張り付き、確認する。こちらに足音が近づいてきている。覗き込むことはできない。正面と左右から敵が来ないことに気を配り、足音が去るのを待つ。

遠のいていく足音。すかさず他の方向から敵が来ていないことを確認し、倉庫の外周を沿うように走る。壁に外壁がくっついていない倉庫であるため、丁度迂回するような形になる。しかし、こちらに扉がある以上避けることはできないはずだ。右に壁を見ながら、角を一度曲がる。二つ目の角に差し掛かったところで再び壁に背をつける。敵兵の気配がないと分かったところで、音を立てないようにそっとドアを開ける。赤さびにまみれたようなそのドアは、すぐに仕切られた次の空間へとつながっていた。

少し、そのドアをくぐった後スネークは見上げた。大要塞グロズニイグラードのメインともいえる兵器廠。その中央と東の兵器廠と思しき建物が見えていた。EVAが言うには、今日の前の建物の左側、薄い灰色の建物に入り、ライコフ少佐の服を奪う。そして中央

棟から西棟へと入り、ソコロフと接触、奪還するとともに、シヤゴホツドを破壊する。

視界を戻し、左右を確認する。敵兵が多く、隙間はそうそう見当たらない。顎に手をやりながら考えるスネーク。右を見れば、少なくとも二名の兵士が。右には、三名の兵士が映る。小さ目、とはいえ自分の腰ほどもあるコンテナや、人員を多く運ぶ為の装甲車、その他遮蔽物が多い。だが、それも建物の外周付近で、こちらから向こうへ行くまでに恐らくは発見されるだろう。スネークは、他に進入路がないか、探すことにした。とりあえずドアをぐり直し、そのまま進路を右に取る。戦車が大量に配備されているのを先程見た方向だ。

再び仕分けられた壁を行き来するためのドアをくぐる。左を見やれば、大量の戦車。それも、開発段階で優秀な成績を残すことを期待されたものの、高価すぎて制式採用を逃した『オブジェクト279』であった。制式採用されていないというのは誤情報だったのだろうか。あるいは、それほどグラーニンの言っていた『賢者の遺産』というのは莫大なものなのだろうか。ただ、今は見る限り整備中なのか動く気配はない。先程の装甲車や輸送トラックもそうだ。スネークはここで戦車や装甲車を盗む必要はない。無視をして、警戒を解くことなく進み始める。軍用犬やサーチライトを保持する監視塔などがあるが、この部分には穴が多いらしい。軍用犬は寝てしまっているし、監視塔は一方を眠らせ、もう一方の根元を通れば見つからない欠点があった。戦車の群れの中に一人と、上部にある中央と西棟を結ぶ連絡通路の真下にいた兵士を眠らせたスネーク。そのまま進むと、小さな倉庫を見つけることが出来た。

「武器庫か……？」

ドアを開けて中を見たスネークにとって、その目的は一目瞭然だった。大量に置かれた銃器や弾薬、その他諸々。これを見て武器庫

と答えない軍人はもはや軍人ではないと言える。

「これは……！」

その中を軽くではあるが物色し始めたスネーク。そのスネークの目に、とある銃器がとまった。ストーナーM63、アメリカの最新式分隊支援火器で、スネークは聞いたことがあるだけで見たこともない。一度武器庫の入り口横の壁に身を隠し、シギントに連絡を入れた。

「M63を手に入れたんだな。M63はアメリカ製のシステムウェポンだ」

「ああ。聞いたことはあるが……」

「手にとるのは初めてか？ まあ去年開発されたばかりの最新兵器だからな。大方、東南アジアあたりで鹵獲されたものが研究用としてそっちに送られて来たんだろう。システムウェポンっていうのはパーツの多くを共有させて、同じ設計でバリエーション展開を実現させようって試みだ。基本コンポーネントを核に、パーツの組み合わせを変えることで、さまざまな銃種が得られる。いわば可変式ライフルだな。重心や断層を取り替えれば、突撃銃、アサルトライフルカービン、軽機関銃からベルト給弾式中機関銃にまで転用できる。これには、複数の装備を別ラインで整備せずに済む上、兵士の教育にも手間がかからないってメリットがあるんだ。部品もプレス加工やロストワックス製の物が多く、比較的技術力の低い国でも製造が可能ないように配慮がされている」

「なるほど」

「あんたの持つてるバリエーションはベルト給弾軽機関銃だな。本来分隊支援任務に用いられるタイプだ」

「M60よりかなり軽いな」

「ああ。それだけ軽量の軽機関銃は他にはないぞ。ジャングルの中でもかなり扱いやすいはずだ。うまく使ってくれ」

そこでシギントとの交信は切れる。なるほど、この軽機関銃ならかなりの火力増強を見込める。万が一的に追われたときにも使っ

てみようかと考えつつも、残りの弾薬などもいくつか補充していく。

補充を終え、一度そばにあったトラックのフロントに背をつけ、身を隠してあたりを伺うスネーク。その時、丁度無線のコール音が鳴る。辺りに敵はないと確認したスネークは、しゃがんで無線機のスイッチを入れた。相手はEVAだ。

「そこにあるトラックはグロズニイグライド内外の物資輸送に使われているものよ」

「どうやら、今スネークが背をつけているトラックらしい。どこかからか見えているのだろうか。」

「ダンボール箱を満載して終始あちこちを走り回っているのを見るわ。グロズニイグライドは巨大な要塞だから、彼等もかなり忙しいらしいの。とにかく仕事が多くて、ダンボール箱の中身なんていちいち確認していられないって愚痴をきかされたことがあるわ」

「なんてことのないような内容に聞こえるが、EVAの言うことだ、もしかしたら何かしら意図があるのかもしれない。ふと、スネークは気になったことがあったのだと思いつく。」

「EVA、ライコフとかいう少佐だが」

「ええ？」

「奴は『大佐クラス』の権限を持っていると言ったな」

「ええ」

「だが奴の階級は少佐だろう？ なぜ『大佐クラス』なんだ？」

「ライコフはヴォルギン大佐と同格の扱いをされているのよ」

「同格の扱い？」

「ええ」

「少佐なのにか？」

「そうよ」

「どうして？」

「わからない？」

「ああ」

『あの写真を見ても?』

「……………ああ」

『あなた、朴念仁って言われぬ?』

「どういう意味だ?」

『自分で考えなさい』

「おい……………」

『じゃあね』

そう言っつて無線を切ろうとしたらしいEVAだが、会話が再開された。何か思い出したらしい。

『ところでスネーク』

「なんだ?」

『どうして食べないの?』

「なんのことだ?」

『即席ラーメンよ。どうして食べないの?』

「食べなくちゃいけないのか?」

『当たり前でしょう』

「どうして?」

『私のプレゼントだからよ』

「……………」

『あなたは知らないでしょうけど、即席ラーメンはグロズニイグラーの兵士達の間でも大人気なの。手に入れるのは本当に大変なのよ。それを3個も確保したのに……………』

「3個? 俺がもらったのは2個だぞ?」

『あ……………まあ、細かいことはいいじゃない。それより、ちゃんと食べるのよ。いいわね?』

そう言っつてEVAは無線を切ってしまう。恐らく、彼女は誘惑に負けて食べてしまったのだろう。それだけウマいのなら、少し気になるところ。今は流石に食べられないが、後のささやかな楽しみができた。スネークは行動を再開しようとして……………手を止めた。

先程、EVAの言っていたトラック輸送の件だ。確か、彼女はダンボール箱を満載して、と言っていた。その中身も確認していない。スネークは、今自分が持っているダンボールを確認する。そのダンボールの側面には「兵器廠東棟行き」と書いてある。この上ないチャンスだ。スネークは素早くトラックの荷台に乗り込み、ダンボールを被る。

「兵器廠東棟行きか……」

兵士が帰ってきたのに気付いたスネークがダンボールの奥に身をひそめると、その兵士はEVAの言った通り、ロクに荷物を確認せず運転席へと向かう。

揺られに揺られ数分。スネークはダンボールの中で僅かにはあるが笑みを浮かべていた。あんなに難解に見えた潜入が、こうもあっさり行ったからだ。ダンボールの持ち手穴から見れば、コンテナのたくさん積まれた倉庫らしい。いくつか物資も落ちている。それらをちゃっかりと回収し、科学者へ変装する。眼鏡をかけ、違和感の正体のもとであるずれをなおす。

行動を開始するスネーク。まずは一通り施設を回り、構造と大まかな兵士の配置を確認する。その途中、二階部分にいたとき、ライコフと思しき人物をガラス越しに見つける。

スネークは今、机の影に身を隠していた。背を向けた机のさらに向こうは先程ライコフを発見した時のガラス。壁のように張られたそれは、まさしく透明な壁というべき。向こう側からは自分が見た時の通り丸見えであるため、今こうしてデスクワーク群の中に身を

隠している。

しばらくすると、自分もくぐった自動ドアが音を立てて開いた。ライコフが入ってきたのだ。ライコフは、他の兵達と違って一定のルートを巡回する範囲が異なる。普通なら部屋を一つ分くらいだが、彼の場合この建物を全て巡回する。やはり少佐という立場からなのだろう。スネークはライコフが後ろを見せた隙について、素早く引き倒し、頭部をぶつけさせる。その後、そのライコフの体を引きずり、すぐ近くにあったロッカー室のような所へと運ぶ。とはいえ、仕切りで区切られただけの、荷物を置くだけの場所であろうが。

ライコフの身ぐるみを黒い下着以外剥がし、ロッカーにその身体を隠そうと、他のロッカーとは異なり、明らかに丈夫そうな赤いラインの入ったロッカーを開ける。ふと、気絶から覚めては面倒だと考え、スネークは済まないと思いつつも首の骨を折る。ごきり、と鈍い音が聞こえ、その死体となったライコフの体を今度こそロッカーに隠した。

Sneaking to building (後書き)

オブジェクト279：正確にはオブジェクト。作中、シギントに性能などを聞くことができるが、実際原作ではシャゴホッドになぎ倒される時のみ動く。外的要因で。実際、この戦車の性能はかなりのもの。戦術核兵器の使用される状況下を想定されており、履帯は左右2本ずつ、計4本もある。まるで円盤のような流体曲面の車体をもち、核爆発時の爆風や衝撃波を受け流して車体が横転しないようにした設計となっている。速度もかなりのもので、泥沼化した道にはまったT-10戦車をけん引するほどに悪路にも強い。が、作中でも語られる通りPSG-1やWA2000のように、コストの問題から量産できず、制式採用もされなかった。ちなみに、砲弾は130mm仕様で、全体的にハイパワーなつくりであった。車体のほとんどは鋳造で作られていた。

M63：ストーナーM63という名の通り、ユージン・ストーナーが開発した、システムウェポン。本作、および原作では軽機関銃として使用する。ちなみに、ユージン・ストーナーはM-16（本作、原作ではXM-16E1）も開発した。アメリカでは時期的問題（M-16の本格普及を行っていたこと）もあり、陸軍や海兵隊には採用されなかった。しかし、その特徴に目を付けた海軍、SEAL'sが試験採用、名を売ることとなった。だが、その器用貧乏な性能が災いし、1971年製造を中止、大量生産には至らなかった。原作では、乱射とともにスネークが雄たけびを上げる。5.56mm×45弾という、比較的小口径の弾丸を使用するにも関わらず、敵兵がすさまじい勢いで後ろに追いやられていくほどの大火力を誇る。敵兵を壁に縫い付けるような威力は、一転PWでは弱体化してしまっただが。

ソコロフとシャゴホッド

ライコフの服を手に入れたスネーク。しかしながら、隠したライコフの遺体とスネークには、決定的に違う個所がある。それはもちろん、顔だった。あきらかに、さわやかな印象を持たせる、少し長めの白い長髪を持つライコフと、どちらかといえば渋い印象を持つスネークでは、だれがどう見ても違うという。どうしたものか、と悩むスネーク。この顔にどこか見覚えがあるものの、それがどこかも思い出せないし、そもそも思い出して意味があるのかも定かではない。しかし、思い出さないよりはマシかもしれない、と一時的に集中的にその記憶の糸を探るスネーク。

「……………」

長い沈黙。その長い思考の果てに、ようやくスネークは持ち物を漁るという動作に移る。ようやく思い出したのは、自分の持ち物にあったということ。漁っているうち、ゴムのような感触が手に触れる。引っ張り出してみると、それは以前HALO降下の際に使用した変装マスク。なぜか、ライコフの顔にそっくりであった。いけるかもしれない、とスネークはその変装マスクをかぶる。そういえば、渡された際に「ソ連のある将校に似せた……」とかなんとか聞いたことがあったがコイツだったか、などと考えつつ、スネークは奥にある扉を目指す。

兵器廠の本棟へとつながるその扉を抜け、すぐにあつた角を2つ曲がると、一つの金属製らしいドアと、その少し奥から右手側を見れば、整備中らしいシャゴホッドが見える。そのことに気付いたスネークは、ドアに手をかける。しかし

（鍵がかかっているのか……）

ドアノブを捻ることが出来ず、もちろん引くことも押すこともできない。仕方なく諦め、ソコロフがいるであろう奥の西棟を目指す。角をもう一つ曲がり、奥左手にあつたドアをくぐる。先程、M63

を手に入れた時に通った場所が見える、渡り廊下だった。奥には歩哨が2人。しかし、変装をしているスネークは怖気ることなく進み、2人の前に立ち敬礼する。それが合図であるために、逆に怖気ついていては怪しいのだ。

「はっ」

敬礼を確認した歩哨2人がドアを開け、スネークは中へと入る。

荷物がいくらかおかれ、横に長い廊下。目の前の扉以外に用はないため、スネークは構う事はない。帽子を取り去り、次いでマスクを引き剥がす。今まさにドアから入ろうとしたその寸前

「これだ」

中から聞こえてきた声に、スネークは扉の正面から退き、脇の壁に身を隠す。そして顔だけで、扉の窓から中を覗き始める。

「約束は守るわ」

白衣を着たソコロフから受け取ったリールテープをかざすように、タチアナが言った。顔をそむけるソコロフ。

「『賢者の遺産』については？」

「その事は何も知らん……」

その言葉に、タチアナは腰から銀の小さな円筒状の物を取り出す。

「それは！」

ハインドの中での出来事によって見覚えのあるソコロフは、明らかな動揺を示す。

「私を殺すのかっ！」

「どうしたの？」

キャップを外すと、空気の入る音が場を凍らせる。それは、まさしく彼にとっては死刑宣告から執行へのカウントダウンにしか思えぬ音。カウントはたった一つ。歩み寄るタチアナ、距離をとるソコロフ。一歩一歩、距離が変わらない。

「知らん、知らんのだ」

ベッドに躓き、転ぶ。その途中でも、ソコロフは必死に自分への疑いを晴らすようにする。

「『遺産』のことは大佐しか知らんはずだ！」

「そう」

その答えと共に、ソコロフに手に持ったその先を向ける。ソコロフにとって、その銀色の筒は自身の首に迫るギロチンの刃のようにも見える。

「やめろ！」

悲鳴まじりに言うソコロフと対照的に、タチアナは顔色一つ変える事はない。

銃声が響くことを想像したソコロフ。タチアナが回したその筒の底部。しかしそれは引き金ではなく、本物の口紅だった。中から出てきたのは死の口づけ^{キス・オブ・デス}ではなく、赤い殺傷力を持たぬ化粧用品。タチアナはそれを軽く自身の唇に塗る。その様が、ソコロフのモノクルに写った。

口紅をしまい背を向けるタチアナ。ソコロフは、最大限まで上がった心拍数と呼吸数を現すような荒い呼吸のまま、生がいまだあることに安堵する。

扉に近づくタチアナ。それを見たスネークは足音を立てぬよう、すぐ近くにあつた、縦に積まれたダンボールに身を隠す。幸い気付いた様子もなく、先程スネークの入ってきた扉から出ていくタチアナ。それを確認したスネークは、今度こそ扉からソコロフのいる小部屋に入る。

「誰だ！」

左右にスライドする扉の立てる音に気付いたソコロフは、先程の事もあつてか警戒心が強く、いつもより強い語調で問う。しかし、ソコロフはその姿をすぐに悟った。

「あんだ、CIAの……？ なぜここに？」

「必ず助ける。バーチャスミツシヨンの時、そう言っただろう？」

「上官に似て、律儀な男だな……」

ふっと笑みをこぼしソコロフは言う。しかし、その表情はすぐに曇る。

「だが、遅すぎたようだ」

「遅すぎた？ まさか……シャゴホッドが？」

「その通りだ」

小さく頷き、してほしくなかったことをソコロフは肯定する。

「フェイズ2の最終調整は完了してしまった……」

「……ソコロフ、フェイズ2とは一体？」

「中距離弾道弾射程合成延伸システム……そう呼ばれている」

「シャゴホッドは あらゆる地表から核ミサイルを発射する核搭載戦車として設計された。だがひとつだけ解決できない難問があった。現在の大陸間弾道弾はシャゴホッドへ搭載するには大きすぎたのだ。だが軍部はそれに納得せず、あくまでもアメリカ本土へ直接核ミサイルを撃ちこむことの出来る兵器を要求した。そこで考案されたのがフェイズ2だ」

「だがシャゴホッドに大陸間弾道弾は積めないんだろう？ 一体どうやって？」

「加速するんだ、シャゴホッド本体を」

「加速？」

「フェイズ2では、シャゴホッド本体へロケットブースターユニットを装着する。ガガーリン少佐を宇宙へ送った、ヴォストークロケットの技術を流用したユニットだ。このブースターによって、シャゴホッドは時速300マイル以上で地上を走ることが出来る」

「あの巨体が300マイル以上で？」

スネークが驚きの声を上げる。スネークはシャゴホッドを実際に見ている。だからこそ、あのハインドを大型戦闘機5機も使って運ぶような巨体を約483km/h300マイルで走る様は想像できなかった。

「そうだ。そしてその高速走行状態から核ミサイルを射出する」

「シャゴホッド本体にロケットの1段目のかわりをさせるといふことか？」

「その通りだ。シャゴホッドが射出する核ミサイルの射程距離は、2500マイル程度から、6000マイル以上に伸びた」

「6000マイル……アメリカ全土が射程に入るな……」

「それだけではない。シャゴホッドには、通常のICBMのように、巨大なミサイルサイロを設計する必要がない。約3マイルの滑走路、あるいはそれに準ずるものがあれば、この連邦のどこからでも、アメリカ全域に熱核兵器を落とすことが出来るのだ。偵察機や衛星からも発見できない、隠密展開、即時発射が可能な移動核要塞……」

「まさに　　悪魔の兵器か……」

「格納庫に完成したプロトタイプがある。今のところあの1機だけだ。だがヴォルギンはあのプロトタイプを元に量産化しようとしている」

「ソ連全土に配備を？」

「ああ。だがそれだけではない。東欧、アジア……東側に属する各国に送り込む気だ。その上、シャゴホッドの提供を餌に、第三世界の独裁者や民族派、革命勢力に武装蜂起を促すつもりでいるらしい。奴には莫大な資金がある。量産体制はすぐに整うだろう。東西の対立が冷戦として定着したのは、お互いが相手の力に恐怖したからだ。Deterrence『抑止……脅迫して思いとどまらせる』というこの単語が、冷戦と

いう時代そのものを表している。だがシャゴホッドの存在は恫喝というレベルを凌駕している。もはや抑止は成り立たなくなる。あれが世界に解き放たれれば、ただちに各地で火の手が上がるだろう。冷戦は終わり、全世界が灼熱の戦争で焼き尽くされる。ヴォルギンとシャゴホッドがその中心だ。わかつたろう、遅すぎたんだ」

次第に強まっていった語気とは反対に、最後は諭すように、そして諦めの色が濃く現れた口調で言うソコロフ。しかし、スネークはまだあきらめてはいない。

「いや、まだ遅くはない」
「なに？」

「あきらめるな、破壊すればいいんだ、この施設ごと、量産される前に」

スネークの口調には、今だしつかりと強い意志がある。任務を遂行し、世界を核戦争の危機から回避させるという、人類の存亡をかけた意志が。

「だが……」

「どうすればいい？ この施設を破壊するには？」

「……そうだな……」

スネークの声に感化されたのか、ソコロフも考え出す。ほとんど間もなく、ソコロフはベッドにかけていた腰を上げる。

「ロケットエンジンに使う液体燃料のタンク、あれを爆破することできれば……C3爆薬なら格納庫ごと吹っ飛ぶ」

「C3？ ……最先端のプラスチック爆弾か？」

「自由自在に形が変わる、21世紀の爆薬だ」

「どこにある？」

「この武器庫にあったが、今はない。女スパイが盗んだ。さっき来ていた」

「EVA？」

「そういう名前ではない。タッチアナという女だ。ヴォルギンの愛人としてここに潜り込んでいる」

「あんたの愛人じゃないのか？」

「私の？ 違う、彼女はヴォルギンの愛人だ。私の愛人は……」
「これは？」

ソコロフが取り出して渡した写真を見たスネークが問う。

「家内と娘だ。アメリカにいる」

そう言われ、その写真を見ると確かにソコロフらしいスーツ姿の男と、二人の女性が写っている。一人は椅子に座った妻らしき黒い服の女性。もう一人はソコロフとその妻の間に立っている、ソコロフの腰ほどの背丈の娘らしい女の子だ。

「そうだ、あんたの家族はCIAが保護している」

写真を返すスネーク。ソコロフもそれをしまう。

「タチアナとはいつから？」

「ほんの数週間前だ」

「バーチャスミツシヨンの数日前？」

「あの女はフルシチヨフが派遣したスパイだと言っていた」

「何を渡した？」

「シャゴホツドの実験データの全てだ」

スネークの左肩に手を置くソコロフ。

「必ずシャゴホツドを破壊してくれ。大切なことだ」

「ああ、だがまずはあんたの安全を確保する」

もうフェイズ2の調整が終わったというのなら、彼もまた危険に晒される可能性が高い。今度はスネークがソコロフの右肩を軽く叩くように手を置く。しかし

「……いいや、私は行かない」

スネークの手を退ける。

「俺の任務はあんたを助けることだ」

「いいんだ」

「ソコロフ！」

「フルシチヨフも私を見捨てた。国へはもどれん。シベリアの強^グ制^ラ」

収容所送りだ」

「アメリカへは？」

「一時はそれも考えていた。家族もアメリカにいる。しかし、アメリカに逃げたとしても……私はまた新たな殺戮兵器を創る羽目になる。何処に行こうと関係ない。私は兵器開発者……正直、疲れた……」

目と額を覆うように両手を顔にやるソコロフ。声も既に、疲れ切つて生気の消耗を感じさせる。その顔にやった腕をだらりとおろす。「使われてはいけない兵器、存在してはいけない兵器を毎日開発している。毎日、寝ずに……誰に褒められることもない。人の為になるものでもない。政治に利用されるだけだ」

スネークの背に向かい振り返り言ったソコロフ。その瞳には、悲しみと後悔があふれている。

「私は純粹に宇宙ロケットをつくっていたかった……だがそれも不可能だ。米ソの宇宙競争も政治の申し子、宇宙競争も軍備競争も同じだ。ミサイルもロケットも変わらない。科学者はいつも利用される。家族を頼む」

そんな、沈痛な雰囲気の二人の耳に、この部屋のもう一つ向こう側、つまりスネークの入ってきた扉が開く音が入ってくる

ソコロフとシャゴホッド（後書き）

ミサイルサイロ：大型ミサイルを格納する建造物で、穀物を貯蔵するサイロに由来すると考えられる。特に、地下式の物は至近の核爆発に耐えうる構造である。

科学者はいつも利用される：MGS1でオタクコンが言ったセリフ。お互い、メタルギアシリーズでのメインの一つとなる「核兵器」を射出する「単独行動可能な核搭載戦車」つまりメタルギアやシャゴホッドを設計した、似た者同士。自身のしていることに罪悪感を感じる、自身の才ゆえの状況とのジレンマに悩む。そして、両者とも自身の作った兵器による被害を知るがゆえに、「スネーク」に力を貸し、借りて、ともに戦っていく。

グロスニイグレードと拷問（前書き）

今回はいつもより更に残酷な表現が書かれています。そういったものが苦手な方は、今回の前書きに軽めではあります但し話のあらすじがわかる分を用意いたしますので、この話を飛ばしてお読みください。

グロスニイグラードと拷問

この部屋の扉が開く直前、スネークはマスクをかぶり終え、かぶり忘れていた帽子をかぶる。扉が開き、入ってきたのはヴォルギン大佐。

「少佐、ここで何をしている？ 部屋で待っていたんだぞ？」

薄い笑みを浮かべつつ言うヴォルギン。まさか、既にばれているのだろうか。しかし、変にボロをだすわけにもいかないため、とりあえず敬礼でごまかしをかけるスネーク。構わず大佐は近づき、再度スネークは敬礼を整えるように顔を上げる。

ふん、と小さく笑みを漏らした大佐は、いきなりスネークの股間を握る。思わず呻きを上げるスネーク。大佐の腕を退ける。視線がぶつかり合う。再度大佐の右手が股間を握る。押しのけられるスネークに対し、大佐は確信と怒りの表情を見せる。

「お前は誰だっ！」

まさかとは思いが、今が確認だったのだろうか、などとスネークが考える。

「とぼけなくてもいい。騙しとおせると思ったか？」

ソコロフに視線を移す大佐。ソコロフが背を向け、再び視線はスネークへ移る。2m近い巨体が、少なくとも180はあるスネークを見下ろしている。

「少佐のことは誰よりもよく知っているからな……タチアナがここに来たと聞いてきてみれば……」

スネークに背を向け、靴音を立てつつ数歩を歩く。

「こそ泥がいたとは」

一瞬の間を置き、振り返りざまマカロフがスネークの眼前に突き付けられる。ほんの少しの睨み合いの末、二発銃声が響く。撃たれたのはソコロフの両膝辺り。悲鳴を上げてソコロフが倒れる。次いでスネークの首元にマカロフが突き付けられるが、CCCで即座に

対応する。腕をとり重心を崩して投げたと同時に、奪い取ったマカロフを向ける。呻きを上げて倒れた大佐に注意を向けていたスネークだが、突如背後で聞こえた扉の開く音に視線を向ける。

視線の先にいたのはザ・ボス。既にこちらを掴みかかると左手を伸ばしてくる。その腕を同じく左腕で受け止め、絡め取る様にしてナイフを弾く。しかしその左腕は逆に絡み取られ、マカロフも同じく投げ飛ばされる。次いで左腕を取られ、そこを支点に一回転させられ背から地面に叩きつけられるスネーク。すぐに寝たままの体勢から左脚を蹴りあげ、それを防いでできた隙に立ち上がる。繰り出された右足をかわされ、拘束されそうになったのをかわし後ろに回り込むスネーク。そのまま同じく拘束に持ち込もうとするが、スネークの顔をザ・ボスの左の手の甲が殴りつける。

一度二歩分ほどの距離を置き、対峙する両者。先に動き、掴みかかったスネーク。しかしそれを逆手にとられ、膝を折られ拘束される。つま先だけが地面につき、右腕と左肩を抑え込まれて倒れることも起き上がることもできない。

「その格好はなんだ？」

左手をスネークの顎にかけると同時に、強い語気で問うザ・ボス。「長く自分を偽ると浸食される。常に自分を見失わないことだ」
マスクが剥がされ、隙なく左手はスネークの右肩を捕らえる。

「手を出すな！」

大佐が起き上がり、スネークに銃を向けたが、ザ・ボスは仲間であるはずの大佐を容赦なく投げて止める。一瞬と言うべき速さで倒され、スネークもその際に支えを失い倒れる。この場に立っているのは、ザ・ボスだけだった。

ソコロフが力なくぐったりとしている中、ほこりを払いつつ大佐が立ち上がる。

「さすがはザ・ボス……これはジュウドーの一種か？」

最後には含み笑いでもしているかのように尋ねる大佐。どうやら、

彼も伝説の英雄であるザ・ボスには一目置いていらしい。

「いや、CQCと呼んでいる……接近戦での基本だ。私とこの男で編み出した」

そう言つてザ・ボスは視線をやつと四つん這いのようになつていくスネークに向ける。CQC……クロース・クォーターズ・コンバットは、今現在使えるのはザ・ボスとスネークだけ。ナイフ、徒手空拳を主体とした、まさしく銃器すら使えない状況下においての接近戦での基本。スネークには知る由もなかったことではあるが、ザ・ボスが捕虜捕獲作戦スナッチミッションの際に、銃声を聞かれて色々と厄介なこととなるのを防ぐべく考案した、無音で敵を無力化するものが原型となっている。それを、最後の弟子であるスネーク、いや、ジャックと共に完成させたものが今のCQCだった。

「見事なものだ……あとは私に任せてもらおう」

「殺すのか？」

「当たり前だ」

自らの体に電撃を走らせながら、スネークの襟首をつかみ引き上げる。

「だがその前に……イワンの苦しみを償ってもらおう」

右手に一層強く走る電撃。腹と顎に両拳が喰り、スネークが血をふきだす。口の中でも切れたらしい。よるけて後ろに一步下がったスネークに、容赦なく更なる連打を浴びせる大佐。

幾度となく殴られ、既に顔が血で赤くなつてしまつているスネーク。ザ・ボスは無言でその部屋を出る。扉をくぐつたすぐ左には、壁に寄り掛かつたオセロットが愛銃を指で回していた。視線をそらすように、ザ・ボスはもう一枚の扉をくぐり出ていく。

大佐の強烈な拳を何度となく食らい、ついに両足のみでは立つこともできなくなる。それでも、力を籠めて立ち上がるうとする。が大佐はそれを愉しむかのように首筋に握りこぶしを落とし、完全に地に倒れ伏してなおもがくスネークを持ち上げる。

再び殴りつけ、頭突きを見舞い、対するスネークは既に一人では立つこともままならない。一度突きはなし、背を向ける大佐。力をため、今にも倒れそうなスネークの額、バンドナに拳がめり込む。頭蓋骨が変形しかねないほどの威力を持ったそれは、完全にスネークの意識を奪う止めとなった。

「言え!？」

「やめて!」

スネークが意識を取り戻したと同時に、大佐のものらしい怒号が耳に入る。次いで殴られたソコロフが悲鳴を上げ、EVAが制止を試みる。スネークの視界は黒一色で、何も見えない。息を吸い込むとビニールらしきものが張り付き、妨害してくる。そのビニールが自分の頭部を覆っているらしいことと、これが拷問の一工程、呼吸の制限による苦痛を与えるものと気付くのにそうそう時間はかからなかった。

「誰と連絡をとっていた!？」

「何も知らないのよ!」

再びの怒号、そして殴りつける音と悲鳴。EVAが止めに入る。それでもなお殴り続ける大佐。

「いい加減に吐け!」

「もうやめて!」

三度怒号、殴打、悲鳴、制止……ソコロフは非戦闘員、いや、た

だの科学者だ。スネークだからこそ数十発も食らってようやく意識を失うほどだったが、ソコロフでは本当に一発一発が死につながりかねない。

「フルシチヨフの犬は誰だ？」

「ひどいわ！」

「データを渡したんだろう!？」

「彼はそんなことしてない！」

ソコロフの悲鳴は弱々しくなる一方。ついに大佐は電撃を走らせ、ソコロフを殴りつける。ドラム缶か何かが、けたたましい音を立てる。

「……ひどい」

EVAが呟いたのも聞かず、大佐はなおソコロフを痛めつける。もう、ソコロフからは悲鳴すら聞こえてこない。ククク、と薄気味の悪い笑いを浮かべる大佐。

「……死んだか」

後悔の念もなく、また聞き出せた情報がないことに落胆も見せない。快樂の為だけにやったといわんばかりの口調。EVAがすすり泣く声が聞こえ、次いでドアが開いた音と、何かを引きずっていく音が聞こえた。ソコロフの遺体だろうか。

自分の方に足音が近づいてくる。目の前で止まったらしい。

「さて……お前はもつと楽しませてくれるんだろうな？」

笑みでも浮かべていることが容易くわかる。そんな口調で言う大佐。

「その前に、体を検めさせてもらおうか」

そういつて、気配が自身を観察しているのが分かる動きを感じる。「綺麗な体だな。無垢な子供のようだ……だがそれも今日までだ。では始めるとしようか……」

気合の声と共に、自身の体を激痛が襲う。

「お前の狙いはなんだ？ シャゴホッドか!？ ソコロフか!？」

それとも『遺産』か！？ 言え！ 貴様の仲間は？ 誰が手引きしている？」

「一つ質問をするたびに殴りつける大佐。

「タフな男だ……だがいつまで持つか。まだまだ終わらんぞ」

大量にバケツに入った水をスネークにぶつける大佐。ここから拷問の本番であるかというように、大佐は疲れを見せない。

「さあ、そろそろ本気で行くか？」

体中を蒼い稲妻が駆け巡る。

「私の体は1000万ボルトの電圧で帯電している。こいつはどうだ！」

左手をスネークに向ける大佐。同時にスネークに幾筋もの電撃が飛び、スネークの体を駆け巡る。あまりにも強い電撃に絶叫するスネーク。大佐が電撃を一時止める。スネークの体が湯気とも煙ともつかぬものを立ち上らせる。

「さあ、吐けっ！ CIAアメリカは何処まで知っている？」

首を振るスネークを見て、大佐は左手に力を籠める。再び放たれた電撃に叫ぶスネーク。オセロツトが僅かに視線をそらす。

「私の『遺産』が目的だろう？」

三度電撃。スネークの体が悲鳴を上げる。

「お前の目的はまさに『賢者の遺産』だろう？」

今度は両手から電撃を浴びせる大佐。先程よりも激しく強い電撃に、スネークのあげる叫びも大きくなる。電撃を止められても、スネークの体を僅かに稲妻がはい回る。そのスネークを見て、オセロツトは静かに胸に下げられたキーチェーンでつながれた一発の弾丸を握りしめる。その弾丸は、以前スネークを殺し損ねたそれ。以来、わざわざシングル・アクション・アーミーで撃てるよう、薬莖を入れ替えたそれを常に持っていた。

スネークのズボンがシミを作っている。あまりに強い電撃で失禁してしまっただ。それをみて、大佐が嬉しそうにスネークの周囲を歩きながら解放を促す。

「そうだ、そうだ。自分を解放しろ。その調子だ」

丁度大佐がスネークの周りを一周する頃。突如電子ロックの扉が開き、拷問室にザ・ボスとタチアナが入ってきた。

「無駄だ。そいつは口を割らない。そう訓練されている。私が訓練したんだ」

大佐はその言葉に明らかにイラつきや怒りを覚えたらしい顔に変わる。それでも拷問を止める気はないらしい。

「言えっ！ 『遺産』の在処だろう！」

今度は拳を直接当て、パンチと電撃を両方浴びせる。

「二度の大戦を通じて三大国が出し合った秘密資金だ！ それが

貴様の目当てだろう！」

今までよりもなお強い語調で問いただす大佐。タチアナは見えないというように顔をそむけている。再度電撃を纏った拳がスネークを襲う。

「世界中に分散して隠された1000億ドル！ その全ての記録だ！ それに欲しいんだろう！？」

スネークに電撃と拳の連打を見舞いつつ、大佐が更に語気を強くして問う。もはや、彼の理性はないと言ってもいい。そのあまりにも惨い光景に、ザ・ボスも僅かに顔をしかめ、スネーク達を直視していない。

「そうとも。『賢者の遺産』は私が守っている。このグロズニイグラーの地下金庫でな」

あろうことが自分から喋ってしまったその極秘機密に、思わずタチアナとザ・ボスが顔を合わせる。

「貴様ごときに手は出せん！」

そういいながら、スネークを突き飛ばす大佐。腕を天井からつられている体勢のスネークは、そのまま足がついていないため踏ん張

りもきかず振り子のように後ろへと飛ばされる。そして戻ってきたスネークを待ち構える、大佐の全力の拳。今までで一番大きな叫びが部屋に響く。その様を、タッチアナは顔をそむけて見ることが出来ない。

ふと、そんなスネークの足元にポロリと何かが落ちた。

「これは？ 発信機……」

拾い上げた数cmのカプセル状のそれ。大佐はすぐにその正体に気が付いた。

「誰だ？ こんなござかしい真似を」

周りを見渡す大佐。オセロットは両手を肩の高さまで上げて否定の意を表し、視線がタッチアナに移った時

「私よ……」

名乗り出たのはザ・ボスだった。

「こいつの動きを知るために私が付けた」

「なぜ？」

大佐は発信機を後ろに投げ捨てながら尋ねる。オセロットが器用にそれを腕を伸ばして捕まえる。

「コブラ部隊が待ち伏せするためだ」

「コイツの動きが分かっていたなら、全滅しなかつたはず」

顔を僅かに下げるザ・ボス。そんなザ・ボスに大佐は背を向ける。「ボス。疑うわけではないが、状況が状況だ。あんたがこいつとゲ

ルではないという確証が欲しい」

「私を疑うというのか？」

一転、強気に大佐に歩み寄るザ・ボス。大佐はたじろぎ、彼女を何とか制する。

「いや……こいつはあんたの弟子だ」

「どうして欲しい？」

「そうだな。眼を抉れ」

スネークの前に立ち、宣言する大佐。その宣言に、全員が大佐に

驚きの目を向ける。

「そいつの、その青い眼が気に入らん。兵士にとって眼は大切だ。師匠として弟子の兵士生命を断つ……それもいい、感動のエピソードだ」

先程とは打って変わり、新しい遊びを見つけたように愉快そうに言う大佐。ザ・ボスは未だ悩んでいるらしい。かつてのとはいえ、最後の弟子。愛情を注がなかったと言えはうそになる。そんなスネークの眼を抉るといふのは、伝説の戦士たる彼女であつても辛いことに変わりはない。しかし、果たさねばならぬことに変わりもない。「さあ！ やれ！」

そんな大佐に、その向こうにいるタチアナに視線を送るザ・ボス。しかし彼女にできることもない。視線をそらし、ザ・ボスもその意を了解して俯く。

「コブラ部隊がやられたんだぞ」

その言葉に、彼女は顔を上げる。ほんの少しだけ大佐に視線を送り、ついに左胸に刺してあるナイフを右手で抜き、スネークに歩み寄っていく。彼女にとって、コブラ部隊もまた愛するべき存在。それが、彼女を後押ししたらしい。

「！」

顔だけではなく、体ごと背を向けるタチアナ。それをオセロットが無理矢理体を戻すが、腕を振るって無理矢理振り払われる。

黒い袋を取り払われ、スネークは息を吸い込む。荒い呼吸は、左目の目の前に突き付けられたナイフの切っ先で更に速くなっていく。今まさに、スネークの左目にナイフが突き刺さるその瞬間

「やめて！」

そのザ・ボスのナイフを持った左腕を抑えたのはタチアナだった。「なんだ？ ターニヤ？」

まるでそれすらも楽しむかのように大佐が尋ねる。対するタチアナも、怒りが満ちていたらしい。

「酷すぎる」

「これは、これは……なぜかばう？」

オセロットがそう問うと、タチアナは目をそらす。そんな彼女の首筋辺りで、突然オセロットが鼻を嗅ぎ出した。

「この臭い？」

オセロットはその臭いにある疑問、いや確信に近いそれを持ち、タチアナを引き寄せる。

「タチアナ。おまえがスパイだな？」

「なんの事？」

答えることなくオセロットは再び臭いをかぐ。かいだことのあるその臭いに思考を巡らせ、突然彼女の胸を触る。途端、乾いた音が辺りに響いた。

「やめて！」

左頬を叩かれ、その場所が赤くはれている。

「オセロット、ターニヤが欲しいのか？」

会話を聞いていなかった大佐が、からかうように持ちかける。

「いえ、この女に興味はありません。試してみたいのです」

そういつて取り出したのはシングル・アクション・アーミー。一発のみ銃弾を込め、左腕で弾倉を走らせる。

「こいつに判断して貰います」

「好きにするがいい」

「行くぞ！」

見物を決め込んだ大佐。オセロットは更に2丁取出し、以前ソコロフに行ったようにジャグリングの要領でシャッフルし始める。

一回。二回。三回

銃口を突き付けられ引き金を引かれる

たび、タチアナは怯えるように縮こまる。一歩ずつ互いに距離をとり、つめる。そして一丁のリボルバーが宙に放られたとき、それに実弾が入っていると見切ったスネークはオセロットに体当たりを敢行した。手が滑ったオセロットの放った弾丸はタチアナには当たらなかったが、マズルフラッシュがスネークの右目を破壊する。轟く

悲鳴、それにタチアナは顔を覆いながら小走りで部屋の隅へ逃げ、ザ・ボスはオセロットを振り向かせ左頬を叩く。

「これで思い通りになったか？」

オセロットは黙っている。その中、大佐が口を開いた。

「気分直した。私の部屋へ……来いっ！」

タチアナに出口を出る際に言い放ち、そのまま部屋を出ていく大佐。オセロットが銃をしまい、スネークに歩み寄る。スネークの背中を思い切り殴りつけ、それにスネークが悲鳴を上げる。拳を引き抜くように離すオセロット。いや、事実傷が出来ていたそこは、彼が拳を話した途端更に血が噴き出した。

「大佐の拷問に耐えたな」

言い終わると、ゆっくりと拍手をする。

「耐え抜いた奴を見て初めてわかった」

拍手を止めるオセロット。その表情は、どこか嬉しそうだ。

「……悪くない。究極の表現法だ」

排水溝の上を通る鉄格子の上に落ちたシングル・アクション・アーミーを拾い上げるオセロット。その左にはタチアナがいた。オセロットは頬を擦りながら彼女に言う。

「命拾いしたな、タチアナ」

そのまま銃を指で回しながら出ていく。見届けたザ・ボスはスネークの前に立ち、シングル・アクション・アーミーを取り出して一発の銃弾を込める。それをスネークの顔に突き付ける。そして左の腿に銃口を向け直し、火薬が炸裂する音が響く。

シングル・アクション・アーミーをスネークのベルトに差し込み、真正面に立ったザ・ボスが何かを語りかけてくる。聞き取れはしなかったが、最後になぜか「逃げて！」と言ったのはわかった。

ザ・ボスも出て行つたのを確認したタチアナ……いや、EVAが泣きまねを止め、スネークに近づき左手で右の頬に触れる。顔を近

づけ、耳元で呟き始めた。

「脱出路を用意したわ。ここを出て西へ向かって。それから渡り廊下の下をくぐって北へ行くのよ。マンホールが開けてあるわ」

「君は……」

「黙って」

正体に気付いたスネークが話しかけるが、それを遮られる。

「マンホールから下水道へ降りて。下水道の北の扉が開けてあるからそこから要塞の外へ出られるわ。装備も私が回収してある。後で合流しましょう」

「EVA……」

「でも私は独房へは近づけない。脱出は何とか自力で……」

そこまで言って、彼女は扉の外に立った人の足跡を察知した。

「また連絡する」

そう言つと、彼女は独房を兵士2人に構うことなく歩いて出ていった。スネークに敵兵が近づいてくる。しかし、スネークの視界は既にゆがみ始めていた

牢屋と……（前書き）

前回のあらすじ：部屋へ入ってきたのは、運悪くヴォルギン大佐だった。ヴォルギンはソコロフの両膝を撃ちぬくが、その隙にスネークが反撃、武器を奪い圧倒的優位に立つ。しかし、その直後に入ってきたザ・ボスに襲われ、反撃を試みるも拘束、変装マスクをはがされてしまう。

その後、ライコフ少佐の苦しみを味あわせる、と痛めつけられたスネークと、両膝を撃ちぬかれていたソコロフは意識を失い、スネークが目覚めた時には拷問部屋であった。その部屋で先に拷問を受けたソコロフであったが、あまりにも容赦のない、まるで殺しを目的としたそれに耐えきれず、ついに死亡してしまふ。その後スネークも拷問をうけ、その途中大佐はつい『賢者の遺産』の在り処をこぼしてしまつた。

大佐の拷問終了間際、タチアナがスパイという疑惑を抱いたオセロットのロシアンルーレットをスネークが身を挺して止めたが、その際手先が狂つたオセロットの弾丸はスネークの右目に被弾してしまふ。それを境に拷問は終了したが、去り際にザ・ボスはなぜか「逃げる」と伝え、オセロットから取り上げていたシングル・アクシヨン・アーミーに一発弾丸を装填、スネークの左ももに撃つ。最後にタチアナが残り、スネークに北西のマンホールを開けてあると伝え、何とか脱出するようにと伝えた。そこで敵兵が来たことに気づいて出て行った彼女を見送り、逆に入ってきた敵兵を見た直後、スネークは意識を失つた。

牢屋と……

スネークが意識を取り戻した時、一番最初に目に入ったのは黄色の格子だった。状況を理解するのにそうそう時間もかからない。牢屋だ。その格子の向こうには、目出し帽にJと大きく刺繍された兵士が見回っている。

「食事だ」

こちらが起きたことに気付いているらしい。格子の右にある部分が扉になっているらしく、その一部分は物を投げ込んだりできるように少し格子がなくなっている。無論、そんな場所から脱走は望めそうにないが。そんな穴から、看守が食べ物を投げ込んできた。中はチスイコウモリ。スネークは無言でそれを見つめ、投げ返す。

「いらぬのか？」

その投げ捨てられたチスイコウモリを拾い上げた彼は、そのまま食べてしまった。大丈夫だろうか、つまみ食いなどして。

そのまま彼は再びこの狭い収容所内を巡回し始め、スネークは牢屋内に落ちていたフォークを拾い上げる。それで近くにいたネズミを捕獲し、有り難く食べる。先程のチスイコウモリは、明らかに骨と皮が大部分で、食べるような部分はほとんどなかった。それに比べて、このネズミはかなりウマイ。そのネズミを食べつくした後、スネークは自分の持ち物を確認し始めた。武器類や装備品は取り上げられたらしいが、なぜか医療品や無線機は残っている。

スネークは無線機のスイッチを入れ、少佐に無線をつないだ。

「スネーク！」

「……少佐」

「無事だったか………」

「無事とは言えないな……だが何とか生きてる」

「よかった………」

パラメディックが安堵の声を漏らす。彼らは同じ場所にいるからだろう。

「しかし武器も装備品も取り上げられてしまった」

「だが無線機と治療品はそのままだな」

「ああ」

「なぜかしら？」

「まだ君に用があるのかもしれんな」

「ああ。俺も奴には用がある」

「スネーク。何としてもその独房を脱出するんだ。方法は必ずある。よく考えろ」

そう少佐は言っ、無線を終えた。スネークは次に、EVAへと連絡を取る。すると、彼女は既に新たな情報を手に入れていたらしい。

「スネーク、いい知らせがあるわ」

「なんだ？」

「ヴォルギンはしばらくの間、あなたを殺すつもりはないそうよ」

「どうして？」

「もっといたぶるためだとか」

「それはいい知らせだな」

「ええ。それだけ脱出のチャンスも増えるってことだから……」

「わかってる」

「とにかく、ヴォルギンはあなたを生かしておくよう命令を出したわ」

「だから看守が治療アイテムをのこしていたり食事を持ってきたりするわけか」

「そういうことね。もしあなたの身に何かあったら、その看守はヴォルギンに殺される……使えるかもしれないわね、それ」

そう言った後、EVAは話題を変える。

「スネーク、ひとつ確かめたいことがあるの」

「何を」

『ヴォルギンの拷問部屋でオセロットが弾を撃とうとしたとき、何故私をかばってくれたの?』

「あのまま引き金を引かれたら君が死ぬとわかっていたからだ」

『だけどおかげで、あなたは眼を』

「拘束されていた上、とつさのことだったからな。あれが精一杯だった。多少違和感はあるが任務に支障はないだろう」

『私も?』

「?」

『私が死んだら、任務に支障が出るから助けてくれた?』

「他に理由はない」

『じゃあ任務が終われば?』

「今は任務だけだ」

『昔愛した『任務』だけ?』

「そういう意味じゃない」

そう言って、彼らはどちらからともなく無線を切った。

スネークは痛む体を思い出し、先程の会話で右眼を怪我していることを思い出す。そんな中、スネークはパラメディックから無線を受信した。

『スネーク、あなたの右眼のことだけど……』

「ああ」

『角膜と水晶体が激しく損傷しているの。眼球破裂も起こしてるわだから……』

「今もってる治療品でも治せない」

『ええ……ごめんなさい。力になれなくて……』

「心配するな。まだ戦える」

『でしょうね。だけど、くれぐれも無理はしないで。今のあなたは右側がかなり見えにくくなっているわ。銃を使うときも今までとは少し勝手が違うはずよ。気をつけて』

そんな彼女の忠告を区切りに会話が終わる。スネークは密かに、

小さくため息を吐いて、先程の……という時間かは分からないが、拷問で受けた傷を治療すべくバツクパツクの各種治療品を取り出した。細かい傷などは今回は無視し、太腿に撃ちこまれて貫通しなかったザ・ボスに撃たれた弾を、先程拾ったフォークで取り出す。ナイフではないためかなり傷むが、こればかりは仕方がない。そして続けざまに、オセロットに殴られた部分を器用に治療する。すると

「これは……仮死薬？ それと発信機か？」

ザ・ボスに撃たれた部分からは仮死薬が、オセロットに殴られた部分からは発信機が転がり出てきた。オセロットの発信機はいいとして、なぜザ・ボスは仮死薬など撃ちこんだのだろうか。だが、これがあれば、死んだフリができるはず。先程のEVAのいう情報が本当なら、脱出できるかもしれない。だが、その前に武器がない。仮に騙せたとしても、そこからが問題だった。

「ほら、食べ」

二度目の食事が投げ込まれる。今度はギンガメアジだ。こちらあまり食べられる部分はないし、何より先程食べたネズミのおかげで、腹に問題はない。再び窓から放り投げると、やはり彼はそれに食いつく。

「おっ悪いな」

ギンガメアジを食べ終えた彼は、しばらくこちらの様子を見た後、巡回に戻る。彼の動きからして、他の収容者はいないようだ。巡回は丁度目の前にあるT字状の通路を曲がり、その突き当りの右にある扉が部屋につながっていて、そこが一週の間安らしい。時折くしやみをしたりしながら巡回する彼を、どうにか出し抜けないかとスネークは考えていた。

今ある持ち物と言えば、治療品に無線機、それからフォークと、弾が全くないシングル・アクション・アーミー、そしてそのシングル・アクション・アーミーで撃たれた際に入手した仮死薬位。正直、ここを出ることはできようが、武器がフォーク位しかないのでは脱走後が厳しい。

仕方なく、とりあえず怪我が少しでも治ることを待つことにしたスネーク。先程よりもさらに冷え込んできて夜になったと気付いたころ、看守が再び巡回ついでに食糧を持ってきた。

「ほら、食事だぞ」

心なしか一回目よりも柔らかい口調の彼が投げ込んできたのは、少し大きすぎる気がするアマガエル。そういえば、こちら辺は核実験があつたと聞くから、その影響だろうか。そのアマガエルも、普通より大きいとはいえ食べられる部分などほばないに等しい。最低限の食料のみ、ということかもしれない。スネークはやはりそのアマガエルも投げ、そしてやはり看守もそれを拾う。

「いつも悪いな」

そんな彼は、今回に限っては巡回に戻らず、銃を下げてこちらに寄ってきた。

「おまえ、いいやつだよな。本当、アメリカ人の中にはいいやついるよな」

「そうか？」

「そうさ」

声をかけてきた看守に、スネークも近づいて答える。

「実は俺、戦争が始まる前はアメリカに住んでたんだ。結婚もしてた。子供も……」

「寂しいな」

「ああ。寂しい……すげくな」

「子供の名は？」

「ジョニー」

「いい名だ」

格子に左肘をかけたまま、右手でグッドサインをつくるスネーク。そのスネークの反応に、看守も喜びを見せる。

「そうか、良い名前か……あんたが言うんだからそうだろうな。実は俺もジョニーだ。うちは代々、長男にジョニーとつける。だから親父もジョニーだし、息子のジョニーの息子もジョニーだろう」

「ジョニー一族か」

看守、いやジョニーは、懐から写真プレートを取り出す。息子の写真らしい。ふと、スネークは裏に何か数字が書いてあることを見つけるが、その数字が何かは分からない。ジョニーは覆面のせいでよくわからないが、少し涙ぐんでいるようだ。

「どうして冷戦なんだろうな……俺達がつきあってた頃は仲良くしてたのに」

「そうだな」

「ああ、家族にあいたい……」

「辛いな」

「ああ……だけどあんたほどじゃない。ほら」

ジョニーが何かを差し出してくる。小さな銀色のケースに収まっているのは、以前グラニー・ゴルキーでたまたま見つけた麻醉タバコらしい。当時は見つけただけで拾えなかったのだが。

「あんたの装備から大佐に内緒でくすねたんだ。返すよ」

自分の装備から受け取った、ということとは、その前にEVAが入れてくれたのだろうか。そう考えつつ、スネークはそのタバコを受け取る。

「俺がしてやれるのはこれくらいだ……」

「ここを出してくれないか？」

スネークがダメ元で言ったのを聞いて、ジョニーは我に返る。

「ん？ それはダメだ。おい、逃げ出そうなんて考えないでくれよ。そうしたら俺はあんたを撃たなきゃいけない」

そう言って彼はぶら下がっているAK-47を持ち上げてみせる。
「ちよつと話過ぎた。じゃあな」
そう言って、彼はまた巡回へと戻っていった。

どうやら普通のタバコと勘違いしたらしいジョニーから麻醉タバコを受け取ったスネーク。とりあえずこれがあればいくらか脱出も楽になるだろう。スネークは痛む体をどうにかするため、寝ることにした。パラメディックへと連絡を入れる。

「スネーク？」

そんなパラメディックの呼びかけに、直前に口の中に鉄のような味が広がり始めたスネークが返したのはうめき声だった。

「スネーク？」

「喋ると口の中が痛む」

「切れた？」

「芝刈り機を押し込まれたようだ。気の紛れる話を頼む」

「スネーク、レンフィールドって知ってる？」

「映画か？」

「登場人物よ。彼は独房に閉じ込められて、ご主人を待ちつづけているの。壁を這う蜘蛛を食べながら」

「チャンネルを変えてくれ」

「待ちわびて、自分が人間かどうかも忘れてしまった頃、ついにご主人様が迎えに来てくれるわ。「時は来た」って彼は喜ぶの」

「待て、まさか……」

「ご主人様は大きな翼を広げ、独房に風を送り込む」

「やめる、そいつは……」

「そして人間に姿を変えるとレンフィールドの前に立つの」

「そいつはドラキュラじゃないか……！」

「正解。スネークも長居すると大好きなドラキュラが迎えに来ちゃ

うわよ。何とか手段を講じて、そこから逃げ出して』

「……………」
『あなたと喋れなくなるなんて嫌よ』

「……………」
『お願い、頑張つて。必ず出る方法はある』

「……………」
『わかった』
『じゃあ、ドラキュラが夢に出てきたら教えてね』

「……………」
スネークの無線が切れると、彼はこの後に自分を襲つてあるう出来事に軽い恐怖を覚えつつも、独房内にある硬くはあるが掛布団と枕がそろったそれなりのベッドに横になる……………わけではなく、腰掛けるようにスネークは眠りについた。

牢屋と……（後書き）

チスイコウモリ：チスイコウモリ科チスイコウモリ属に属するコウモリ的一种。その名の通り吸血性があり、主に南米などに生息する。ヒルなどと同じく、血液の凝固を妨げる成分を含む唾液を使用する。ただし、寝ている間にかまれることが多く、牙の切れ味が良いため、あまり痛みを感じにくい。親指の発達や後肢の力強さで、コウモリの中では例外的に歩行が得意。ヨーロッパなどで生まれた吸血鬼のモデルになったが、前述のとおり南米に生息しているため因果関係は直接はない。また、人間を襲うこと自体（難しいため）稀であるし、吸われても到底死に至るような量は吸わないが、家畜を弱らせたり病原菌を媒介するなどのことから害獣ににんていされている。

ギンガメアジ：インド洋・太平洋の熱帯・亜熱帯海域に分布する大型のアジで、海水魚だが若魚は河川の純淡水域までも侵入する。食用にもなる。ただし原作ではスタミナ回復量と味は悪い。ギンガメアジというのは長崎や釣り、スキューバダイビングなどの表記（漢字は銀河目鰯）で、本来は銀紙を張ったような外見から「銀紙鰯」と呼ばれている。食用にはなるのだが、大型のものはシガテラ中毒の原因となる、熱帯で発生するプランクトン（特に過鞭毛藻類）の毒をを多く蓄積しているため、食べない方が安全である。また、この中毒に関してはパラメディックからも聞くことができるが、原作では特に大きなギンガメアジを食べても問題はない。

アマガエル：北半球の南半分以南に主に生息するアマガエル属に属するカエルの一種と思われる。緑色をしており、四肢も発達して

いる種である。本作、および原作では核実験の影響か、かなり巨大化している。ただしウマくもないしスタミナもあまり回復しない。ちなみに、よくアマガエルが泣いたら雨が降る、というのはあながちウソでもない。彼らは大気中の湿気が増えるとよく泣くようになるからである。

両の手に逆手に剣を持ち、迫りくる人間ともゾンビともつかぬ大軍を切り払っていく。縦横無尽に閃く剣閃は、容赦なく大軍のゾンビ達を切り裂き、中には内臓を露出したり体の一部を欠損させた状態になるものもある。

時折混ぜられる蹴り、高速回転を伴った回転切り、空高く跳躍しての斬りおろしも、また容赦なく切り裂き、破壊していく。蹴りは体を吹き飛ばし、そのまま追撃のすきを作る。回転切りは威力の高いフィニッシュと共に、砕かれたゾンビの血の雨を生む。跳躍からの斬りおろしは、もはや直視を阻まれる屍ともい得ないような状態を作り出す。

だんだんと、ゾンビを斬り倒すたびに高揚する心。やがてその心は理性を失い、正しく、見境のない吸血鬼^{ヴァンパイア}へ

「うおおあああつ！」

悲鳴と共にかばりと起き上がるスネーク。夢であったことが分かると、掌の汗を見て生きていることと現実を確認したからか、一つため息をつく。だが、まだ現実感が完璧ではないスネークは、少佐に連絡を取った。

「スネーク、どうした？」

「少佐、今は何年だ？」

「なんだって？」

「……ここは？」

「今は1964年。そこはグロズニイグラードの独房だ。どうしたスネーク、酒樽いっぱいウォッカでももてなされたか？」

「いや……」

「東には98度のウォッカがあるそうじゃないか。英国ではそうい

うものを美酒とは呼ばん。硫酸だ。想像してみる、君の内臓という内臓を溶かした煙が口から出てくるぞ。そんなものに手を出すべきでは……」

「夢だったか……」

『夢？ 結構だ。徹夜で君の身を案じていた甲斐があったよ』

「生々しい夢だった。俺は手に刃物を握っていて……」

『おい、大丈夫かスネーク。頼むから正気を失わないでくれ』

「わかってる。あんたの言う硫酸を、浴びるほど飲んだって無事に生還してみせる」

『頼むぞ。脱出の方法は必ずある』

「ああ。夢でも見ながら知らせを待っていてくれ」

ゼロ少佐と、まるで友人同士のような会話を終えたスネーク。そして、確認することがあるため、今度はEVAに無線をつなぐ。

『スネーク？』

「EVA、ここの奴らは捕虜に幻覚剤の投与を？」

『そういう好みはないと思うけど』

「嫌な夢を見た」

『夢？』

「見たこともない化け物が刃物を振り回して……俺は俺じゃなくなっていた」

『そう。この状況じゃ無理もないわ。痛みと疲労で軽い錯乱状態になっっているのよ』

「ああ……」

『いつかあなたも、自分を隠さずに済むようになるといいわね』

「何だって？」

『気持ち分かるのよ、私もスパイだから。偽りの自分が知らないうちにあなた自身を蝕んでいる。演じているつもりが、あなた自身になっっている。だから本当の自分が、見えないところで悲鳴をあげたのよ。それがあなたの見た夢ね』

「……さあな」

『子守唄でも歌ってあげたいところだけど……生憎ひとつも知らないの。だから頭の中で、好きな曲を歌わせていいわよ』

「どんな歌でも？」

『好きなだけアンコールして』

「楽しみだ」

『じゃあね、スネーク。脱出する方法は必ず見つかるはずよ。頑張るよ』

「ああ」

EVAに確認したかったことも確認し、元気づけてもらったスネーク。そして抗議のために、彼女へと無線をつなぐ。

『スネーク、どうしたの？』

「……どうしたと思う？」

『体調でも崩した？』

「……おかげさまで夢見が良かった。礼を言いたいんだ」

『ああ！ まさか本当にドラキュ……』

「待て！ 興味最高の豪華2本立ては御免だ。生々しい夢だった。人間の形をした、得体のしれない怪物が群れをなして襲ってきた。一体あれは……」

『きつと脅迫症の一種ね、原因はきつと極度の緊張よ。その部屋の外的刺激があなたの……』

「いや、俺の診断によれば原因は、君のピロートークだ」

『だけど、その……はあ。ごめんなさい。まさかそこまで過敏に反応すると思わなかったから。まさかあなたがドラキュ……』

「！」

『……ごめんなさい。今のは本当に無意識だったの』

「……」

『仲直りして、スネーク』

「ああ。もついい」

『本当？』

「ああ」

『よかった。スネーク、そこを脱出する方法は必ずあるわ。頑張つてね』

「任せておけ」

無線を切ったスネーク。部屋の隅に再び来ていたネズミで腹を満たすと、スネークは脱出するべく全力で思考を開始する。主に今分かつていることで脱出につながりそうなことは、自身の持ち物に仮死薬と無線機があること、そして看守はスネークを殺してはいけな
いことと、扉は一定周波数を受けて開くこと。その扉の仕組みについては、グロズニイグレード内で兵士がロック解除を行った際のそれを見てわかった。

スネークが今とれる方法としては、具合が悪い、あるいは死んだフリをするか、周波数を合わせて扉のロックを解除すること。だが、後者の方は明らかに無理に等しい。必然的に、スネークは前者の方法をとることとなる。

「ぐうあああ！」

青酸カリの入ったカプセル、仮死薬を飲んだスネーク。

「どうかしたのか!？」

走り寄ってくるジョニーが、すぐさま異変に気付く。スネークが仮死状態に入っているとは知らぬ彼は、脈をとって死亡を確認した。そのあと、少し戸惑ったようだが、大佐が来るまで待とうとも思
ったのか、そのまま巡回に戻る。その隙にスネークは蘇生薬の効果が出て文字通り生き返る。少し心が痛んだが麻酔タバコで眠らせ、

そのまま脱獄を成功させた。

そんなスネークの無線機が、コール音を鳴らす。その送信主はゼロ少佐だ。

『脱出に成功したのか？』

「ああ。なんとかな……」

『気をつける。今の君は文字通り丸裸だ。ろくな武器も持っていない。戦闘になれば勝ち目は無いぞ。一度体勢を立て直す必要がある。EVAが君の装備を回収しているんだろう？ 早急にEVAと合流して装備を受け取るんだ。EVAの用意した脱出路を使え。グロズニイグロード北西部のマンホールから下水道へ降りるんだ。まずはその収容所を出て、北西へ向かえ』

そんな少佐の指示に、普段であればすぐにも従うスネーク。しかし、今回は……

「少佐、俺はソコロフを……」

『言うな』

「……」

『彼を救出することは出来なかった。だがまだ任務が失敗したわけではない。フェイズ2は完成したという話だったな。もう時間が無い。なんとしてもシャゴホッドを破壊するんだ……それが彼への手向けでもある』

「ああ……」

その言葉に無線連絡を切ったスネークは、行動を再開する。

スネークが北西に行くには、2つほどルートがある。南西部を経由するか、兵器廠前を経由するか、だ。だが、ここと南西部を経由する扉はなく、スネークが気付いていない場所から出入りしなければならぬ。よって、ほぼ必然的にスネークは兵器廠前の厳戒警備の中を切り抜けなければならない。持っているものと言えば麻酔タバコと弾のないシングル・アクション・アーミー、そしてフォーク

位のもの。正直無謀でしかないが、やるほかない。いずれ中のジョーが目覚めるか大佐が来るかで、どの道スネークの脱走はばれてしまう。今動かなければ、既に手遅れになる可能性すらある。

スネークは収容所を出てすぐ、右へと突っ走る。その際左手に敵兵が一人いるが、背を向けた隙をついたため気付かれてはいない。素早くドアを潜り抜け、とりあえずの第一関門は抜けきった。

しかし、本番はここから。最初に潜入した時にはダンボールを使って切り抜けたが、今回はそうもいかない上に体調、装備共に最悪さらに言えばカムフラージュもできない。スネークは右の方に少し走った位置にあったコンテナの影にしゃがんで少しでも見つかりにくいようにしつつ、辺りを伺う。今隠れているコンテナは、目的地とは少し離れてしまった位置関係にはあるが、離れてしまったからこそ視界も広くとることが出来た。

「……多いな……」

ざっと見ただけでも、ほぼ死角はないと言っていい。兵士が振り向いたりといった、ほんのわずかな隙間を、文字通り幽霊のように気配もなく通り過ぎなければならぬ。スネークはその厳戒警備体制の中を、時には麻酔タバコで眠らせ、時には足音すら立てず通り抜け、次々とかわしていく。物陰から物陰へと隠れていくが、やがてコンテナも曲がり角もない、扉まで行くルートにどうしても体を隠せない場所に出してしまう。今までは遮蔽物に身を隠していたから辛うじて進めていたが、今だ敵兵はこちらを視認できる位置にいる上、背後の敵兵もすべてを排除したわけでもない。

スネークはそんな状況下におかれ、ひとつの大胆な行動に出ることを決意した。兵器廠前にあるコンテナに身を隠していたスネークは一気に走りだし、一直線にサーチライトを避けながらその照射元である監視台の真下にあるフェンスにたどり着く。全力で疾走したスネークは、軽く乱れた呼吸を整えつつ、とりあえず成功したことに安堵する。周りを見渡し、敵兵の移動を確認したスネークは、そ

のまま壁沿いに扉まで走っていく。走ればその分見つかりやすくなるだろうが、敵兵が視線を逸らした隙を狙って走ったスネークは見つかることはなかった。やはり赤い、まるで錆びているような色合いのドアをくぐり、目的の北西部へとたどり着いた。

周りを見渡せば、戦車群はやはり動く気配は見られないが、その陰は多く、敵兵の巡回もより重点的に行われるだろう。スネークはなるべく戦車群から離れたところを歩き始める。そのうち、渡り廊下の手前辺り。先程スネークが真下にたどり着いていた監視塔と、もう一つの監視塔に挟まれるような状況になったスネーク。監視塔同士は数十m離れていることから、前者の監視塔の真下を通れば、恐らく見つからないだろう。コンクリートの壁が限りなく真下になっっているため、そのまま張り付いてゆっくりと進むスネーク。丁度サーチライトの光もスネークを隠してくれるだろう。

渡り廊下の下を潜り抜け、スネークの視界にようやく目的地が見えてきた。左奥の方に陣取るフェンスに囲まれたパイプヤタンク。そのフェンスの扉部分が開いており、その奥にパイプに影に隠れているものの四角いマンホールの蓋が開いているのが確認できる。スネークは近くに眠っていた軍用犬を起さないように気を付けつつ、そのフェンスに進入、パイプが横になっていいる部分をホフクで潜り抜け、マンホールの梯子を降りた。

マンホールの梯子を降りたスネークの無線機がcarrier音を鳴らす。梯子から手を放し、無線機のスイッチをいれる。

「スネーク？ もう地下へ……」

「EVAか。ああ。今ちようど降りたところだ」

『…………』

「早く合流しよう。北の扉が開けてあるんだっただな？」

『それが、スネーク…………』

「また問題か？」

『ええ』

「何だ？」

『あなたが脱走した事が大佐にバレたわ』

「そうか、奴等もバカじゃない」

『それで、グロズニイグライド全体が厳戒態勢に入ったの』

「厄介だな。だがここから要塞の外へ出れば…………」

『出られないの』

「出られない？」

『要塞全体が警戒態勢に入って、それで、その地下道も封鎖されてしまったのよ』

「なんだって？」

『そうなの。だから私が用意した脱出路も…………』

「封鎖された？」

『ええ。さつき搜索部隊も送られたわ』

「ここへか？」

『そう。もうそっちへ着く頃よ。早く逃げて！』

「だが出口は封鎖されているんだろ？」

『まっすぐ北へ進めば外には出られるはずよ。とにかくそこに居たら危ないわ。逃げて！　いいわね！』

無線が切れ、スネークは一つ小さくため息をつく。とにかくこの作戦は自分の都合に悪い方向へと進んでしまう。仕方なしにスネークは梯子を降りた階から下の下水道の部分へと降りるべく、梯子を正面に見て左手にある階段へ向かう。二階層ほど降りると、左手に一段小さな段差を降りたところは既に下水道として機能する水路だった。その水路を北、水の流れていくのと同じ方向へと進む。

しばらく進むと、スネークの前に格子が現れる。流石にこの格子の間を通ることもできそうにない。辺りを見回すと、段差を上った通路に穴が見える。人工的に故意に作られたようなその穴の先に進むと、明らかに格子を越えた先まで通路がある。その突き当りまで行き、右に曲がって通路に戻ろうとしたとき

「！」

スネークの近くで、獰猛な犬の鳴き声が聞こえた。振り向けば、その突き当りにあった格子の向こうに軍用犬がいた。武器を持っていないスネークは舌打ちし、とにかく逃げるべく、ホフクして穴を潜り抜ける。穴から出て、対岸側の段差をみるが、少し先にある、凸状に飛び出ている階段でも使わない限りは登れそうにない。後ろに先程の格子があったことを確認し、スネークは走ってその階段を目指す。段差の通路に沿って登るように作られた階段を上り、再び前方に見えてきた格子を迂回するべく、穴を探す。自分の足元にあったそれをくぐり、自分の右側、つまり進行方向の後ろ側にあった格子の向こうにやはりいた軍用犬を確認すると、舌打ちと共にスネークは走り出す。突き当たったところを曲がって穴から這い出すと、後ろから多数の人間の足音、そして先程からいた軍用犬の足音が聞こえる。軍用犬の足音は既に人間のより近い上に、速い。スネークは全力で走り出す。

前方に日の光が差し込んでるのが見えた。白く輝くその出口と思わしき場所。水音が自分のほかに、既にかなりたくさん追いかけてきている。GRUの一般兵だけではない。あのオセロット率いる山猫部隊の隊員達もまたおいかけてきていた。軍用犬の吠える声がトンネル状の下水道に響く。後十数mでスネークに追い付こうかという時、スネークは出口にたどりついた

が。

前方に広がったのは空と山。体が前傾し、その際に見えたのは遙

か下まで落ちてゆく滝のような下水。落ちる寸前でスネークは何とか踏みとどまる。腕を振り回してどうにか一歩後退したスネークが振り向くと、追い付いた兵士達が銃を向け、犬は低く唸って威嚇している。その向こうから、ゆっくりと歩く足音が聞こえてきた。オセロットだ。兵士が道を開け、スネークとオセロットが対峙する。

「この時を待っていた」

一瞬タメを作り、腕を大きく広げつつ歓喜を表すオセロット。

「誰も手を出すなっ！」

首から下げていた、あの時のジャム弾を引きちぎり、シングル・アクション・アーミーに込める。シリンダーを回し、撃鉄を起こす。「これで終わりだ」

リボルバーを構え、トリガーを引く。空撃ち。スネークは意を決し、膝を軽く曲げ後ろに重心を傾けていく。奈落の底ともいえる滝つぼに飛び込むために。

「スネーク！」

どこか悲痛を感じるオセロットの叫び。走り出しながらスネークに向けたシングル・アクション・アーミーのトリガーを引く。再び空撃ち。その直後、ほぼ同時に跳んだスネークの体は、完全に宙へと投げ出された。頭を下に、逆Tの字に落下していくスネーク。大きな水飛沫と共に、長い滞空時間の後にスネークは滝つぼに飲まれた。

水面に顔を出したスネークが息を吸い込み、もがきながら下流へと流されていくスネーク。そのスネークを、サイトで狙いをつけようとするとオセロット。撃とうとするも、流石に遠すぎて狙えるわけもない。銃をさげ、シリンダーを開けたオセロット。弾丸は次に打ち出されるはずの位置にあったことを確認し、嬉しそうにトリガーに掛けた指で回しながらシングル・アクション・アーミーをしまう。「まだ死ぬな……」

ぼつりとつぶやいて、彼は引き上げていく。それを兵士達も追っていた。スネークは未だ、激しい水の流れに巻き込まれ、次第に

上も下も分からなくなり、溺れて川底の方へと沈んでいった

E s c a p e t o (後書き)

98度のウォッカ：ポーランド原産のウォッカ、スピリタスのこと。ポーランド語に倣うとすればスピリトゥス。ただし、正確には96度ほど。70回ほども蒸留を繰り返して作られる、世界最強のアルコール度を誇る酒。これ以上のアルコール度の酒は、理論的にも作成不可能。あまりにも強いため、飲むときにはタバコなどを含め火気厳禁。原産国でも直接飲む風習はなく、多くの場合ほかの国でもカクテルの材料にしたりする。味としては初めのうちは痛みを感じるほどであるが、それを過ぎると甘く感じるという。

気付けば、スネークはマングローブ林を両岸に流れる膝から腰ほどの水深の川を歩いてきた。そのマングローブは燃え盛っているが、不思議とあまり熱くは感じない。この場所は、どことなくグラニーニ・ゴルキーの南、チヨルナヤ・ビシエラを抜けた北にあるマングローブ林にそっくりであった。そんなことをぼんやりと考えながら進むスネーク。その途中、雨が降り始めた。ほどなく雨足を強め、マングローブの火を消してゆく。そんな中、雨で僅かに霞みはじめた視界で、まるで川底から現れたかのように人影が浮かぶ。

そんな人影に警戒するスネーク。雷が人影の被ったフードの中身を瞬間的に照らす。

「おまえもコブラ部隊か？」

「哀しい……哀しい……」

唇を動かさず、男は呟く。この雨で唇を動かさずにしゃべっているというのに聞こえるとは、不気味以外の何物でもない。が、そんなことはどうでもいい。

「哀しみが集う……お前も哀しみのひとつ……」

スネークの問いには答えずに呟いた男。後ろに退けられたフードから出てきたのは、細い、冷静さを感じさせるような長方形気味の眼鏡をかけた男の顔。だが、その顔に生気は感じられず、むしろ死相と言ってもいい。オールバックの濡れた髪を含め、どこか切なげな印象を受ける。

「俺はザ・ソロー。お前と同じく哀しみで満たされている」

いつの間にか消えていたフードのついた上着。その下に来ていた、灰色を基調とした独特の迷彩があらわになっている。眼鏡の奥の瞳から、血のような赤い涙が筋を作る。

「この世は哀しい……戦いは死を生み、死は哀しみを生む。届くまい、生きている者には。聞こえまい、彼らの声が。だがお前は知ら

なくてはならない。死者は決して、沈黙してはいないということを。お前が殺めた死者の哀しみ^{ソロー}を知るがいい」

そう言い残し、男はスネークから離れてゆく……が、どう見ても浮いて移動している。それも、スネークの方を向いたまま。信じがたいが、例えたとすればまさしく幽霊などの類だろう。スネークは少しだけ考えたものの、膝から腰ほどある水を押しのけつつ歩き始める。

歩き始めたスネークの視界に映ったのは、先程からスネークと一定の距離を置きながら後退していくザ・ソロー以外の人影。それも、今まで見たことのある軍服の者達だった。今までスネークが作戦中に殺めた者達だ。様々な人物が混じっているが、共通するのはすべてスネークに寄ってくるということだ。明らかに害意を持って。

反射的に持っていたシングル・アクション・アーミーで殴りつけるが、一瞬形がぼやけるように崩れるのみで、消し去ることは出来なかった。スネークは一つ舌打ちを打って構わず先に進んで行く。寄ってくる彼らの動きは幸いにも鈍く、避けられないほどではなかった。

「避けられるか！」

叫んできたザ・ソローの方を見やれば、ザ・ソローは両手を突出し、何やらうねりながらこちらへと迫る何かを撃ちだしてきていた。スネークは直角に曲がるように歩くことで何とか回避し、再び前進し始める。

様々な、スネークの殺めた方法がそのまま反映されたような「魂」達と、ザ・ソローの繰り出してくる攻撃をかわしながら進んで行くスネーク。途中、スネークと激闘を繰り広げたコブラ部隊の面々も襲ってきたが、何とか回避することに成功した。

「もう帰れ、お前の世界に」

長い間歩き続けたスネーク。ようやく視界から魂達が消え去ったスネークにザ・ソローが声を投げかけた。遠くで待ち構えていた彼に無意識に近い状態で近づいて行く。すると、足元に倒れていた骸に触れた瞬間、まるで死に至ったように倒れるスネーク。心なしか、丁度蘇生薬を仕込んだ辺りでかちりと鈍い感触があった。そのまま、スネークの意識はザ・ソローの言う「スネークのいる世界」へと戻っていく

川底付近で頂垂れるように溺れているスネーク。ザ・ソローと思しき声が耳に入ってくる

『ボス！ 俺を撃ってくれ！』

『できないっ！』

『撃て！！』

『……………』

『任務を遂行するんだろう？ なら撃たねばならない』

優しく諭すように声をかけたザ・ソロー。それに意を決したザ・ボスは銃を構える。

『戦士の魂は常に君と共にある。哀しむことはない……………また会える』
乾いた銃声が鳴り響き、ザ・ソローの眼鏡にヒビが入る。一瞬遅れ、血のような赤い涙が筋を作る。

意識を取り戻したスネーク。肺に息が行かぬ状況に、もがくように水面へと急浮上する。水面に顔を出したスネークは酸素を貪るように呼吸する。そのまま流されて川岸にたどり着く。どうにか川岸からきちんとした地面に移り、せき込みながら水を吐き出す。大量の水を吐き出し終えたスネークは辺りを見回す。

生命を湛える森。せせらぎと共に流れる川、木漏れ日、色鮮やかな蝶

森の息吹に生きているということを実感したスネークは、しばしその感動と光景に浸る。何とか立ち上がったところへ、無線機がc a l l音で受信を知らせる。

『大丈夫か、スネーク。危なかったぞ』

「俺は一体？」

『川底で溺れかけてたんだ。もう少しであの世いきだった』

「あの世……あれはあの世か？」

『どうした？』

「少佐、コブラ部隊にザ・ソローという男は？」

『ああ。聞いたことがある。ザ・ボスと共に戦った伝説の戦士だ』

「どういう奴だ？」

『ザ・ソローは……特殊な能力を持った男だ。当時ソ連で盛んに研究が進められていたESP。中でも霊媒能力に長けていた……』

「霊媒？」

『あの世と交信し、死人を降霊する能力だ。死者と話が出来る。死んだ兵士から戦況を聞いたりできたそうだ』

「……奴とザ・ボスは……何かあったのか？」

『私も詳しくは知らない……シギントに聞いてみよう』

『あいよ。ザ・ソローはとくに調査済みだ。報告するまでもないと思っただがね』

「どういうことだ？」

『ザ・ソローは死んでるんだよ。2年前に』

「2年前に死んでいる……」

『ツェリノヤルスク……あの断崖でね。殺したのはザ・ボスだ』

「ザ・ボスが？」

『ああ2年前、CIAの特殊任務でザ・ボスはツェリノヤルスクへ行った。そこで、大戦後コブラ部隊解散と同時にソ連へ戻っていたザ・ソローと再開した。敵同士として』

「……………それで？」

『ザ・ボスはザ・ソローをその手で殺し任務を遂行した。記録にはそうある』

「……………奴は最初からいなかった……………ザ・ボスに憑いて来たのか……………」

『大丈夫か？』

「ああ、大丈夫だ。どうやら俺はまだ死ねないらしい」

『そりゃあそうだ。全部あんたにかかっている。頼んだぜスネーク』
「わかっている」

スネークはシギント達との会話を終え、周波数をEVAのものへと合わせる。

「EVA？」

『スネーク！？ 連絡がないから心配したわ。大丈夫なの？』

「ああ。危つく別の世界へ行きかけたが」

『なんのこと？』

「いやなんでもない。とにかく俺は無事だ」

『よかった。でも、どうやって下水道から脱出できたの？』

「川に飛び込んだ」

『あそこから？ 無茶するわね』

「ああ。流されて死にかけたが」

『それはよかった』

「よかった？」

『いえ。川に流されたなら、近くに良い場所があるのよ。そこで合流しましょう』

「どこだ？」

『そのまま川上へ進んで。滝があるわ』

「滝か」

『そう。その滝の裏が洞窟になってるの。そこで会いましょう』

「川を上ったところにある滝の裏だな」

『じゃあ、あとで』

そういつて無線は切れた。スネークは早速、その洞窟を目指すべく行動を開始した。

ティホゴルヌイの滝裏にて

EVAの言う滝の裏をめざし行動を開始したスネーク。その美しい景色を見る暇もなく、その道なき道を進んで行く。途中身長の一、三倍はある小規模な滝を、その近くにかかっていた丸太から飛び乗ってかわし、川に沿うように、しかし途中でもう一度倒木に遮られたときには脇道を行き、あまり長くない距離を歩く。すると、目の前に広がったのは轟々と音を立てて落ちてゆく巨大な滝。高さはあまりないが、その雄大さは、やはり滝そのものだった。

スネークはその滝の裏にある細い道を慎重に通り、その中へと足を踏み入れる。音を立てる滝を背に、シングル・アクション・アーミーで一通りクリアリングにも似た警戒を巡らせていく。奥に周りとは違い明らかにコンクリートで作られたトンネルがある。そこへ向かって歩く途中、地面が盛り上がった場所を踏んだ。ただ盛り上がっている場所なら気にしないが、どうも灰か炭でも踏んだような感触。足元に目をやって確認すると、それは焚火の跡だった。一つ、即席ラーメンの袋も混じっている。左を向けばトランク型の無線機。明らかに人のいた跡である。焚火の燃え残った炭に手を触れ、確認する。

そんな直後、スネークが背後に突如現れたエンジン音に、素早く立ち上がって銃口を向ける。

滝を割って現れたのは一台の大型のバイク。見覚えのあるそのバイクに跨ったのは、ずぶ濡れになった緑色の軍服を着ている女性。そのバイクはトンネル前でターンしながら急停車した。

「初めましてスネーク？ 私がタチアナ」

ヘルメットを脱ぎながら、タチアナと名乗った彼女。スネークを照らしていた照明を含め、エンジンを切った辺りが静寂を取り戻す。彼女はバイクから降り、ボトリと鈍い音を立てさせながらバッグを

落とす。ベルトに付属するようにいくつかの装備などをしまっ形状のそれは、スネークが見覚え無いはずはなかった。

「あなたの装備品よ」

「ずぶ濡れだぞ、EVA」

「そっついうあなたもね」

火花を爆ぜさせつつ、洞窟の中で煌々と焚火が燃えている。そんな焚火で焼かれた蛇や魚に、スネークは嚙り付いていた。最近、スネークが野生化しているとパラメディックがため息をついているのは、彼に知る由もないことではあるが。

食べていた魚の残骸を捨て、新たに蛇を手に取る。そんな彼が、足音と気配に気づいて蛇に嚙り付いていた顔をあげると、そこには黒い下着のみの姿となったEVAが立っていた。相変わらずというべきか、男受けするスタイルである。そんな彼女に対して、スネークのとつた行動と言えば

「いるか？」

「私はいい」

「蛇は嫌いか？」

「食べるのはね」

そう言っつてEVAはスネークの対面に焚火を挟んで腰を下ろす。

脚を投げ出すように、所謂女座りというやつだ。

「KGBでは食べなかったのか？」

「私の訓練は、もっぱらフレンチとかイタリアンとか……そっつちの方……」

「マタ・ハリか」

「せめてシンシアと呼んでほしいわ」

「どうなんだ？ 自国相手にスパイするというのは？」

「いい気持ちはしないわ。でも、仕事だから」

「任務でも蛇は食えないか……」

「あなたなら食べたい」

雰囲気一転、彼女はスネークの隣に這いよる様に近づき、腰を下ろす。

「この任務が終わったら、おいしいディナーをごちそうしてね」

「何がいい？」

「そうね……スシとかどう？」

「スシ？」

「ニッポンの食べ物。最近流行ってるみたい。魚を生で食べるそうよ」

「生で？ サバイバルな国だな」

明らかに「生魚なまひしかな」と「生魚生きてままの魚」を勘違いしているスネーク。そんな彼の勘違いを知ってか知らずか、どちらからともなく笑い出す2人。そんな2人の近くを、一匹の蛾が漂うように飛ぶ。右手を伸ばし、その蛾を捕まえようと試みたスネーク。しかしその右手は、大して動いてもいない蛾を捉えることは叶わなかった。それに少なからずシヨックを受けた彼は、項垂れるように首を左に曲げる。

「スネーク？」

そんな彼の首にもたれかかるように、EVAが腕を回す。

「スネーク。ありがとう。私、あなたの眼になる」

スネークの右頬、新たに着けた眼帯の辺りに、軽くキスを二度落とす。

「ありがとう、スネーク」

若干鳴き声になりつつ、彼女は言った途端、今度は唇同志を触れ合わせる。幾度も、そして深くキスをする彼女を、スネークがそつと制し、顔と体をそむけるように座りなおす。

「気にすることはない」

「大丈夫？」

演技ではなく、まるで心から、いや、本当に心から心配する彼女に、スネークは向き直る。

「見えない訳じゃない。片目があれば銃は撃てる」

「そう。よかった」

着替えを含め、その他準備を終えたスネーク。左胸のケースにCQC用のナイフをしまい、M1911A1のスライドを操作し、弾丸を薬室チャンバーに送り込み、腰の後ろへつけてあるホルスターへしまう。同じく出発の準備をあらかた終え、バイクのリアにある荷物をいじっているEVAに声をかける。

「EVA。君が奴等から爆薬を盗んだと聞いたが」

「C3。西側の高性能爆薬よ。粘土みたいに形が変わるの。これだけで、シャゴホッドごと兵器廠を爆破できるわ」

「本当に？」

彼女が見せたその爆薬は、直方体状の黒い塊。細長いそれは、彼女の握りこぶしより一回りか二回り細く、そして彼女の拳二つ分ほどの長さである。たったそれだけしかないというのに、兵器廠ごと吹き飛ばせるという。にわかには信じがたいが、やはり西側の技術には舌を巻くしかない。

「ええ。だけどコツがいる」

「教えてくれ」

頼んだスネークに、彼女は無言でそのC3の半分ほどを手渡す。本当に粘土のように形を変えられるらしい。

「どう？ これ？」

彼女が後ろに振り向いて「そこそとやっていたのは、その余った爆薬をハートマークに整えていたらしい。差し出されたそれも受け取ったスネーク。」

「シャゴホットのブースターユニットには、液体燃料を使うわ。そのタンクが兵器廠の本棟……シャゴホットの格納庫にあるの」

「そのタンクを爆破する？」

「そういうこと。格納庫ごと吹き飛ばさずよ。液体燃料のタンクは4ヶ所。格納庫ごと潰すには、全てのタンクに爆薬をセットする必要があるわ」

「4ヶ所全てにか」

「あなたならやれるわ。それに科学者達は今日、休養日なの」

「では格納庫は無人？」

「いいえ、警備は残ってる」

「そうか。で、セットしたら？」

「爆薬はタイマー式になってる。タイマーを起動したらカウントダウンが始まるわ。ゼロになったら、全ての爆薬が連動して爆発する」

「猶予は？」

「20分。フェイズ2の実験が終了したから、科学者達は口封じの為に殺されるかもしれない。破壊を急いだほうがいいわ」

「わかった」

「EVA、ソコロフからシャゴホットのデータを受け取ったな？」

「ええ。それが任務だから」

「フルシチヨフか」

「そうよ。アメリカには必要ないものでしょ」

そう言って、彼女はスネークに歩み寄る。

「？」

「もう一つの任務も忘れてないわ」

両手でスネークの顔を包むように触れる。

「あなたのサポート。あなたはこの先を進んで。奥のハシゴを上ればグロズニイグラード内部、兵器廠の南西に出るわ。ソコロフを助けに行つた時のこと、覚えてる？ 東棟の2階から本棟へ入つたところに、鍵のかかつた扉があつたでしょ？」

「ああ」

「そこがシャゴホツドの格納庫への入り口よ。これで扉が開くわ。彼女が手渡した鍵が、スネークの掌で音を立てる。シンプルな、家の鍵と渡されても違和感のない、飾り気のかけらもない鍵。

「本棟へ入つたところにある扉だな。わかつた。君は？」

「私は脱出ルートを確保する。北に大きな鉄橋があるの。そこに爆薬をセツトする。C3を半分もらつていくわ」

「わかつた。俺は兵器廠を破壊する。くれぐれも兵器廠こぶちにはちかづくな」

「わかつたわ」

「それとオセロツトに気をつける。君の正体を疑っていた」

「大丈夫よ。大佐はまだ私を信じてる。まだやれるわ。私の魅力の前には誰も……」

ふつと鼻で小さく笑つたスネークに、「あなた以外はね」と、若干すね気味に言うEVA。よほど自信があつたらしい。

「EVA 注意するに越したことはない」

「わかつてるわ。それじゃ行きましょう」

そう頼もしげに言つた彼女はバイクに跨る。

「バイクに乗つて生まれてきたみたいだな？」

「毎日乗らないと生きていけないの」

「え？」

「風が私を強く打つ。痛いほど。その痛みが偽りの私を癒してくれる。自分を騙しつづけるのは難しいわ。でも……こうしてバイク

に乗っている時だけ、本当の自分を開放できる。私がバイクから降りる時は……死ぬ時か、恋をした時……」

「君の名前は？」

「タチアナ」

「いや　　本当の君……」

スネークのその言葉に、眼鏡をかけながら笑うEVA。

「ターニヤは嫌い？」

冗談めかして言う彼女に、喉を鳴らすように苦笑したスネーク。

「ターニヤ。見つかるなよ」

そう言ったスネーク。と同時に、ひとつのシャッター音が聞こえた。疑問を持ったスネークが、彼女の服を覗き込む。

「これ？ ボタン式のカメラ」

「どうするつもりだ？」

「保険よ。あなたが裏切らない為の……」

そこまで言っただけで彼女はヘルメットを被り、ペダルを蹴ってエンジンをふかす。華麗に180°のターンを決め、滝にその前進方向を向ける。

「おいっ！」

「何っ！」

「また濡れるぞ！」

そんなスネークの忠告など聞こえていないかのように、彼女は躊躇なく滝に向かって突っ込む。直前、前輪を持ち上げて飛び、盛大に滝を吹き飛ばすように弾きながら行ってしまふ。そんな彼女にふっ、とため息でもつきたげに首を振るスネーク。しかしすぐに、スネークは行動を再開した。

ティホゴルヌイの滝裏にて（後書き）

マタ・ハリ：本名マルガレータ・ヘルトロイダ・ツエレ（Margaretha Geertruida Zelle）。フランスのパリを中心に活躍した踊り子、ストリッパー、高級売春婦として知られる。「マタ・ハリ」はダンサーとしての名で、スパイとしての彼女はもちろん本名も名乗っていない。世界で最も有名な女スパイとして、女スパイの代名詞的存在にまでなっている。第一次大戦中、スパイ容疑でフランスでとらえられ、処刑された。彼女の生涯について、特に銃殺間際に関しては様々な逸話が残されているが、真偽が定かではないものも多い。

シンシア：本名エイミー・エリザベス・ソープ。第二次大戦中のイギリスのスパイで、美しく聡明であったという。その魅力と知力を武器に、数々の機密情報を手に入れているという。シンシアはいわゆるコードネーム。

「あなたの眼になる」：オレグ・ペンコフスキーというスパイの言葉。GRUに浸透していたが、KGBに確保、処刑されている。丁度スネークイーター作戦の一年前。当時のCIA長官に「あなたの眼と耳となり、前線で闘う」という手紙を送ったという。彼の暗号名は「英雄」である。このことを原作ではゼロ少佐に無線で「思いついた」と聴くことができる。そのことに対しスネークは「表に出ることのない英雄か」とつぶやくようにいい、少佐は「ああ。それが我々の世界だ」と返している。少佐はこの言葉が胸にしみているようで、会話の開始は「『あなたの眼になる』か……泣かせるな」だった。

スシ：言わずと知れた「寿司」のこと。丁度60年代にアメリカで流行りだした。カリフォルニアロールなど、後に世界に広まった寿司はその地域ごとに独自の進化を遂げているようである。もともと「ロウフィッシュ」つまり生魚を食べなかつた海外諸国の多くであるが、「ヘルシー」という点で注目を集めた模様。地域独自の進化を含め、最近では「ヘルシー」だけではなく「美味しい」食べ物として世界各国で日本の代表的な食べ物として親しまれている。今日では日本人の板前が海外で店を開いているケースも多い。逆に海外でスシに興味を持った人々が寿司目当てに日本に来ることもあるらしい。もはや寿司は「ワールドワイドなジャパニーズフード」として広まっている。

S n a k e s R e v e n g e

EVAの言うとおりトンネルを進み、その奥にある梯子に手をかけ上ってきたスネーク。正方形のマンホールを押し上げ、辺りを警戒しながら音を立てないようそつと戻す。息が白くなるほど寒いここ、ソ連では手がかじかみそうになる。

マンホールを無事に落としたのもつかの間、右手にあるフェンスの外から聞こえてきたエンジンとタイヤの走る音が近づいてきたことに気付き、慌てて近くに止まっていた戦車群の一台に隠れる。直後、フェンスの向こうから現れたのは装甲車だった。人員輸送用のBTR-152は確か十七名の戦闘員を一気に乗せることが可能だったはずだが、今は幸い運転手のみらしい。M1911A1とCQCナイフを握る手に思わず力が入るが、対するBTR-152の運転手は呑気に下りた後伸びびをしてから門を閉めて行ってしまった。それに少し安心したスネークが改めて装甲車のタイヤを見れば、やはりマンホールの上にタイヤが乗っかってしまっている。後戻りはできなくなった。

戦車の影を縫うように移動し、中央付近に集まっていた三人の敵兵をやり過ごして、兵器廠東棟へと向かう。途中、訓練を受けていた兵士が走っていたため隠れることに難儀したが、一度障害物の配置を覚えてしまっているため、難なく再び兵器廠への潜入を済ませることが出来た。

辺りに敵兵がないことを確認して、素早くタイーガストライプ迷彩を脱ぎ、白衣を着る。最後に眼鏡をかけ、ジョニーからもらっていた麻酔タバコを取り出しておく。本来ならばライコフ少佐へ化けた方がやりやすいのだが、既にその変装はばれてしまっているし、そのライコフへ変装をする際、彼を殺害してしまっている。今は彼

に変装しても無意味だ。なら、普通に迷彩服を使って潜入するより、科学者に変装したほうがまだやりやすいというわけである。

科学者達は自分の顔を見れば偽物だと分かるであろう。だから、普段彼らが居そうな資料室や研究室の類は避けたほうがいい。以前来た時その配置はなんとなくわかつている。寄り道をせず階段を上り、即座に二階へと向かう。以前ライコフを待ち伏せした時のデスクのたくさんある部屋を通り過ぎ、ロッカールームへと差し掛かる。ふと、何か役立つものがあるのではないか、という淡い期待から、片っ端からロッカーを開けていく。鍵のかかっているものも多いが、収穫もそれなり。レーションも手に入り、幾ばくかの弾薬も手に入った。食糧もあったがチスイコウモリだったため、有り難く無言で扉を閉める。正直、チスイコウモリは食べる部分がほとんどなく、持っていてはかさばるだけである。そんな中、特にスネークの興味を引いた物が二つ。一つは少し濃いめの水色と白の二色の作業服。これは恐らく、シャゴホッドの開発、製造に携わっているメンテナンスクルーの制服だろう。

そしてもう一着、服が出てきた。以前ライコフを隠した、見るからに丈夫そうなあのロッカーからで、僅かに光沢をもった黒系のそれ。入っていた箱には、「スニーキングスーツ」と記されている。触って確認するとかかなり頑丈な作りになっているのが分かる。辺りに敵兵がないことを再確認し、装備してシギントへ無線をかける。やはり、こういったことは彼に聞くべきだろう。

『あんだ、かわったモノを着ているな』

「ああ。スニーキングスーツというらしい」

『スニーキングスーツ？ なんだいそりゃ？』

「わからないが、ザ・ボスが着ていたものと似ているな……」

『そうか。とにかくそいつは優れものだぞ。どうやら特殊な防弾繊維で作られているらしい。着ていればあらゆるダメージを半減させることが出来るだろう。耐水性能に保温や保湿も完璧だ。着ている

だけでスタミナの消耗も抑えられる。カムフラージュ効果も総じて高くなるだろう。いいものを手に入れたな」

「ああ。『FOX』の制式戦闘服にしたいくらいだ」

そう言つて無線は切れる。なるほど、まだ非公開らしきこのスーツだが、かなり優れたものだというらしい。確かにいいものを手に入れた。ザ・ボスの着ていたもののバリエーションなのかもしれない。

とにかくスネークは腰を上げ、再び兵器廠本棟を目指す。ロツカ一室の角にある扉を抜け本棟へと入り、角を二つ曲がつてすぐの扉に鍵を差し込む。EVAからもらった鍵は確かにこの扉を開くためのものであった。一度隠れて、先程手に入れたメンテナンスクルーの制服に着替える。次いで、バツクパツクからEVAから預かったC3爆薬とタイマー式起爆装置を取り出し、準備を終える。麻酔タバコを口に加えつつ、扉を再度あけて兵器格納庫へと侵入した。その後、ゼロ少佐からの無線連絡が入った。

「スネーク、格納庫に潜入できたようだな」

「ああ。ここにシャゴホッドがある」

「フェイズ2が完了したシャゴホッドは西側にとって大きな脅威になる。量産させるわけにはいかない。必ず破壊するんだ」

「EVAがシャゴホッドのデータを手に入れている。それでいいのか？」

「いいとは言えん。だがフルシチヨフは賢明な指導者だ。抑止以外の使い方はしないだろう。だがヴォルギンはまずい。奴はシャゴホッドの力を背景に冷戦を、灼熱の戦争に帰るつもりだ。奴にシャゴホッドを持たせてはならない」

「わかつてる」

「もうひとつの任務も残つてはいるが……」

「ザ・ボスの……」

「そつだ」

「……………」

『今はシャゴホツドの破壊に集中してくれ』

「……了解」

『爆破の方法はシギントから伝えてもらおう』

『あいよ。EVAが言っていたように、その格納庫全体を吹っ飛ばすなら、液体燃料のタンクをC3で爆破するのが一番だろう。タンクは4ヶ所あるって話だよな。その全てにC3を仕掛ける必要がある。ただ、間違った場所に仕掛けるのはやめてくれよ。C3は必要分しかないんだろ？』

「そうだな。では設置場所以外にC3は仕掛けないことにする」

『そうしてくれ。あと気をつけてくれよ、液体燃料はちよつとした衝撃で爆発するんだ。自殺したいんでもなけりゃ、タンクの近くで銃火器は使わないことだ』

「わかった」

『格納庫を一撃で吹き飛ばすには、全てのC3を同時に爆破する必要がある。時限装置をスタートさせるのは設置がすべて終わってからのほうがいいだろうな』

「了解した。4カ所全ての設置が終了してからタイマーを入れることにする」

『時限装置は20分で爆発するんだつたよな？ 必ずそれまでに脱出してくれよ。まあ説明はこんなところだな。あとはあんた次第だ。健闘を祈るよ』

『スネーク、頼んだぞ』

無線を終え、スネークは行動を開始する。タンクは4つ、それぞれ全てにC3を仕掛けるが、このとき注意しなければならない点はいくつかある。まず、液体燃料は衝撃に弱いため、近くで銃火器を用いた戦闘は自殺行為であること。そして、C3をこの格好でもつていけば流石に怪しまれる。普段は隠しておいたほうがいいだろう。そしてもう一つ。それは何より、C3を仕掛けるところを誰かに見られてはいけないということだ。20分もあれば、爆弾はどうにか

不発にされてしまっただろうし、それ以降爆薬を仕掛ける暇もなくなってしまう。絶対に、誰にも見られてはいけない。

スネークは目の前にある階段を下りる前に、大まかにタンクの位置を把握しようと試みる。すると、3つのタンクは位置を確認できた。シャゴホツドの四隅、というわけではないが、おおよそ正方形を描くように配置されている。それならあと一つのタンクも探すのは苦勞しないだろう。スネークはまず、階段を下りてまっすぐ進んだ場所にある一番近いタンクを目指し始めた。

シャゴホツドのすぐそばにある一つ目のタンクにたどり着いたスネーク。敵兵とメンテナンスクールがそれぞれ一人ずつ近くにいるが、幸い敵兵は自分に背を向けた位置を重点的に警備しているし、メンテナンスクールからはこちらはタンクの影になる。スネークは敵兵の方を向くようにタンクに背をつけ、メンテナンスクールの気配に気を配りながら、取り出したC3をタンクに設置する。一つ目は完了した。

次いで二つ目だ。即座に先程のメンテナンスクールを麻酔タバコで眠らせ、怪しまれないうちに無力化。そして素早く大きなコンテナの影になっているタンクに近づき、迅速にC3を設置する。しっかりと設置されたことを確認してタンクから背を離れた瞬間、狙ったように無線機がcarrier音を鳴らす。

『スネーク?』

「EVAか」

『私の方は鉄橋への爆弾セットが終わったわ。ここを落とせば、敵は追ってこられない。少なくとも時間稼ぎはできるはずよ。脱出ルートも確保した。そっちは?』

「今、ふたつ目が終わったところだ。あともう少しかかる」

『そう、じゃあ。鉄橋で待ってるわ』

そう言っつて無線は切れ、スネークは行動を再開する。

残った二つのC3のセットに取り掛かったスネークは、既に最後のタンクの前にたどり着いていた。C3のタイマーについているダイヤルを回し、時間をセットする。スイッチをオンにし、タイマーがスタートした。最後に残ったC3を取り出す。EVAから受け取った、ハート形のそれだった。ふとその形をみてEVAを思い出し、微笑むスネーク。手を止め、おもむろにC3をこねはじめる。

完成したC3を摘んで見つめるスネーク。ハート形だったそれは、洞窟でつかみ損ねた蛾の形だった。それを数回放つてはキャッチし、三度目に放り投げたそれは、宙を高く舞って落下を始める。あの時とは違い、今度はしつかりとキャッチしたスネーク。

「今度は逃がさない」

スネークは小さく笑い、蛾の形をしたそれを握りつぶして、掌を使って叩きつけるように起爆装置に押し付ける。そして、セットされたのを確認すると少佐へと無線をつないだ。

「少佐、C3のセットを完了した。今から脱出する」

「スネーク、急げ！ 脱出ルートはEVA任せか？」

「そうだ」

「大丈夫か？」

「彼女なら大丈夫だろう」

「そうか。とにかく脱出を急いでくれ」

スネークは警戒を解かず、M1911A1とCQCナイフを構えながらゆっくりと進むスネーク。そんな中、聞き覚えのある声で怒

号が響いた。

「スネーク！」

ヴォルギンらしき声の方、シャゴホツドの正面の辺りを見れば、そこにはシャゴホツド前でEVAが倒れていた。縛られてはいないようだが、傍に立つヴォルギンとオセロツトが拘束以上の力を持つことは目に見えている。いつものタチアナの服装から、眼鏡を外され、ブーツは紐編みのバイク用のものになっており、前髪もおろされている。

そんな状況に咄嗟にとすべき反応で構えたスネークだが、突如として投げ飛ばされ、呻きを上げる。その犯人はザ・ボス。

「どうして戻ってきた？」

銃を投げ捨てた後に突き付けられた冷たいザ・ボスの声。しかしその中には、僅かに弟子を心配したような感情を感じられる。

にじり寄り、右半身を前にした構えから、素早くナイフを持った左腕を突き出すスネーク。回り込むようにかわされ、反射的にバツクナツクルの要領で腕を叩きつける。しかしそれも受け止められ、ザ・ボスが片膝をつく状況ではあるが唾是り合うような体勢に持ち込まれる。素早く立て直され、腰に食らった一撃と腕を捻られ後ろに回された痛みと悲鳴をあげるスネーク。そのまま硬い床に腰から捨てるように投げられ、苦悶の声を上げる。しかしスネークも負けではいられない。カポエラのように脚を振り回しザ・ボスに距離を取らせ、その隙に起き上がる。

刹那の睨み合いの後、スネークの右拳を受け止め、カウンター気味に左拳がスネークの顔を捉える。続けて繰り出された右拳を捉えるが、視線が交差した直後にその右腕一本で投げ飛ばされる。背中側に一回転し、腹部から落ちるスネーク。立ち上がるうとしたスネークの後頭部数？に、銃口が突き付けられる。オセロツトのシングル・アクション・アーミーだった。

オセロットに銃口を右側頭部に向けられた状態で、スネークは立っている。その対面にいるのはヴォルギン大佐とその足元にEVA、そしてヴォルギンより少し離れて、ザ・ボスが立っている。

緊張に包まれ、辺りには継続する低い機械の稼働している音だけが聞こえる中、ヴォルギン大佐がにやりと笑みを浮かべる。

「この女、地下金庫をうろついていた」

この女、とはもちろんEVAのことだ。鉄橋で待っていると聞いていたはずであるが……

「捕らえてみると面白いものを隠し持っていた」

そう言っ取り出したのは、マイクロフィルム。

「『賢者の遺産』だ」

ヴォルギン大佐のその発言に、スネークを含め三人が驚きの表情を見せる。オセロットはおろか、ザ・ボスも見た事はなかったらしい。

「このマイクロフィルムに遺産の全てが収められている。このフィルムがまさに『賢者の遺産』そのものなのだ」

「臭いだ。臭いでわかった」

突然そう切り出したのはオセロット。どうやらEVAがスパイと分かった理由のようだ。スネークに銃口を突き付けたまま周囲を歩く。その語調はどこか自慢げだ。

「いや、香水ではない。ガソリンの臭いだ。バイク用のな。女にガソリンの臭いが染みついていた」

「この女タチアナがスパイだったとは……連絡用無線機も見つけた」

そういつてヴォルギンが数歩歩いた先にあるのは、トランク型の無線機。真空管などが大量に使われていたそれに手を向け、電撃を放つ。小規模ともいえないような爆発の直後、黒く焦げた無線機が煙を上げる。

「なかなかいい女だった。殺すには惜しい……」

EVAの髪を撫でながらにやりと笑みを浮かべて言うヴォルギン。喉をえづいていような不気味な笑いをあげながらたちあがる。

「何でも言うことを聞いたな。私の言いなりだった」

いった直後、かなり力のこもった蹴りをEVAの腹に入れる。その衝撃でEVAが苦悶の声を上げ、意識を取り戻す。それを見て動き出しかけたスネークにすかさず銃口が近づけられる。

「そうだなっ！」

そんな大佐に向かい、荒い息の合間に小さく「このくそ野郎」と悪態をつくEVA。その口の動きに、ヴォルギンが気付いた。

「なんだ？ いいたいことでもあるのか？」

そう言うてにやにやと笑みを浮かべながら屈んだ大佐。対してEVAは腰の後ろで気付かれぬよう、例の口紅を^{キス・オブ・デス}取出し、キャップを外す。

「ファック・ユー……」

しかし、突如振られた左手を掴んだヴォルギン。電撃を浴びせ、それにEVAは苦悶の表情を作る。左腕を引き上げられ、キス・オブ・デスが手から零れ落ちる。ザ・ボスは見ていられなかったのか僅かに顔をそらす。

「この淫売がつ！ 貴様^{キス・オブ・デス}のキスはもういらぬわ」

投げ捨てられたEVAにそう吐きかけた大佐は、再び腹部へ蹴りを見舞う。

「気づくべきだった。ソコロフは愛人を囲うような大物ではない。

色仕掛けとはKGBの連中のやりそうなことだ」

「『賢者の遺産とはなんだ？』

「よかるう。殺す前に教えてやる」

S n a k e s R e v e n g e (後書き)

S n a k e s R e v e n g e : タイトルのこれは、海外でのみ販売されたMSX版メタルギア1.5ともいうべき作品。初代METAL GEARが日本でMSX対応ソフトとして販売され、海外でも人気を博した。その結果を受け、制作されたのがファンの間でMETAL GEAR 1.5と呼ぶこともあるMETAL GEAR SNAKES REVENGEだった。残念なことに、日本では発売されていない。このSNAKES REVENGEの人気をうけ、2の制作を決定したといううわさもないこともない。

B T R - 1 5 2 : ソヴィエト製装甲人員輸送車。1962年に製造は中止している。17名ほどの人員を輸送可能で、内部から射撃できるガンポートが側面にそれぞれ三か所存在する。また、7.26mm機関銃を搭載し、速度としては約65km/h程であった。派生形が多く、様々な国で使われた。

スニーキングスーツ：メタルギアシリーズおなじみの装備。作品によって見た目などが異なる。主に青や水色か紺、紫などの色が多く、黒に近いことも多々ある。多くの作品で潜入任務に汎用的に使える優れたもので、最先端技術が使われていることが多い。敵方のキヤラが着用していることもあり、本作でも敵国側の物を使用する結果となる。MGS3原作やMGSPW原作では、迷彩服と比べると汎用性が高いものの、適当な迷彩を着た場合大抵カムフラージュ率が迷彩服に劣る。だが、3ではダメージとスタミナ現象を抑え、PWではライフの回復が早く足音がしなくなる、など、アドバンテージがないわけではない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2365u/>

METAL GEAR SOLID ~ BIG BOSSの軌跡 ~

2011年11月8日03時13分発行